

加賀市

大菅波コショウズワリ遺跡

2022

石川 県 教 育 委 員 会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

おおすがなみ
大菅波コショウズワリ遺跡

2022

石川県教育委員会
(公財)石川県埋蔵文化財センター

例 言

- 1 本書は大昔波コシヨウズワリ遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は加賀市大昔波町地内である。
- 3 調査原因は北陸新幹線建設事業(金沢・敦賀間)で、同事業を所管する独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は公益財団法人石川県埋蔵文化財センター(以下「県埋文センター」)が石川県教育委員会から委託を受けて、平成28(2016)年度から令和3(2021)年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書作成、報告書刊行である。現地調査については、発掘作業および空中写真図化作業等に係る関連作業の支援を、平成28年度に株式会社島田組、平成29年度は株式会社アーキジオに委託し、県埋文センターの監理のもと実施した。なお、本書には令和2年度に石川県教育委員会文化財課が実施した工事立会(110㎡)の記録を掲載した。
- 5 調査に係る費用は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構が負担した。
- 6 現地調査は平成28・29年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者(当時)は下記のとおりである。

【第1次調査】

期 間 平成28年9月26日～同年12月14日
面 積 1,800㎡
担当課 調査部 国関係調査グループ
担当者 久田正弘(課長補佐) 西村翼(嘱託調査員)

【第2次調査】

期 間 平成29年4月14日～同年7月31日
面 積 3,370㎡
担当課 調査部 国関係調査グループ
担当者 立原秀明(主幹) 西田昌弘(専門員)
横山純子(嘱託調査員) 西村翼(嘱託調査員)

- 7 出土品整理は平成30年度～令和元年度に県埋文センターが実施し、調査部国関係調査グループが担当した。遺物実測・トレース・観察表作成・遺物番号注記作業は、平成30年度には株式会社上智・株式会社ラング、令和元年度には株式会社島田組に委託して行った。
- 8 自然科学的分析は令和元年度に株式会社パレオ・ラボに委託して行った。
- 9 報告書作成は令和2・3年度に実施し、令和2年度は調査部国関係調査グループ、令和3年度は調査部国関係調査グループが担当した。執筆分担は下記のとおりである。編集は久田が行った。
第1～4章：西山美那(国関係調査グループ嘱託調査員)、第5章第1・2節森 将史、第3節野口真利江、第4節小林克也、第5～7節藤根 久(株式会社パレオ・ラボ)、第6章：久田正弘(国関係調査グループ主幹)
- 10 調査には下記の機関の協力を得た。
加賀市教育委員会、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、赤澤徳明、浅野豊治、石川日出志、高田秀樹、刀根比呂子、藤根 久、吉田 淳、米澤義光
- 11 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

12 本書についての凡例は下記のとおりである。

- (1) 遺構実測図その他の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
- (2) 水平基準は海拔高であり、T.P.(東京湾平均海面)による。
- (3) 出土遺物番号は挿図、観察表、写真で対応する。なお、実測番号との対応については、出土遺物観察表に記載している。
- (4) 遺物の実測番号は、土器・石器・金属器の種類に関係なく連番号を付した。
- (5) 遺構の名称は、下記の略記号に番号(算用数字)を付し表記した。
SB：掘立柱建物、SI：周溝をもつ建物、SD：溝、SK：土坑、SF：道路状遺構、P：柱穴・小穴、
NR：河川跡、SX：その他

目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 整理作業の経過	3
第2章 遺跡の位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 第1次調査	8
第1節 概要と基本層序	8
第2節 1区の遺構と遺物	8
第4章 第2次調査	36
第1節 概要と基本層序	36
第2節 2区の遺構と遺物	36
第5章 自然科学的分析	89
第1節 花粉分析	89
第2節 寄生虫卵分析	92
第3節 珪藻化石分析	93
第4節 樹種同定	96
第5節 石質同定	103
第6節 ガラス質安山岩製石器の産地推定	106
第7節 黒曜石製石器の産地推定	108
第6章 総 括	111

報告書抄録

写真図版

挿 図 目 次

第1図	北陸新幹線(金沢・敦賀間)概略図	1	第36図	2区SB5実測図(1/60)	49
第2図	遺跡の位置	4	第37図	2区SB6・8実測図(1/60)	51
第3図	周辺の遺跡(1/25000)	6	第38図	2区SB7実測図(1/60)	52
第4図	調査区位置図(1/5000)	6	第39図	2区柱列等実測図1(1/100・1/60)	53
第5図	大昔波コショウズワリ遺跡調査区全体図(1/500)	9	第40図	2区柱列等実測図2(1/100・1/60)	54
第6図	調査区グリッド配置・主要遺構配置図(1/1000)	10	第41図	2区S11等実測図1(1/100・1/60)	56
第7図	1区全体図(1/500)	11	第42図	2区S11等・SK実測図(1/60)	58
第8図	1区調査区壁断面図1(1/500・1/100)	12	第43図	2区SX・土坑群実測図(1/60)	60
第9図	1区調査区壁断面図2(1/100)	13	第44図	2区土坑群ビット実測図(1/60)	61
第10図	1区部分図1(1/250)	14	第45図	2区SD1・2実測図(1/150・1/60)	63
第11図	1区部分図2(1/250)	15	第46図	2区SD4・5・SK実測図(1/150・1/60)	64
第12図	1区SB01実測図(1/60)	16	第47図	2区SD9~12実測図(1/250・1/60)	65
第13図	1区SB02実測図(1/60)	17	第48図	2区SF1~3・SK10実測図1(1/200・1/60)	67
第14図	1区SB03実測図(1/60)	18	第49図	2区SF1~3実測図2(1/60)	68
第15図	1区SB04実測図(1/60)	19	第50図	2区KN01実測図1(1/200・1/60)	70
第16図	1区遺構図1(1/150・1/60)	21	第51図	2区KN01実測図2(1/60)	71
第17図	1区遺構図2(1/100・1/60)	22	第52図	2区出土遺物1(1/3)	75
第18図	1区遺構図3(1/100・1/60)	24	第53図	2区出土遺物2(1/3)	76
第19図	1区遺構図4(1/80・1/40・1/10)	26	第54図	2区出土遺物3(1/3)	77
第20図	1区出土遺物1(1/3)	28	第55図	2区出土遺物4(1/3)	78
第21図	1区出土遺物2(1/3)	29	第56図	2区出土遺物5(1/3・1/2)	79
第22図	1区出土遺物3(1/3・1/2)	30	第57図	2区出土土器6(1/3・1/1)	80
第23図	1区出土遺物4(1/3・1/2・2/3)	31	第58図	2区出土木製品1(1/4)	81
第24図	1区出土木製品(1/4)	32	第59図	2区出土木製品2(1/6・1/4)	82
第25図	2区全体図・調査区壁断面図(1/500・1/60)	37	第60図	2区出土木製品3(1/4)	83
第26図	2区西壁断面図(1/60)	38	第61図	大昔波コショウズワリ遺跡における花粉分布図	90
第27図	2区2面全体図(1/150・1/60)	39	第62図	遺跡周辺の地質図	106
第28図	2区部分図1(1/250)	40	第63図	ガラス貫安山岩産地推定判別図(1)・(2)	108
第29図	2区部分図2(1/250)	41	第64図	黒曜石産地推定判別図(1)・(2)	110
第30図	2区部分図3・SK15・16(1/250・1/60)	42	第65図	旧石器・弥生時代の遺構・遺物出土位置図	112
第31図	2区SB1実測図(1/60)	43	第66図	古代の遺構・遺物出土位置図	112
第32図	2区SB2実測図(1/60)	45	第67図	古墳時代の遺構・遺物出土位置図	113
第33図	2区SB3実測図(1/60)	46	第68図	中世の遺構・遺物出土位置図	114
第34図	2区SB3・4(1/60)	47	第69図	近世の遺構・遺物出土位置図	114
第35図	2区SB4土層注記	48			

表 目 次

第1表	調査・整理体制組織表	3	第14表	試料一覧表	93
第2表	周辺の遺跡一覧表	7	第15表	堆積物中の珪酸化石産出表	95
第3表	1区出土遺物観察表1	33	第16表	大昔波コショウズワリ遺跡出土木製品の 樹種同定結果	97
第4表	1区出土遺物観察表2	34	第17表	出土木製品の樹種同定結果一覧	102
第5表	1区出土石製品・木製品観察表	35	第18表	出土石製品の石質同定(内臓観察)一覧表	104
第6表	2区出土遺物観察表1	84	第19表	石製品と石材の関係	104
第7表	2区出土遺物観察表2	85	第20表	分析対象のガラス貫安山岩製石器	106
第8表	2区出土遺物観察表3	86	第21表	ガラス貫安山岩産地の判別群	107
第9表	2区出土石製品観察表	87	第22表	測定値および産地推定結果	107
第10表	2区出土木製品観察表	88	第23表	分析対象の黒曜石製石器	108
第11表	分析試料一覧表	89	第24表	東日本黒曜石産地の判別群	109
第12表	産出花粉化石一覧表	89	第25表	測定値および産地推定結果	110
第13表	寄生虫卵分析に用いた試料の計測値と寄生虫卵数	92			

図版目次

図版1	1区遠景(北東から)・1区遠景(南東から)
図版2	1区遠景(南東から)・1区SB01-04全景(土上北)
図版3	1区西側上層(北西から)・1区西側上層全景(西から)
図版4	1区西側下層全景(西から)・1区下層西側全景(北西から)
図版5	1区SB01-04検出状況(東から)・1区SB01-04発掘状況(南東から)
図版6	1区SB01発掘状況(東から)・1区SB01検出状況(北から)・1区SB01-P02断面(東から)・1区SB01-P03断面(東から)・1区SB01-P10断面(南から)
図版7	1区SB02発掘状況(北から)・1区SB02検出状況(北から)・1区SB02-P05柱根出土状況(南から)・1区SB02-P07断面(南から)・1区SB02-P09断面(南から)
図版8	1区SB03発掘状況(北から)・1区SB03検出状況(北から)・1区SB03-P02断面(東から)・1区SB03-P08断面(西から)・1区SB03-P09断面(西から)
図版9	1区SB04発掘状況(東から)・1区SB04検出状況(北から)・1区SB04-P03断面(東から)・1区SB04-P04断面(南から)・1区SB04-P06断面(北東から)
図版10	1区SD02断面(西から)・1区SD03断面(西から)・1区SD06断面(北から)・1区SD10断面(南東から)・1区SD12西側断面(西から)・1区SD12東部断面(西から)・1区SD12遺物出土状況(南から)・1区SD13東部断面(南東から)
図版11	1区SD08全景(北西から)・1区SD08断面(北西から)・1区検出面太型鉛瓦石斧出土状況(北から)・1区P07縄文土器出土状況(西から)・1区区頭土器出土状況(北から)
図版12	1区出土遺物 1
図版13	1区出土遺物 2
図版14	1区出土遺物 3
図版15	2-1・2-2区遠景(南から)・2-1・2-2区遠景(北から)
図版16	2-1・2-2区遠景(南から)・2-3区遠景(北から)
図版17	2区2面全景・調査区全景
図版18	2区SB1発掘状況(北東から)・2区SB1-P7断面(北東から)・2区SB1-P10断面(北西から)・2区SB1-P32柱根出土状況(北東から)・2区SB1-P67柱根出土状況(東から)
図版19	2区SB2発掘状況(南から)・2区SB2-3検出状況(東から)・2区SB2-P25断面(西から)・2区SB2-P26断面(西から)・2区SB2-P27断面(西から)
図版20	2区SB3発掘状況(南から)・2区SB3-P29断面(西から)・2区SB3-P40断面(西から)・2区SB3-P41断面(西から)・2区SB3-P44断面(西から)
図版21	2区SB4発掘状況(南から)・2区SB4-P46断面(西から)・2区SB4-P50発掘状況(西から)・2区SB4-P51柱根出土状況(北から)・2区SB4-P64断面(北西から)
図版22	2区SB5発掘状況(南西から)・2区SB5-P55柱根出土状況(南東から)・2区SB5-P59柱根・礎板出土状況(北東から)・2区SB5-P62礎板出土状況(北東から)・2区SB5-P63木片出土状況(北東から)
図版23	2区SB6発掘状況(南西から)・2区SB6検出状況(南東から)・2区SB6-P76断面(北西から)・2区SB6-P77断面(北西から)・2区SB6-P78断面(北東から)

図版24	2区SB7発掘状況(南から)・2区SB7掘削作業(南から)・1区SB7-P54断面(西から)・2区SB7-P132断面(西から)・2区SB7-P133断面(西から)
図版25	2区SI1検出状況(南西から)・2区SI1-SD8作業状況(南西から)
図版26	2区SD11断面1(北東から)・2区SD2断面(東から)・2区SD4断面(南から)・2区SD8断面2(東から)・2区SD9断面(東から)・2区SD10断面(南東から)・2区SD11-12断面(北東から)・2区SD15断面(西から)
図版27	2区SK1断面(南東から)・2区SK2遺物出土状況(北から)・2区SK2断面(北から)・2区SK3断面(南から)・2区SK4断面(南から)・2区SK5断面(西から)・2区SK5礎・礎板器出土状況(西から)・2区SK5礎状況(東から)
図版28	2区SK6断面(北から)・2区SK6遺物出土状況(東から)・2区SK6礎(南から)・2区SK7断面(東から)・2区SK8検出状況(南西から)・2区SK8断面(南から)・2区SK10断面(西から)・2区SK11断面(南から)
図版29	2区SK12断面(南から)・2区SK12発掘状況(北から)・2区SK13断面(南から)・2区SK14断面(南から)・2区SK15断面(南東から)・2区SK15下部断面(南東から)・2区SK15発掘状況(南西から)・2区SK16断面(南から)
図版30	2区SK17遺物出土状況(南東から)・2区SK17断面(南から)・2区SK17土師器出土状況1(北西から)・2区SK17土師器出土状況2(北西から)・2区SK17他完掘状況(南から)・2区SK18断面(南東から)・2区SK19-21断面(南から)・2区SK19-21完掘状況(南から)
図版31	2区SX2編物全景(東から)・2区SX2上位断面・編物出土状況(東から)・2区SX2編物出土状況(南から)・2区SX2編物の重なり(北から)・2区SX2完掘状況(南から)
図版32	2区SX4-b遺物出土状況(北東から)・2区SX4-SK8発掘状況(南から)・2区SX7断面(南西から)・2区SX8-P97~P102(南東から)・2区土坑群(南から)・2区SD10(南東から)・2区SD09-11・12(南東から)・2区2面全景(南から)
図版33	2区SF全景(東から)・2区SF1検出状況(東から)・2区SF1-P11~113断面(南西から)・2区SF1-6・7(南から)・2区SF2-3(東から)
図版34	2区KNR1墨書土器出土状況1(南西から)・2区KNR1墨書土器出土状況2(南西から)・2区KNR1断面1(南東から)・2区KNR1断面2(南西から)・2区KNR1遺物出土状況(北東から)
図版35	2区KNR1発掘状況(南から)・2区KNR1北側断面(南西から)・2区KNR1北側断面2(南西から)・2区KNR1白土出土状況(北東から)・2区KNR1黒曜石出土状況(西から)
図版36	2区出土遺物 1
図版37	2区出土遺物 2
図版38	2区出土遺物 3
図版39	2区出土遺物 4
図版40	2区出土遺物 5

本文図版目次

図版1	大昔波コショウズワリ遺跡から産出した花粉化石… 91
図版2	SK2から産出した寄生虫卵… 93
図版3	珪藻プレパレートと珪藻化石の顕微鏡写真… 96

図版4	出土木製品の光学顕微鏡写真(1) …… 100
図版5	出土木製品の光学顕微鏡写真(2) …… 101
図版6	石製品石材のマイクロスコップ写真… 105

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査の経緯

大菅波コショウズワリ遺跡の発掘調査は、鉄道建設・運輸施設整備支援機構を建設主体とする北陸新幹線建設事業に伴い、石川県教育委員会及び(公財)石川県埋蔵文化財センター(以下「県埋文センター」)により実施されたものである。

北陸新幹線は「国民経済の発展及び国民生活領域の拡大並びに地域の振興を図るため、全国新幹線鉄道整備法に基づき建設される新幹線鉄道」である。平成9(1997)年に東京駅から長野駅まで部分開業しており、平成27(2015)年には長野駅から金沢駅までの区間が開業された。これに伴い、石川県内では平成10～22(1998～2010)年度にかけて、津幡町地内から白山総合車両所までの区間において発掘調査が実施された。その後、福井県敦賀までの延伸が決定され、平成24(2012)年6月に国土交通省による認可を受けて事業が開始されることとなった。同年8月北陸新幹線(金沢・敦賀間)建設工事に着工し、8月19日には起工式が行われている。平成27年1月、政府は完成・開業時期を3年前倒しにして、平成34(2022)年度の開業を目指すことを決定した。

白山総合車両所から福井県境までの工事計画範囲における埋蔵文化財の取り扱いについては、鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部大阪支社(以下「事業者」)から石川県教育委員会文化財課(以下「県文化財課」)に照会があり、県文化財課は計画範囲内に22箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在することを回答した。また、周知の埋蔵文化財包蔵地については、文化財保護法第94条に基づき発掘調査等の保護措置が必要となる。



第1図 北陸新幹線(金沢・敦賀間)概略図

その後双方の話し合いにより、用地買収が済んで試掘を実施する環境が整った範囲から順に、分布調査、試掘等を実施することとなった。その結果、16遺跡について本調査の必要が決定された。

平成25年度には、白山総合車両所内の本線部分に係る宮保B遺跡や北出遺跡の本調査が実施された。平成27年度は、新幹線小松駅舎部分の八日市地方遺跡の調査が実施され、平成28年度以降本格的に調査が行われた。

県埋文センターは、試掘の結果埋蔵文化財調査が膨大な調査面積となることから、調査の効率化と期間短縮を目的に、平成28・29年度に民間会社による調査支援を導入した。主な委託内容は、仮設建物等の整備、現場の保守・管理、基準杭の設定、発掘機材の準備、作業員への指示・安全管理、図面等の作成、台帳等の作成、空中写真測量などである。

第2節 調査の経過

大波谷コショウズワリ遺跡の発掘調査は、平成28年4月1日には事業者と石川県、石川県と県埋文センターの間で委託契約を締結し、県埋文センターからは発掘届を県文化財課に提出した。なお、調査体制は第1表のとおりである。

平成28年度

第1次現地調査を平成28年9月26日から同年12月14日にかけて実施した。調査面積は1,800㎡である。9月23日に県文化財課、県埋文センター、株式会社島田組(現場代理人 板倉敏之)による現地確認を行い、9月26日から重機による表土除去、10月3日から作業員による現地作業を開始した。10月11日に平面直角座標第Ⅶ系(世界測地系)をもとに10m方眼のグリッドを設定した。随時工程会議を行いながら作業を進め、11月1日には第1回目の空中写真測量を実施した。11月7日からは鞍部埋土除去作業を開始し、11月10日からは下面の遺構検出作業及び掘削作業に着手した。第2回目の空中写真測量は11月22日に、第3回目は12月8日に行った。その後、安全柵の設置や機材整理を行い、12月14日に事業者へ引渡し現地調査を完了した。

平成29年度

第2次現地調査は平成29年4月14日から同年7月31日にかけて実施した。調査面積は3,370㎡(当初3,340㎡)で、4月6日に事業者、JV、県文化財課、県埋文センター、株式会社アーキジオ(現場代理人 阿部将樹・中井英策)による現地打合せを行い、事前調整工事の進捗状況、現地作業での注意点、排水処理、現況図面、仮設建物建上などについて協議・確認をした。調査は調査区を2-1~2-3区に分けて行き、4月17日より2-1区から重機による表土除去を順次行った。4月20日からは平面直角座標第Ⅶ系(世界測地系)をもとに10m方眼のグリッドを設定した。4月24日に県埋文センターと支援業者による打合せを行い、調査工程、現地作業での注意点、今後の予定などの確認を行った。4月27日から作業員による現地作業を開始し、掘立柱建物や周溝をもつ建物、河川跡、波板状凹凸などを検出した。その後調査を進め、第1回目(2-1・2-2区のNR1以西)の空中写真測量を5月25日に、第2回目(2-1・2-2区のNR1以东)を6月19日、第3回目(2-3区)を7月20日に実施した。なお、2-3区の北側と東側で遺構が調査区外へ延びる様相を示し、県文化財課との協議の結果、調査区を拡張して調査を行うこととなった。結果、調査面積が当初より30㎡増加し3,340㎡となった。7月23日に現地説明会を行い、60名が参加した。作業員の現地作業は7月28日に終了し、7月31日に事業者へ引渡し現地調査を完了した。

令和2年度

令和2年8月5・6日に県文化財課が担当し、北陸新幹線本線に近接する取付道路工事に伴う工事立会を実施した。立会範囲の対象は、平成28年度に県埋文センターが調査を実施した1区の南東部である(第5図)。表土除去の重機、ポンプ・発電機などの排水機材はJVから提供を受けた。調査区平面図などの実測及び単点の測量は県文化財課が行い、実測に伴う基準点の国土標取得についてはJVの協力を得た。調査の結果、基本層序は、工用砕石→暗褐色粘質土(耕土及び床土)→暗褐色粘質土→暗灰色粘質土(包含層か)→黄灰色粘質土(地山)であることが確認された(第5図)。対象範囲については、平成28年度調査成果から遺跡の縁辺部と想定されたとおり、調査区壁面で小穴を確認したのみで遺構は極めて希薄であった。遺物は出土していない。今後の対応として、工事を実施して支障なしと回答した。

第3節 整理作業の経過

事業者から依頼を受けた県教委の委託事業として、出土品整理作業のうち記名・分類・接合作業を平成30年度に、実測・トレース作業を令和元年度にそれぞれ実施し、調査部県関係調査グループが担当した。

一部の遺物については、平成30年度に株式会社上智に実測・トレース・観察表作成・遺物番号注記作業、株式会社ラングに石器の実測・トレース・観察表作成・遺物番号注記作業を委託した。また、令和元年度に株式会社パレオ・ラボに花粉分析・寄生虫卵分析・珪藻分析・樹種同定・石質同定を、株式会社島田組に土器の実測・トレース・観察表作成・遺物番号注記作業を委託して行った。

報告書刊行については、令和2～3年度に原稿・図版作成等を行い、編集・校正作業を経て刊行することとなった。

第1次調査	平成28年9月26日～同年12月14日	第2次調査	平成29年4月14日～同年7月31日	整理期間	平成30年4月1日～平成31年3月31日
調査主体	(公財)石川県埋文文化財センター 理事長 田中 新太郎	調査主体	(公財)石川県埋文文化財センター 理事長 田中 新太郎	調査主体	(公財)石川県埋文文化財センター 理事長 田中 新太郎
総括	柴田 正秋(専務理事)	総括	柴田 正秋(専務理事)	総括	紺野 欽一(専務理事)
事務	釜親 利雄(事務局長)	事務	釜親 利雄(事務局長)	事務	釜親 利雄(事務局長)
総務	長嶋 誠(総務GL)	総務	横山 謙一(総務GL)	総務	山口 登(総務GL)
調査	福島 正実(所長) 藤田 邦雄(調査部長) 伊藤 雅文(調査部長)	調査	藤田 邦雄(所長) 堀内 光次郎(調査部長) 川畑 誠(図関係調査GL)	調査	藤田 邦雄(所長) 堀内 光次郎(調査部長) 久田 正弘(南関係調査GL)
担当	久田 正弘(南関係調査G課長補佐) 西村 賢(南関係調査G嘱託調査員)	担当	立原 秀明(南関係調査G主幹) 西田 昌弘(南関係調査G専門員) 横山 純子(南関係調査G嘱託調査員) 西村 賢(南関係調査G嘱託調査員)	担当	久田 正弘(南関係調査G主幹) 立原 秀明(南関係調査G主幹) 西田 昌弘(南関係調査G専門員)
整理期間	平成31年4月1日～令和2年3月31日	整理期間	令和2年4月1日～令和3年3月31日	整理期間	令和3年4月1日～令和4年3月31日
調査主体	(公財)石川県埋文文化財センター 理事長 田中 新太郎	調査主体	(公財)石川県埋文文化財センター 理事長 徳田 博	調査主体	(公財)石川県埋文文化財センター 理事長 徳田 博
総括	紺野 欽一(専務理事)	総括	田村 彰英(専務理事)	総括	田村 彰英(専務理事)
事務	釜親 利雄(事務局長)	事務	北谷 俊彦(事務局長)	事務	北谷 俊彦(事務局長)
総務	伊藤 直(総務GL)	総務	伊藤 直(総務GL)	総務	北谷 祥子(総務GL)
調査	堀内 光次郎(所長) 伊藤 雅文(調査部長) 久田 正弘(南関係調査GL)	調査	伊藤 雅文(所長) 川畑 誠(調査部長) 久田 正弘(南関係調査GL)	調査	伊藤 雅文(所長) 川畑 誠(調査部長) 澤辺 利明(南関係調査GL)
担当	久田 正弘(南関係調査GL) 立原 秀明(南関係調査G主幹)	担当	西山 美那(南関係調査G嘱託調査員)	担当	久田 正弘(南関係調査G主幹)

第1表 調査・整理体制組織表

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

大菅波コショウズワリ遺跡は石川県加賀市大菅波町地内に所在する。

加賀市は石川県の南西端に位置しており、北は日本海に面し、東は小松市、南から西にかけては福井県あわら市・坂井市・勝山市と接している。現在の加賀市は平成17(2005)年10月1日に旧加賀市と江沼郡山中町が合併して誕生した市であり、人口65,593人(令和2年9月1日現在)、市域面積305.87km²、周囲98.5kmを有する。交通はJR北陸本線と国道8号線が市域の平野部を東西に並走し、海岸沿線を走る北陸自動車道は南側で内陸に入り、福井県境を越えた辺りでJR北陸本線・国道8号線と交差する。米作りを中心とした農業地帯である一方、加賀市が発祥地とされる九谷焼や、高い木地挽物技術をもつ山中漆器などの伝統工芸も盛んである。また、山中温泉、山代温泉、片山津温泉は、小松市の粟津温泉とともに加賀温泉郷として広く知られている。

市域の地形は、北側は海岸線に沿って江沼砂丘、橋立丘陵、橋立台地、小松砂丘、柴山台地が、東側では小松市より続く月津台地が分布している。市域の南東側では標高100mを超える加賀山地、能美山地、江沼丘陵など山地が卓越し、南東端には市内最高峰である大日山(標高1,368m)が位置する。水系は大日山を水源として、市域西部を北流し平野部で西へと向きを変え日本海に注ぐ大聖寺川、市域東部を流れ柴山潟に注ぐ動橋川の2大水系に大別される。他にも田尻川、小塩川、尾俣川、八日市川など多くの小河川が流れる。大聖寺川と動橋川の下流域では江沼盆地や柴山潟を含む低地が形成されている。柴山潟は、小松市の木場潟、干拓事業により消滅した今江潟とともに「加賀三湖」と称されていた。福井県坂井市域には北潟湖もあり、このような河口に潟湖が形成された地形は日本海沿岸に広くみだされる。

大菅波コショウズワリ遺跡が所在する大菅波町は江沼盆地の北東部に位置し、北側には標高70m前後の橋立丘陵が迫る。町域の大半を水田地和畑地が占めており、穀倉地帯である江沼盆地の典型を呈する。JR北陸本線が町域を南北に二分し、集落は線路の北側に、大菅波コショウズワリ遺跡は南側に立地している。大菅波町は近世には大菅波村と称し、加賀藩の支藩である大聖寺藩領であった。明治4(1871)年廃藩置県により大聖寺県となり、同年11月金沢県に編入、翌5年には石川県と改称され、大菅波村は石川県江沼郡管下となった。その後、明治22(1889)年の町村制施行により作見村、山田村、大菅波村、小菅波村、尾中村、富塚村、片山津村、弓波村が合併して作見村が成立し、大菅波は作見村の大字名となった。昭和17(1942)年に作見村と塩津村が合併して片山津町が発足、片山津町はその後幾度かの合併を経て昭和33(1958)年に大聖寺町、橋立町、山代町、動橋町、南郷村、三谷村、三木村、塩屋村と合併して加賀市となり、大菅波は加賀市の町名となった。集落は昔山麓に位置していたが、慶長初期頃現在の位置に移ったと伝わる。



第2図 遺跡の位置

第2節 歴史的環境

大菅波コショウズワリ遺跡周辺の遺跡を時代ごとにふれることで、歴史的環境を概観する。本節の遺跡名(番号)は第3図・第2表の番号と対応するため参照していただきたい。なお、遺跡名については石川県遺跡地図の表記に従っている。

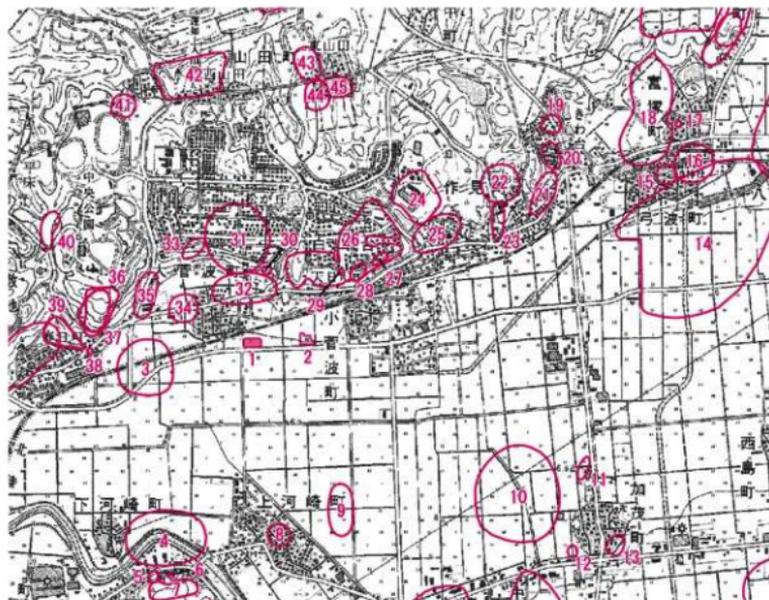
大菅波コショウズワリ遺跡(1)が所在する加賀市内では、これまで800箇所以上の遺跡が確認されている。市域で最古の遺跡は橋立台地に位置する旧石器時代後期の宮地向山遺跡であり、石刀や石鏃、棒状石斧、搔器といった石器が出土している。

縄文時代に入ると、橋立丘陵上、橋立台地上、柴山台地縁辺部、大聖寺川・動橋川河流域の河岸段丘や谷底低地などに遺跡が分布するようになる。早期の遺跡では大野山A遺跡や、県内最古級の土器が出土した伊切遺跡が確認されている。前期の遺跡としては動橋川中流域の津波倉遺跡や、橋立丘陵一帯の柴山水底貝塚遺跡、橋立神社裏遺跡、黒崎ごさんしろ遺跡などが挙げられる。中期の遺跡では柴山貝塚や藤ノ木遺跡が知られる。藤ノ木遺跡からは上山田式・古府式など北陸特有の土器に加え、東海・近畿・関東系の土器も出土したことから東西交流が盛んな地域であったことが窺える。小菅波国道遺跡では中期中葉から後半の遺構群が確認され、江沼盆地において初の縄文時代の確実な建物跡の検出となった。当該期の集落の動態を検討する上で重要な成果と言える。後・晩期の遺跡としては、注口土器や異形土製品が出土した横北遺跡などがある。

弥生時代前期～中期初頭には、縄文土器の流れをくむ柴山出村式土器が成立し、柴山出村遺跡や柴山水底遺跡などで柴山潟沿岸の湿地を利用した原始的な水稲栽培が開始される。中期後半には小菅波国道遺跡や猫橋遺跡にも遺構・遺物が少し確認される。後期になると柴山潟沿岸から八日市川にかけて遺跡は広範囲に広がり、八日市川流域の自然堤防・後背湿地に猫橋遺跡や弓波遺跡(14)が展開する。後期前半猫橋式土器の標式遺跡である猫橋遺跡は方形周溝墓を伴う大規模な集落跡で、炭化米や多量の木製品、管玉未成品などが出土し、弓波遺跡では後期の集落と墓域が確認された。加茂キツネ塚遺跡(11)では後期後葉の自然河道や水路などが確認され、集落の縁辺部を検出したものと思われる。

古墳時代に入ると、江沼盆地を見下ろす丘陵上や台地縁辺部に多くの古墳が築造され、遺跡数も飛躍的に増加する。古墳群は分校・松山地域、南郷・吸坂・黒瀬地域、富塚・片山津地域、敷地・小菅波地域などに大別される。前期は盆地東部に分校古墳群が出現する。小菅波地域では小菅波4号墳以外の築造時期は不明だが、前期の築造と推定されている。前期後半から中期にかけては盆地西部に南郷古墳群や吸坂古墳群(5・7)が展開する。昭和58年に調査された敷地平野山古墳群(36)も前期から中期に位置付けられる。中期半ばから後期には盆地中央部に二子塚古墳群が出現し、唯一墳丘が現存する狐山古墳は北陸では数少ない典型的な前方後円墳である。埴輪と周溝を伴い、銚留甲冑や銀製帯金具など豊富な副葬品が出土した。中期後葉には全長100m以上の前方後円墳と推定される富塚丸山古墳(17)などが築造され、後期には法皇山横穴群、栄谷丸山横穴群といった横穴群や、黒瀬御坊山古墳群や二子塚東田古墳群に代表される群集墳が多く築造された。加賀市域では他にも数多くの古墳が分布調査により確認されているが、古代の集落遺跡である松山C遺跡から円筒埴輪片が出土するなど、墳丘が消滅してしまっただけに未発見となっている古墳が他にも存在している可能性が高い。集落跡としては、弓波遺跡、大菅波D遺跡(3)、片山津玉造遺跡、永町ガマノマガリ遺跡などが知られる。弓波遺跡では、古墳前期の方形区画2基(一辺約25mと26m)や建物跡などを検出した。弓波片山津玉造遺跡では緑色凝灰岩製の管玉・石製品製作が行われ、33基の工房兼住居跡が確認されている。

白鳳時代以降、津波倉廃寺、弓波廃寺(16)、保賀廃寺、宮地廃寺、高尾廃寺が建立され、一地方で



第3図 周辺の遺跡 (S=1/25000)



第4図 調査区位置図 (S=1/5000)

番号	県番号	遺跡名	種別	時代	番号	県番号	遺跡名	種別	時代
1	643000	大菅波コショウズワリ遺跡	集落	古代	24	619100	作見観音堂跡	社寺	その他
2	643100	小菅波D遺跡	縄文、古墳	古墳	25	619200	作見岡跡	その他	中世
3	618100	大菅波D遺跡	敷布地、集落	弥生、古墳、古代	26	619300	小菅波遺跡	集落	弥生、古墳
4	610000	下河崎遺跡	敷布地	古代	27	618900	小菅波神社裏口古墳群	古墳	古墳
5	609900	堀原D古墳群	古墳	古墳	28	618800	小菅波神社裏口古墳群	古墳	古墳
6	609800	片山古墳群	古墳	古墳	29	618700	小菅波神社裏口C1号墳	古墳	古墳
7	609700	堀原A古墳群	古墳	古墳	30	618500	小菅波D1号墳	古墳	古墳
8	610100	川崎菅新寺跡	社寺	中世	31	618600	西の御城跡	城郭	その他
9	641600	上河崎遺跡	敷布地	弥生	32	619400	大菅波C遺跡	敷布地	古代
10	607100	加茂ケガリ塚遺跡	集落	その他	33	628800	大菅波古墳群	古墳	古墳
11	642700	加茂キツネ塚遺跡	集落	弥生、中世	34	618300	大菅波遺跡	敷布地	古代
12	642500	加茂新高遺跡	集落	古代	35	618200	大菅波A遺跡	敷布地	古墳
13	643200	加茂フルドウ遺跡	集落	古墳	36	617900	敷地平野山古墳群	古墳	古墳
14	620900	弓波遺跡	敷布地、集落	縄文、弥生、古墳、古代、中世	37	618000	敷地平野山遺跡	敷布地、集落	縄文、弥生
15	620800	赤波神社遺跡	敷布地	古墳	38	617800	敷地経塚	その他	近世
16	620700	弓波集寺	敷布地、集落	弥生、古墳、古代、中世	39	617700	敷地春日岡古墳群	古墳	古墳
17	620500	富家丸山古墳	古墳	古墳	40	617200	平塚遺跡	敷布地	古代
18	620600	富家遺跡	敷布地	古代	41	617100	西山田遺跡	敷布地	古墳
19	619702	作見焼2号窯跡	生産遺跡	中世	42	617000	西山田文蔵寺跡	社寺	中世
20	619600	作見C遺跡	敷布地	古墳	43	616700	東山田集寺	社寺	その他
21	619500	作見A遺跡	敷布地	古墳	44	616800	東山田八幡神社遺跡	敷布地	その他
22	619400	作見B遺跡	城郭	中世	45	616900	東山田玄尊堂跡	城郭	その他
23	619300	作見D遺跡	敷布地	古墳					

第2表 周辺の遺跡一覧表

の建立数としては多いことから、支配階級層の間に仏教が強く浸透していたと推定される。また、動橋川中流域左岸の低丘陵上に位置する黒瀬瓦窯跡で生産された瓦は、保賢庵寺で使用されていたことが明らかになっている。この時代に入ると集落が江沼盆地一帯で営まれるようになり、散布地も含め市内各地で遺跡が確認されている。江沼地方は大宝律令の制定(701年)により越前国江沼郡となり、弘仁14(823)年に加賀国が越前国から独立する。これに伴い江沼郡の北半部が能美郡として分立し、江沼郡には長江、八田、忌波、山背、竹原、額田、菅浪、三枝の八郷、あるいは郡家郷を加えた九郷が置かれたとされる。

中世には多くの荘園が経営されるようになり、大菅波周辺は菅浪郷に属していたと推定されている。遺跡としては作見砦跡(22)などの城館や、南北180m、東西160mに及ぶ館跡と推定される勅使館跡、三木だもん遺跡などが確認されている。また、県内最大の窯業地で須恵器及び陶器を焼いた南加賀古窯跡群が成立・展開するのもこの時期である。この時期の集落遺跡の確認数は少ないが、加茂新高遺跡(12)で当該期の井戸が2基、加茂ボケ生水ウラ遺跡で13世紀代の掘立柱建物数棟、井戸1基、堅穴状遺構1基が検出されている。中世集落の確認数が少ないのは、より安定した地盤を居住地に選定した結果、現集落と重なって未発見となっている遺跡が多いためと推定される。

近世の遺跡としては、大菅波コショウズワリ遺跡周辺では敷地経塚(38)があるが消滅している可能性がある。天正8(1580)年に織田勢によって加賀国の一揆が平定されると、江沼郡は慶長5(1600)年に前田氏の支配下に置かれることとなった。寛永16(1639)年には加賀藩の支藩として大聖寺藩が成立し、大聖寺藩は明治4(1871)年の廃藩置県まで存続する。

引用・参考文献

- 垣内光次郎¹⁾ 2009 「三木A遺跡」 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 竹内理三 1981 「角川日本地名大辞典17 石川県」 角川書店
- 立原秀明²⁾ 2016 「加茂キツネ塚遺跡・加茂新高遺跡・加茂ボケ生水ウラ遺跡」 石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
- 戸根比呂子 2019 「小菅波国道遺跡発掘調査報告書」 加賀市教育委員会
- 西美晃 2002 「大菅波D遺跡」 加賀市教育委員会
- 谷内明央³⁾ 2013 「松山D遺跡」 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター

第3章 第1次調査

第1節 概要と基本層序

1. 概要

平成28年度調査区を1区、平成29年度調査区を2区とした(第5図)。2区はさらに2-1~2-3区に細分して調査を実施した(第6図)。X35510、Y-74300を基準としてA1杭を設定し、杭から北東方向にグリッドを配置した(第6図)。令和2年度の立会調査は南東隅である。

第1次調査は1,800㎡を対象に実施した。1区の北側は平成29年度調査の2区と接している。遺構番号はSB、SD、SK、P、SXを用い、それぞれ01から番号を付した。

大波谷コショウズワリ遺跡は、遺跡の北側に位置する橋立丘陵が八日市川に向けて傾斜する丘陵裾に位置しており、1区の遺構検出面も標高5.20~6.20m前後と南~南西側が低くなっている。なお、1区では西側の検出面を上層、その下で検出した鞍部を下層として調査した(第7図)。遺構密度としては、調査区東半でやや高く、小穴が集中し掘立柱建物4棟が展開する(図版2)。一方、河川跡を挟んだ西半では主に溝が検出され、遺構密度は高くない(図版3・4)。1区において検出された遺構の時期は古墳時代末~中世に位置付けられ、当該期の集落遺跡であることが明らかになった。

遺物は、古墳時代後期~古代にかけての須恵器・土師器を中心として、少数ではあるが縄文土器、弥生土器、石器、中世の土師器・陶磁器なども出土している。土器などは耕地整理の影響か、細片が多い。鞍部からは旧石器時代末の柳葉形尖頭器や縄文時代の石器類が出土した。

2. 基本層序

1区の層序は、上位から表土(耕作土、客土)、主にオリーブ黒色~黒色を呈する粘土(包含層)、主に浅黄色~にぶい黄橙色を呈する粘土(基盤層)を基本としている(第8・9図)。

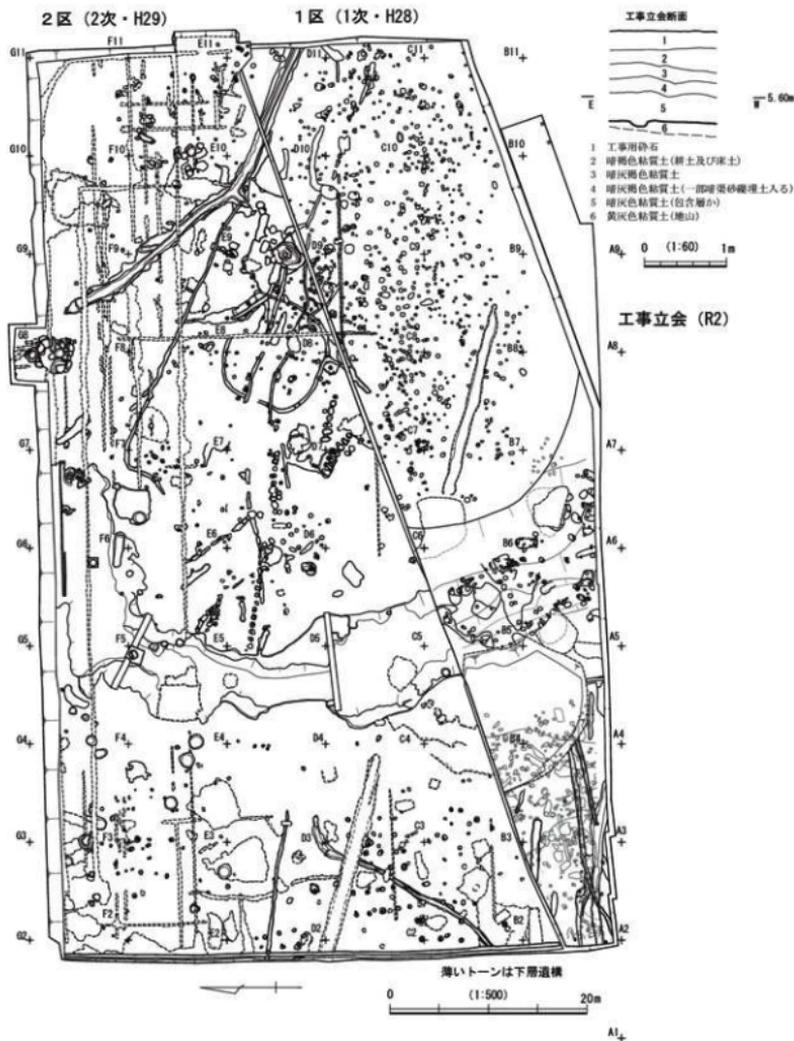
第2節 1区の遺構と遺物

1. 掘立柱建物

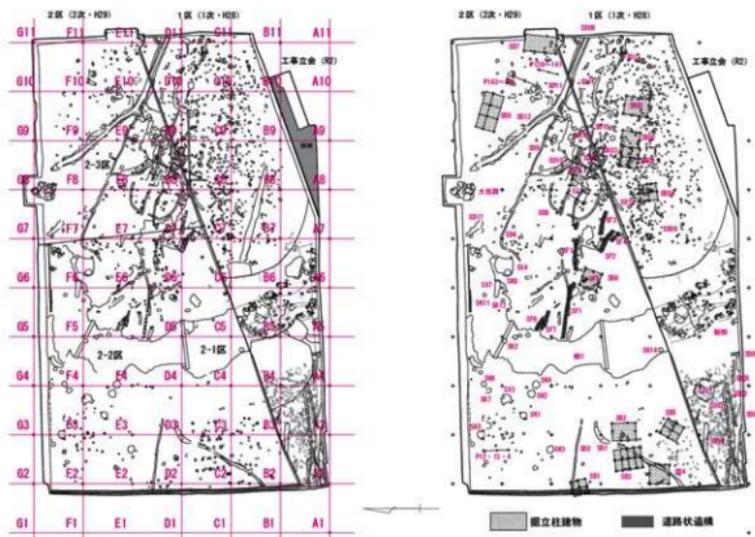
掘立柱建物は1区において4棟確認した。いずれも7世紀代と推定され、隅柱建物がセットになるものと思われる。また、建物を復元するには至らなかったが中世と思われる柱穴も確認した。以下、個別に記述していく。

SB01(第12図、図版6) 1区東部C9グリッドで検出し、検出面は標高5.72~5.85m前後である。2間(3.6~3.7m)×3間(4.8m)の隅柱建物で、主軸はN-9°-Eである。柱間や柱配列にはややばらつきが見られ、柱間は梁間で約1.2~2.4m、桁行で約1.5~1.7mを測る。柱穴の平面形態は円~楕円形、隅丸方形、不整形と様々である。径は長軸で45~60cm程、深さは12~27cm程を測る。柱穴の覆土は概ね浅黄色~黒褐色であり、土層観察では柱痕跡が確認でき、据えられていた柱の径は15~20cm程と推定できる。SB01-P03からは土師器高杯(第20図1)や須恵器甕(2)が出土し、SB01-P06からは土師器のハケ甕胴部上半(3)や高坏脚(4)が出土している。SB01はSB03とセットと思われる。

SB02(第13図、図版7) 1区東部C8-9グリッドで検出し、検出面の標高は5.79~5.94m前後である。2間(3.6m)×3間(4.4~4.6m)の隅柱建物で、主軸はN-82°-Wである。柱間や柱配列は比較的整って



第5図 大菅波コショウズワリ遺跡調査区全体図(S=1/500)

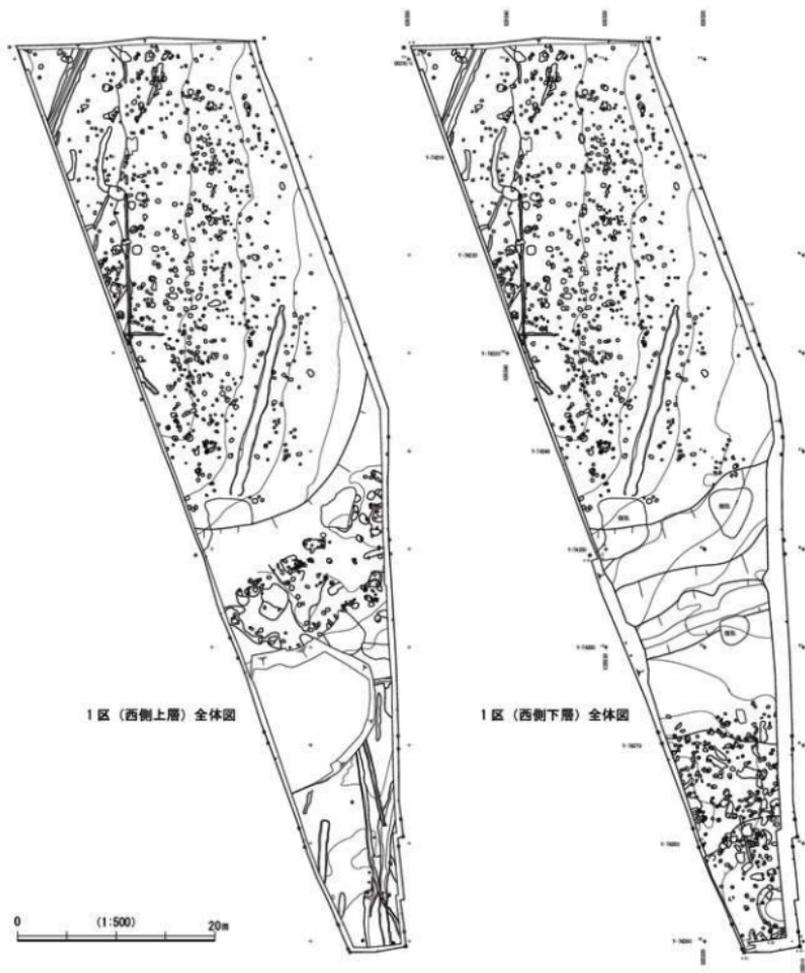


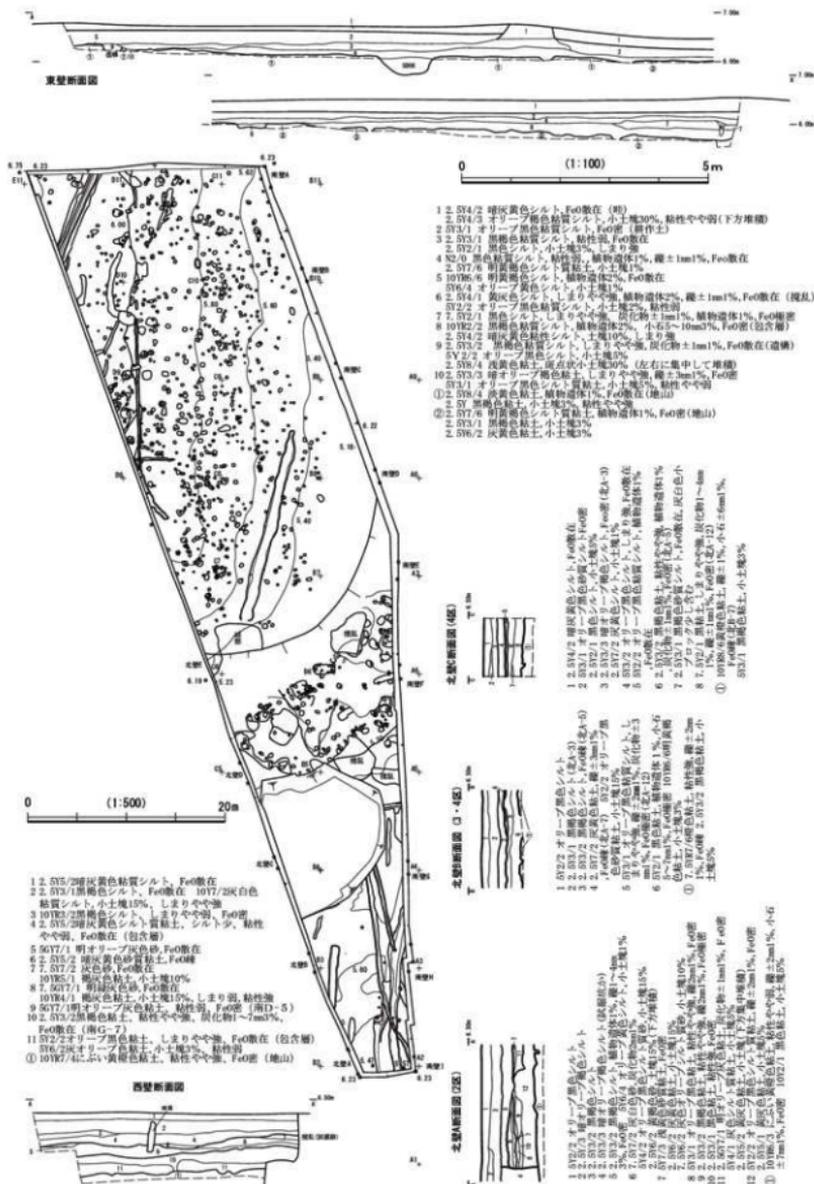
第6図 調査区グリッド配置・主要遺構配置図(S=1/1000)

おり、柱間は梁間で約1.7~1.9m、桁行で約1.4~1.7mを測る。柱穴の平面形態は隅丸方形~不整形が多く、一部で楕円形や不整形を呈する。径は長軸で45~70cm程、深さは19~39cm程を測る。柱穴の覆土は概ね明オリブ灰色~黒色であり、土層観察から柱痕跡が確認できるほか、SB02-P05やSB02-P07には柱根(第24図85・86、共にクリ)が残存しており、径10~20cm程の柱が据えられていたと考えられる。SB02はSB04とセットと思われる。

SB03(第14図、図版8) 1区東部C8グリッドで検出し、検出面は標高5.77~5.94m前後である。2間(3.4~3.7m)×2間(3.8~4.0m)の総柱式建物の倉庫で、主軸はN-11°-Eである。柱間や柱配列は比較的整っており、柱間は梁間約1.7~1.9m、桁行約1.9~2.1mを測る。柱穴の平面形態は円~楕円形、隅丸方形などである。径は長軸で約40~80cm、深さ約11~35cmを測る。柱穴の覆土は概ね明オリブ灰色~黒色である。断面から、柱の径は10~15cm程と推定される。SB03-P08から須恵器横瓶の閉塞部分(第20図5)、SB03-P09から須恵器坏身(6)の破片が出土している。6の外面には少しの降灰がある。

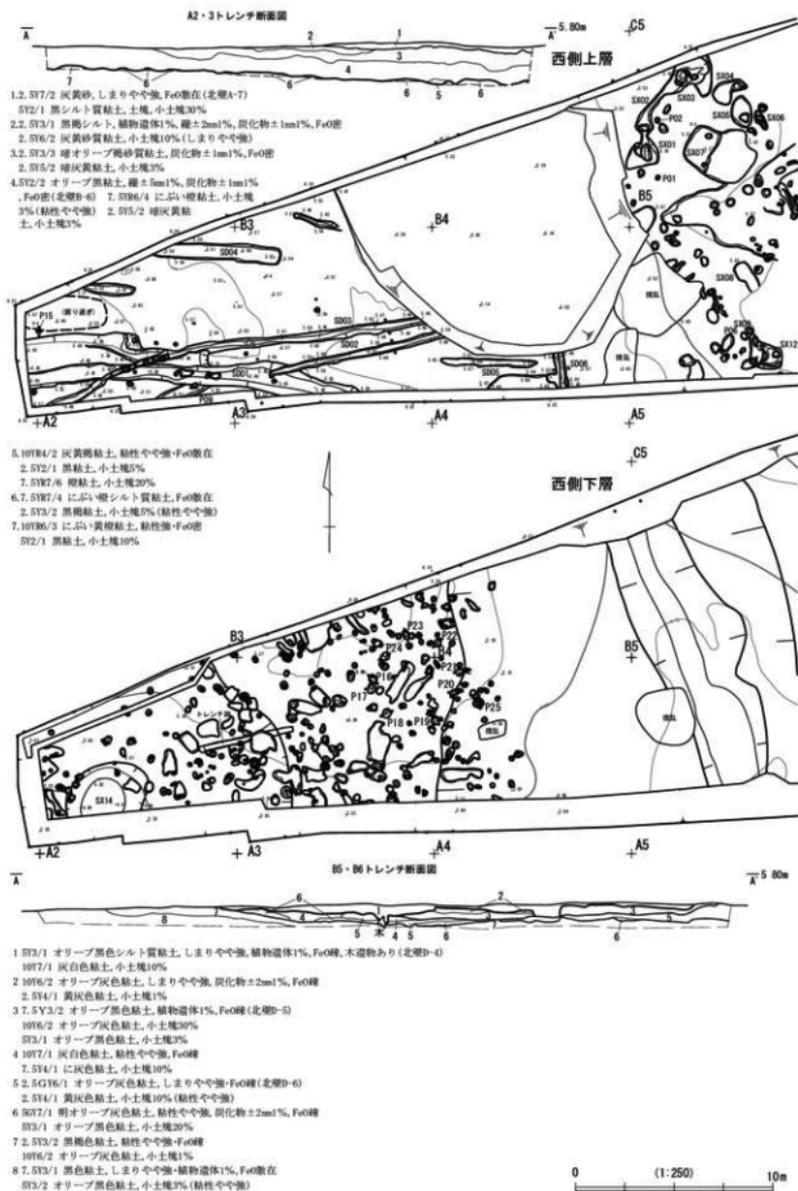
SB04(第15図、図版9) 1区東部B7・B8・C7・C8グリッドで検出し、検出面の標高は5.63~5.80mである。梁間と桁行の区別は難しいが、東西方向2間(3.5m)×南北方向2間(3.4~3.6m)の総柱建物で、主軸はN-6°-Wである。柱間や柱配列は比較的整っており、柱間は東西方向で約1.7~1.8m、南北方向で約1.6~1.9mを測る。柱穴の平面形態は円~楕円形、隅丸方形を呈する。径は長軸で30~40cm程、深さは10~33cm程である。柱穴の覆土は黄灰色~黒褐色である。SB04-P01とSB04-P04では柱根(第24図87・88、共にクリ)が残存していた。



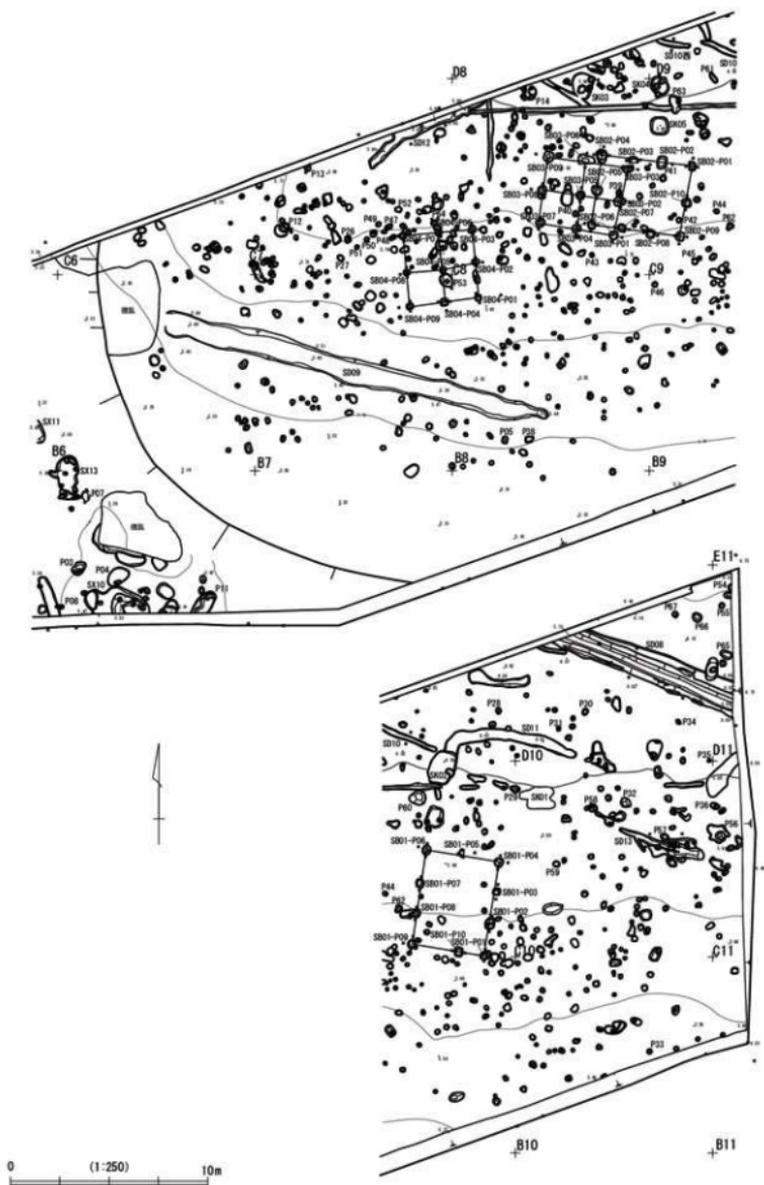


第8図 1区調査区壁断面図1 (S=1/500・1/100)

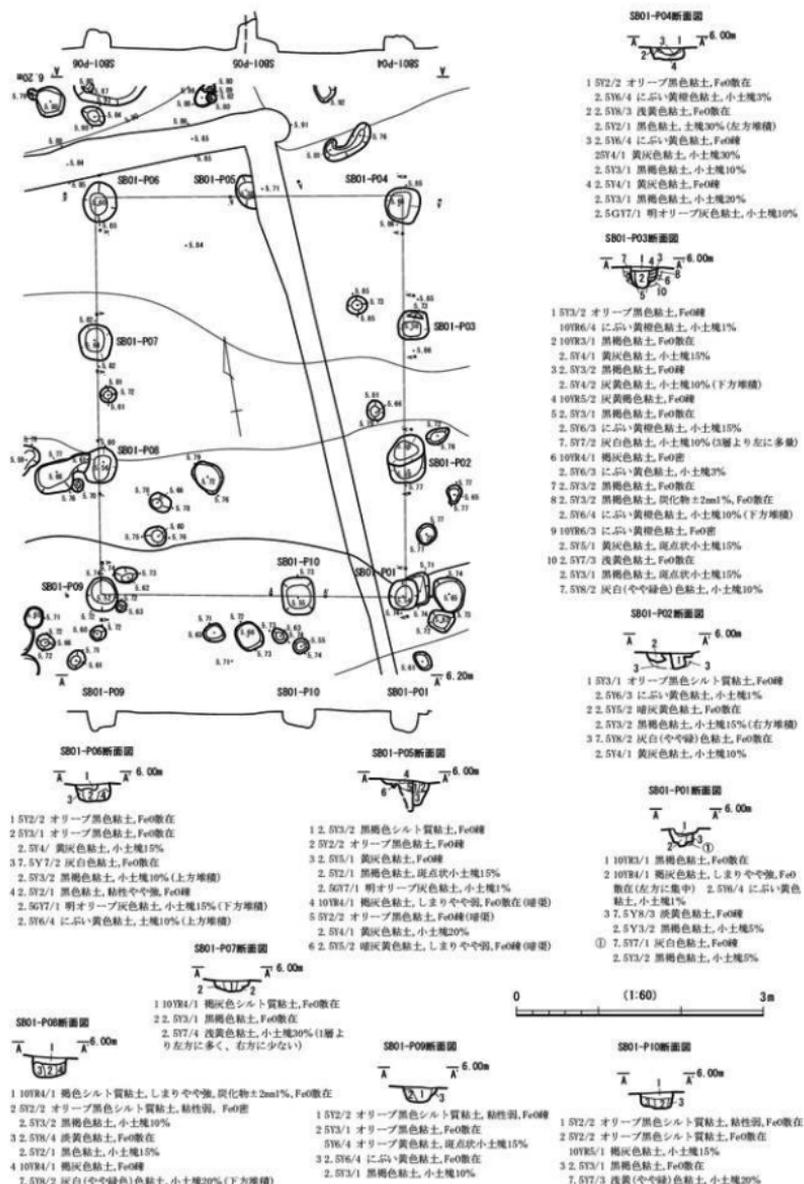
第2節 1区の遺構と遺物



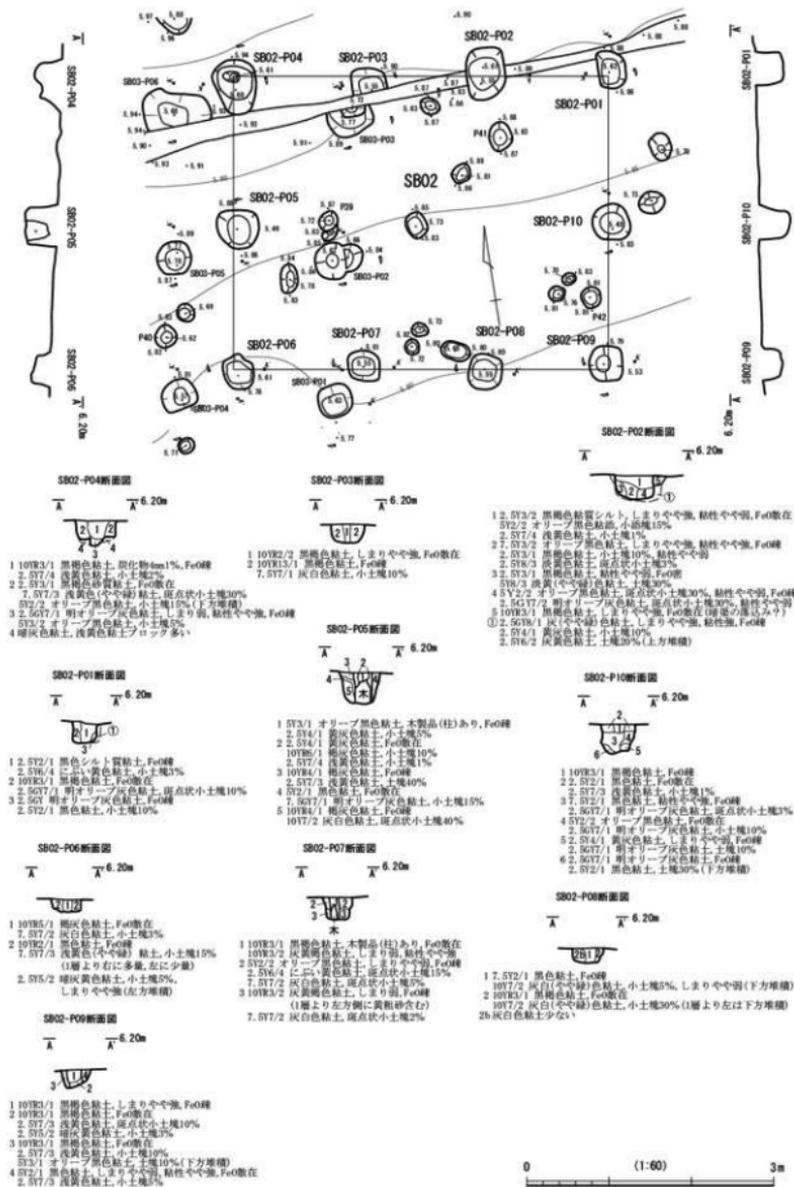
第10図 1区部分図1 (S=1/250)



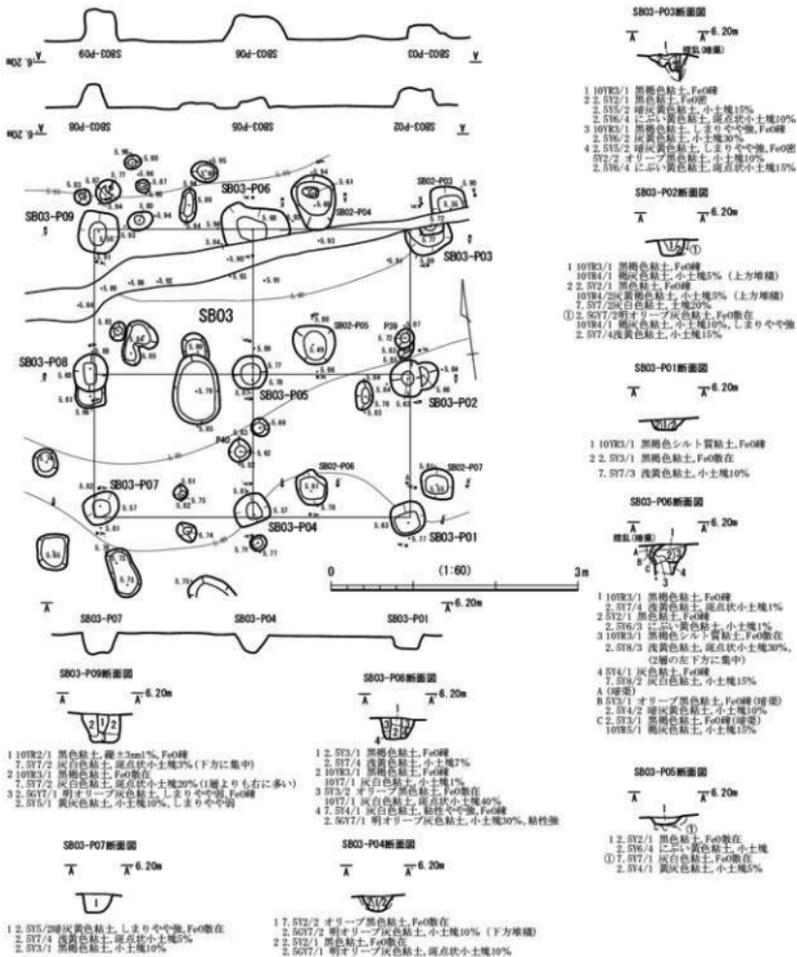
第11図 1区部分図2 (S=1/250)



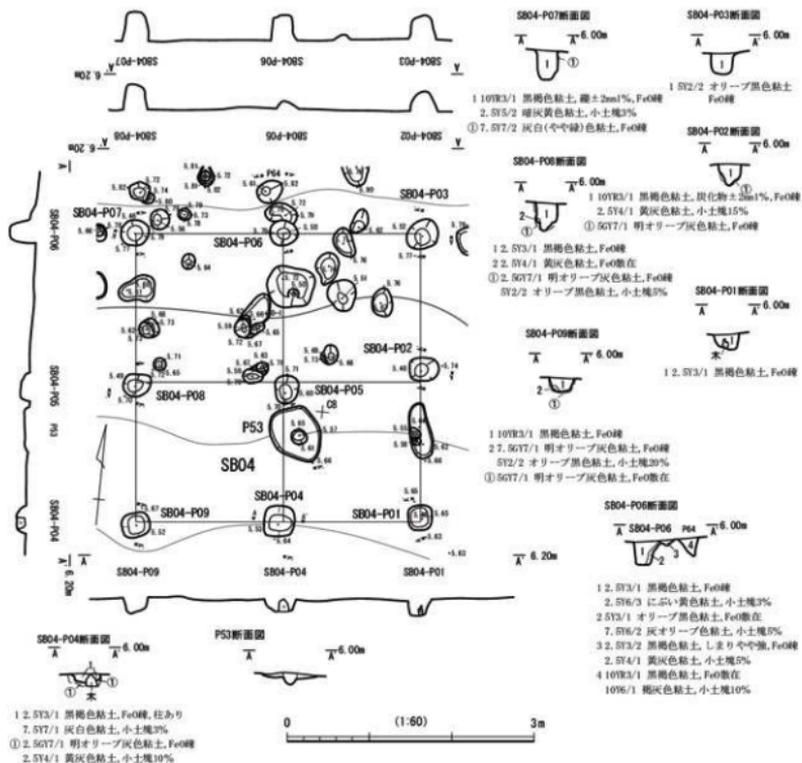
第12図 1区SB01実測図(S=1/60)



第13図 1区SB02実測図(S=1/60)



第14図 1区SB03実測図(S=1/60)



第15図 1区SB04実測図(S=1/60)

2. 溝

SD01(第16図、図版3) 1区西部A2・3グリッドで検出し、検出面の標高は5.44～5.58mである。長さ15m程で両端とも調査区外へ延び、SD02・03に切られている。幅は70～160cm程で、深さは5～15cm程である。平面形は緩い弧を描いている。断面形はやや不整形な半円状で、覆土は概ね灰色～黒褐色である。縄文土器深鉢(第20図7)や須恵器甕体部下半(8)などを図化した。7はLR縄文を持つ。8の外側は剥離する。

SD02(第16図、図版3) 1区西部A3・4グリッドで検出した。検出面は標高5.54～5.69mで、長さ8.8m程を確認している。幅約30～50cm、深さ約9～12cmを測る。平面形は直線的で、主軸はN-77°-Eである。断面形は不整形な半円状で、覆土は概ね灰色～黄灰色である。縄文土器深鉢(第20図9)、須恵器坏蓋(10)、須恵器壺(11)などを図化した。10は弱い稜を持つ蓋である。

SD03(第16図、図版3) 1区西部A2・3グリッドで検出し、検出面の標高は5.47～5.68mである。長さ約18.7mを確認した。幅は30～50cm程で、深さは4～27cm程である。溝西部が南に向かって緩く曲がる平面形を呈し、断面形は逆台形状である。溝の覆土は黄灰色～オリーブ黒色である。

SD04(第16図、図版3) 1区西部A2・3グリッドで検出し、検出面は標高5.54～5.59mである。溝の西側が調査区外へと延びているが、2区において溝の続きは検出されなかった。1区では長さ6m程を確認しており、幅は約60～90cm、深さは約1～8cmを測る。直線的な平面形を呈し、主軸はN-86°-Wである。溝からは須恵器高坏(第20図12)や近代のものとみられる板状木製品(第24図89)などが出土した。

SD05(第16図、図版3) 1区西部A4グリッドで検出し、検出面の標高は5.65～5.67mである。全長約4.9m、幅約30～40cmを測り、深さは2～3cm程と浅い。平面形は直線的で、主軸はN-89°-Wである。縄文時代に属する珪質頁岩の石核(第22図65)などが出土した。

SD06(第16図、図版3) 1区西部A4グリッドで検出した。検出面は標高5.65m前後で、長さ1.8m程を確認した。幅約50～100cm、深さ約5～23cmを測る。主軸はN-8°-Wである。断面形は浅い皿状で中央付近が一段深くなり、溝の覆土は灰白色～オリーブ黒色である。

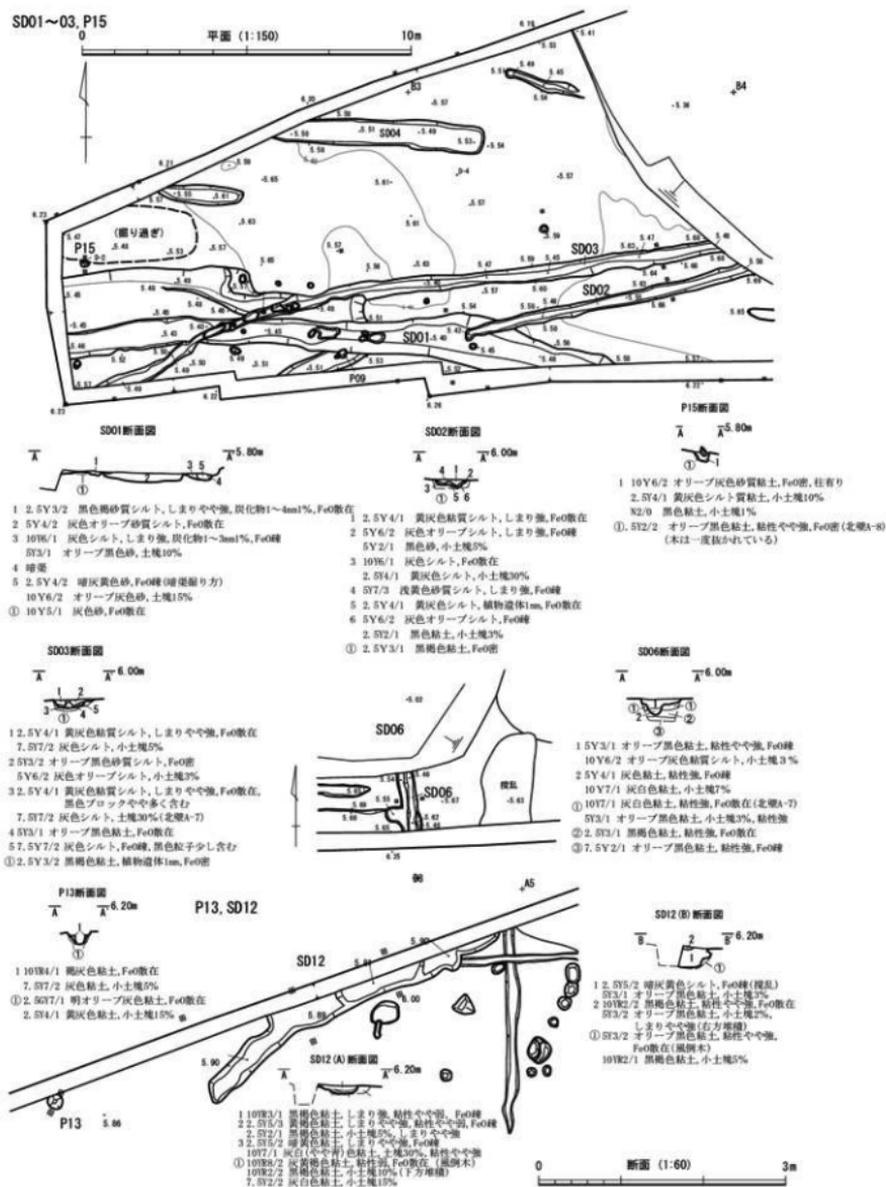
SD08(第17図、図版11) 1区北東隅D10・11グリッドで検出し、検出面の標高は6.05～6.12mである。1区では長さ9.3m程が確認され、2区のSD11・12へと続く。幅1.3～1.7m程、深さは3～40cm程で、主軸はN-68°-Wである。断面形は半円状～逆台形状で、覆土は明黄褐色～黒褐色で、堆積課程は3断面とも3段階ある。2区ではSD10・11(第47図)に繋がり、中～近世と思われる。古墳時代の土師器高坏(第20図13)や古代末の内黒有台塊(14)、縄文時代の石錘(第22図66・67)などを図化した。

SD09(第11図) 1区中央付近B6・7・8グリッドで検出し、検出面は標高5.44～5.53mである。SD番号を付して調査を行ったが、圃場整備前の用水路(攪乱)と思われ、2区攪乱12に繋がる。縄文時代の不明石製品(第22図68)、中世の土師皿(第20図15)、加賀焼甕(16)、越前焼甕(17)などを図化した。

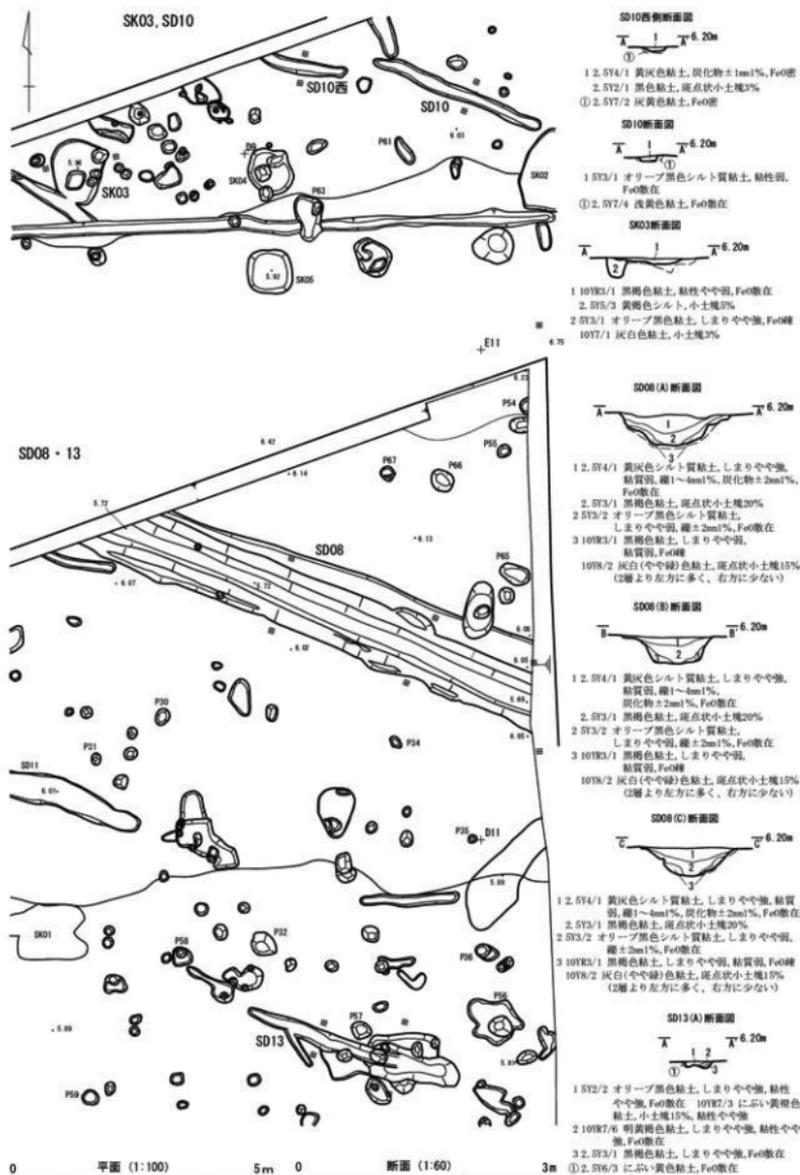
SD10(第17図) 1区北東部D9グリッドで検出し、検出面は標高6.02～6.05mである。全長約3.6m、幅約20～30cmを測り、深さは2～7cm程と浅い。平面形は直線的で、主軸はN-68°-Wである。途切れながら、C10区まで繋がるようである。断面形は逆台形状で、覆土はオリーブ黒色である。須恵器坏身(第20図18)などが出土した。

SD10西(第17図) 1区北東部D9グリッドで検出した。検出面の標高は6.03～6.07mで、長さ1.7m程を確認した。幅は約20～30cm、深さは4cm程だった。主軸はN-80°-Wである。断面形は逆台形状で、覆土は黄灰色である。2区SD14に繋がるようである。

SD01~03, P15



第16図 1区遺構図1 (S=1/150・1/60)



第17図 1区遺構図2 (S=1/100・1/60)

SD11・SK02など(第11・19図、図版2) 1区北東部D9・10グリッドで検出し、検出面は標高6.03～6.05mである。長さ6.7m程、幅約35～70cm、深さ約1～4cmを測り、平面形はくの字状を呈する。調査中は、周溝を持つ建物と想定したが、主柱穴と思われる柱穴は確認できなかった。須恵器無台坏(19、Ⅵ期)を図化した。

SD12(第16図) 1区北端C7・8グリッドで検出し、検出面の標高は5.92～6.00mである。長さ5m前後を確認した。幅は40～50cm程、深さは3～22cm程を測る。主軸は西部がN-48°-E、やや屈曲してN-66°-Eである。断面形は逆台形状を呈するとみられ、覆土は暗灰黄色～黒褐色である。土師器甕(第20図20)のほか、須恵器坏身(21)、須恵器高坏(22)などを図化した。

SD13(第17図) 1区東端C10グリッドで検出し、検出面は標高5.89～5.92mである。長さ約3.2m前後、幅20～40cm程、深さ5～12cm程である。主軸はN-71°-Wである。断面形は不整形な半円状で、覆土は明黄褐色～黒褐色である。

3. 土 坑(SK)

SK03(第17図) 1区北端C・D8グリッドで検出した。検出面は標高6.02～6.04mで、平面形は楕円形を呈する。長軸約1.4m、短軸約1mを測り、深さは7～9cmと浅い。断面形は浅い半円状である。須恵器の甕(第20図23)や坏蓋(24)などを図化した。24の天井部はロクロケズリであり、やや摩滅している。

4. 小 穴

番号を付した小穴は67基を数える。掘立柱建物の柱穴として柱列を捉えられたもの以外にも、建物プランの復元には至らなかったが柱根が残存する柱穴なども複数確認できたため、断面図を作成したものの中から以下に記述する。

P05(第18図) 1区東部B8グリッドで検出し、検出面の標高は5.4m前後である。平面形は隅丸方形を呈し、長軸36cm、深さ14cmを測る。柱根(第24図90)が残存していた。

P07(第11・18図、図版11) 1区中央付近A6グリッドで検出した。検出面は標高5.37mで、平面形は楕円形を呈する。長軸54cm、深さ28cmを測る。縄文土器深鉢(第20図25)が出土した。厚さ12～13mmと厚く、全体に摩滅するが、大粒のRL縄文を持ち、底部はナデ・ミガキである。大粒の砂粒を多く含み、体部には少し煤が付着する。

P13(第16図) 1区北端C7グリッドで検出し、検出面の標高は5.85m前後である。平面形は円形を呈し、径約30cm、深さは12cm程を測る。覆土は褐灰色である。

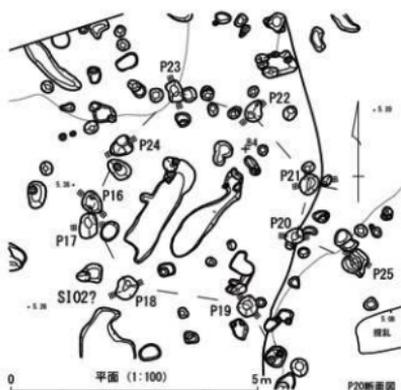
P15(第10・18図) 1区西端A2グリッドで検出し、検出面は標高5.45m前後である。平面形は楕円形を呈し、長軸27cm、深さ9cmを測る。覆土はオリーブ灰色で、柱根(第24図91)が残存していた。

P16(第18図、図版4) 1区西部2面のA3グリッドで検出し、検出面の標高は5.36～5.38mである。平面形は楕円形を呈し、長軸47cm、深さ12～19cmを測る。覆土はにぶい黄色～オリーブ黒色である。

P17(第18図、図版4) 1区西部2面のA3グリッドで検出し、検出面は標高5.36mである。平面形は方形で、長軸約50cm、深さ8cmを測る。覆土は黄灰色～オリーブ黒色である。

P18(第18図、図版4) 1区西部2面のA3グリッドで検出し、検出面は標高5.31～5.33mである。平面形は楕円形を呈し、長軸49cm、深さ5～19cmを測る。柱痕跡らしき土層が確認でき、覆土は黒褐色～オリーブ黒色である。

P19(第18図、図版4) 1区西部2面のA3・4グリッドで検出し、検出面の標高は5.25m前後である。平面形は円形で、径約40cm、深さ9cmを測る。覆土は暗オリーブ褐色～黒色である。



- 1 S13/1 オリーブ黒色粘土, しまりやや強, 礫±2ml%, FeO散
- 2 S16/4 にんい-黄色粘土, 小土塊3%, 粘性やや強
- 2 S16/4 にんい-黄色粘土, 粘性強, 礫±1ml%, FeO散
- 2 S14/1 黄灰色粘土, 土塊40% (右方堆積)
- 2 S13/1 黒褐色粘土, 小土塊3%
- ① 2 S17/4 浅黄色粘土, 粘性強, しまりやや弱, FeO散
- S12/2 オリーブ黒色粘土, 小土塊5%



- 1 S13/1 オリーブ黒色粘土, FeO散
- 2 S17/3 浅黄色粘土, 小土塊5%, 粘性やや強
- 2 S14/1 黄灰色粘土, 粘性強, FeO散
- S13/1 オリーブ黒色粘土, 小土塊3%
- 2 S16/4 にんい-黄色粘土, 小土塊3%
- 2 S16/2 灰黄色粘土, 粘性強, FeO散
- S12/2 オリーブ黒色粘土, 小土塊5%



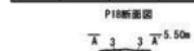
- 1 2 S13/1 黒色粘土, 粘性弱, 礫±1ml%, FeO散
- 2 S17/3 浅黄色粘土, 小土塊3%
- 2 2 S13/3 暗オリーブ褐色粘土, FeO散
- 2 S15/4 黄褐色粘土, 土塊30%
- ① 10187/4 にんい-黄褐色粘土, FeO散



- 1 S12/1 黒色粘土, 粘性やや強, 礫±1ml3%, FeO散
- 2 S12/2 黒色砂質粘土, FeO散
- 2 S16/2 灰黄色粘土, 小土塊1%
- 3 S12/1 黒色粘土, FeO散
- 2 S17/4 浅黄色粘土, 小土塊30%
- ① 10187/3 にんい-黄褐色粘土, 粘性強, FeO散
- 2 S14/1 灰黄色粘土, 小土塊3%, 粘性強



- 1 S13/1 オリーブ黒色粘土, 粘性やや強, 礫±2ml%, FeO散
- 2 S15/3 黄褐色粘土, 小土塊5% (下方堆積)
- 2 S14/1 黄灰色粘土, 礫±2ml%, 炭化物±1ml%, FeO散
- 2 S17/3 浅黄色粘土, 小土塊5% (上方堆積)
- ① 2 S15/2 暗灰黄色粘土, 粘性やや強, 礫±2ml%, FeO散
- 2 S13/1 黒褐色粘土, 小土塊3%



- 1 S13/1 オリーブ黒色粘土, 粘性強, FeO散
- 2 S16/3 にんい-黄色粘土, 小土塊3%
- 2 S13/2 黒褐色粘土, 粘性やや強, しまりやや強, FeO散
- 3 S13/2 黒褐色粘土, FeO散
- 2 S16/4 にんい-黄色粘土, 小土塊3%
- ① 2 S14/2 暗灰黄色粘土, FeO散
- S12/2 オリーブ黒色粘土, 小土塊5%, 粘性強, しまりやや強



- 1 S13/1 オリーブ黒色粘土, しまりやや強, 礫±1ml3%, FeO散
- 2 S17/4 浅黄色粘土, 底点状小土塊5%
- 2 S12/1 黒色粘土, 粘性やや強, FeO散
- 3 2 S16/3 にんい-黄色粘土, 粘性やや強, FeO散
- ① 2 S15/3 暗灰黄色粘土, 粘性やや強, 礫±2ml%, FeO散
- 2 S13/1 黒褐色粘土, 小土塊3%



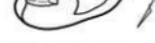
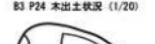
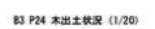
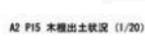
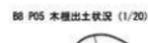
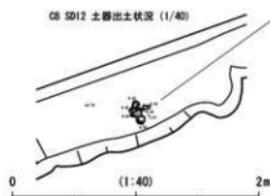
- 1 S12/2 オリーブ黒色粘土, 粘性やや強, しまり弱, FeO散
- 2 S17/6 明黄褐色粘土, 底点状小土塊5%
- 2 2 S16/3 にんい-黄色粘土, しまりやや強, FeO散
- S13/1 オリーブ黒色粘土, 小土塊10%
- 3 10186/6 明黄褐色粘土, FeO散
- S13/1 オリーブ黒色粘土, 小土塊40%
- 4 S13/1 黒褐色粘土, FeO散
- 2 S17/4 浅黄色粘土, 小土塊10%
- ① 2 S17/4 浅黄色粘土, FeO散
- S13/1 オリーブ黒色粘土, 小土塊5%, 粘性やや強



- 1 2 S13/2 黒褐色粘土, 粘性やや強, FeO散
- 2 S17/4 浅黄色粘土, 土塊40%
- 2 S13/2 オリーブ黒色粘土, 粘性やや強, FeO散
- 3 2 S14/1 黄灰色粘土, 粘性やや強, しまりやや弱, FeO散, 木あり
- 1017/1 灰白色粘土, 小土塊3% (X軸方向の中央堆積)
- 4 S12/2 オリーブ黒色粘土, FeO散
- ① 2 S16/4 にんい-黄色粘土, 粘性やや強, しまりやや弱, FeO散
- S12/1 黒色粘土, 小土塊3%, 粘性強



- 1 10183/1 黒褐色粘土, しまりやや強, FeO散
- 2 S17/4 浅黄色粘土, 小土塊1%
- 2 10187/4 にんい-黄褐色粘土, FeO散
- 2 S13/2 黒褐色粘土, 小土塊
- ① 10187/4 にんい-黄褐色粘土, FeO散
- 2 S14/1 黄灰色粘土, 小土塊5%



第18図 1区遺構図3 (S=1/100・1/60)

P20(第18図、図版4) 1区西部2面のA4グリッドで検出し、検出面の標高は5.23～5.25mである。平面形は楕円形で、長軸38cm、深さは20cm程である。土層断面からは柱痕跡が確認できる。覆土は灰黄色～黒色である。

P21(第18図、図版4) 1区西部2面のA4グリッドで検出し、検出面は標高5.25m前後である。平面形は楕円形を呈し、長軸43cm、深さ8cmを測る。柱痕跡と思われる土層が観察でき、覆土は黄灰色～オリーブ黒色である。

P22(第18図、図版4) 1区西部2面のA4グリッドで検出した。検出面は標高5.30m前後で、平面形は楕円形を呈する。長軸46cm、深さ5～15cmを測り、覆土はオリーブ黒色～黒色である。

P23(第18図、図版4) 1区西部2面のA3グリッドで検出し、検出面の標高は5.40m前後である。平面形は方形を呈し、長軸43cm、深さ22cmを測る。覆土は明黄褐色～オリーブ黒色である。

P24(第18図、図版4) 1区西部2面のA3グリッドで検出した。検出面の標高は5.37～5.38mで、平面形は不整形円形を呈する。長軸は42～47cm程で、深さは9～25cmを測る。柱根(第24図92)が残っていた。

P25(第18図、図版4) 1区西部2面のA4グリッドで検出した。検出面は標高5.21～5.23mで、平面形は不整形方形を呈する。長軸51cm、深さ6～15cmを測る。柱痕跡らしき土層が確認でき、覆土はにぶい黄橙色～黒褐色である。

SI02?(第18図) 西側下層のピット群は、調査中に縄文時代の柱穴列(楕円形か柄鏡形)の可能性を想定していた。P24のクリ材なので、縄文時代の用材としては問題がない。しかし、調査中に木材を取り上げた際には、柱材としての感覚は少なくて木の方向が合わないで、可能性を指摘するに留めたい。

P26 1区北部C7グリッドで検出した。検出面は標高5.80mで、平面形は方形を呈する。径約30cm、深さ8～25cmを測る。土師器高坏(第21図26)が出土した。

P53(第15図) 1区東部B7グリッドで検出した。検出面の標高は5.66～5.70mで、平面形は楕円形を呈する。長軸は70cm程、深さは5～13cmを測る。土層断面からは柱痕跡が確認できる。

P57 1区東端C10グリッドで検出し、検出面の標高は5.91m前後である。平面形は不整形方形を呈し、長軸約40cm、深さは4cm程である。生焼けの須恵器坏蓋(第21図27)や土師器の高坏脚部(28)と埴(29)を図化した。土師器は摩耗している。

P66 1区北東隅D10グリッドで検出し、検出面は標高6.15m、平面形は楕円形である。長軸約50cm、深さ22～28cmを測る。土師器くの字甕(30)が出土し、胴部ハケ調整で口縁部はヨコナデだが、摩耗する。

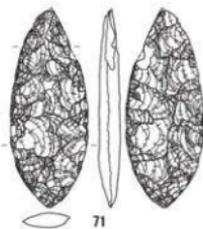
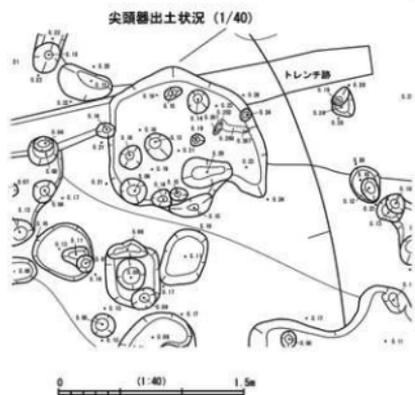
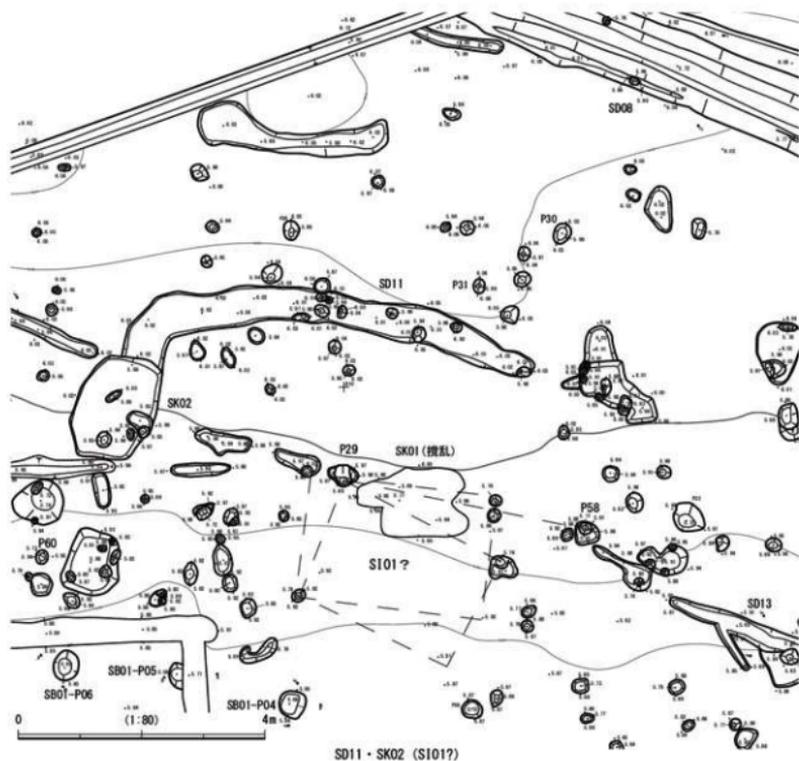
5. その他

SX04(第10図) 1区西部B5グリッドで検出し、検出面は標高5.40～5.50mである。平面形は不整形で、長軸約1.7m、短軸約60～120cm、深さ5～10cmを測る。土師器高坏(第21図31)が出土した。

SX06(第10図) 1区西部B5グリッドで検出し、検出面の標高は5.44m前後である。平面形は楕円形を呈し、長軸約1.1m、短軸約50cm、深さ9～32cmを測る。第21図32は内径接合なので弥生中期中葉の小松式甕である。

SX07(第10図) 1区西部B5グリッドで検出し、検出面は標高5.42～5.51mである。平面形は不整形方形を呈し、長軸約3.4m、短軸約2.9m、深さ6～20cmを測る。土師器高坏(第21図33)や縄文土器深鉢(34)などが出土した。33は内外面が摩滅し、34はRL縄文と下半はナデである。

SX10(第11図) 1区南端A6グリッドで検出し、検出面は標高5.43～5.47mである。平面形は不整形



第19図 1区遺構図4 (S=1/80・1/40・1/10・1/3)

で、長軸方向3.3m程を確認した。深さは5～40cmを測る。中世の土師器小皿(第21図35)が出土した。

鞍部(第10・11図) 1区西側A4～A7グリッドで検出した。下層では、A4・B4～A6・C6で確認された。自然河道はやや狭くなり、A5・B5～A6グリッド内である。鞍部上面には、不整形な土坑や小ピットが確認され、SX10では中世の小型土師器皿が出土している。最下層では第23図72～75・83が出土した。

出土遺物 以下、包含層などから出土した遺物を記載する。旧石器時代末と思われる柳葉形尖頭器(第23図71)はA3区下面包含層出土である。重機で下層検出面まで下げていた時に、バケットに引っ掛かって、裏返って移動した(第19図、図版11)。鞍部下層など出土の72～75は旧石器時代末～縄文時代前期頃であろうか。71・73～75は凝灰岩製である。

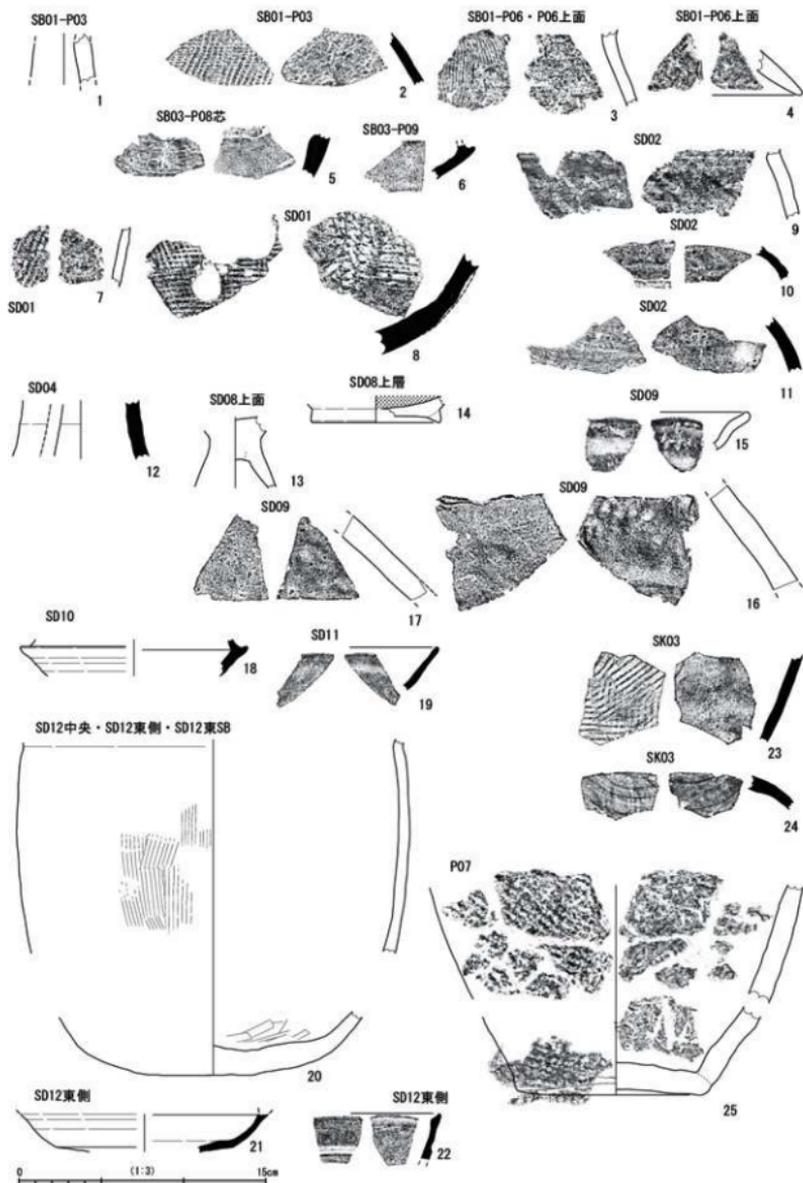
縄文時代では、B6区鞍部上面から縄文土器の粗製深鉢(61)が出土している。厚さなどから、中期であろうか。縄文時代の石器は、定角式磨製石斧(69・83)、打製石斧(79・80)、石鏃(81)、剥片(70・76・77)があり、84の石鏃は調査区東側の水田で表採した。81は下呂石製石鏃である。黒曜石は藤根久氏の協力で諏訪産と同定された。

弥生時代(中期)では、A3区で大型蛤刃石斧(82)が出土した(図版11)。

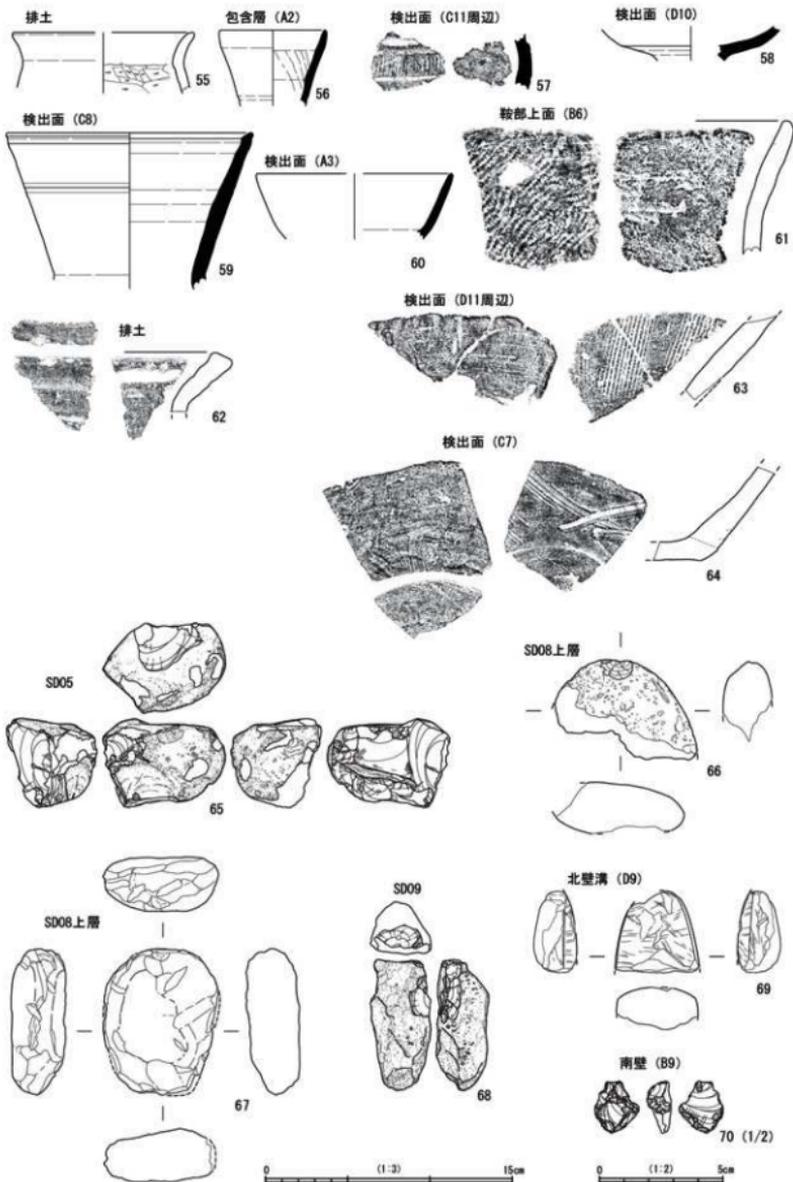
古墳時代では、土師器甕(41・55)、土師器高杯(39・49)、須恵器坏蓋(52・44・54)、須恵器高杯(58)、甕(57)、甕(36～38)、瓶類(42・56・59)が後期、須恵器坏蓋(53)が末期である。44の天井部にはヘラ記号があり、周辺は黒化し、滑らかである。52は天井部に降灰。54はロクロケズリであるが、最後のみロクロナデである。58の受部内面には降灰。59は内面上半・外面下半に自然釉。

古代では、須恵器坏蓋(43)、須恵器有台坏(60・48)、須恵器無台坏(45)、須恵器有台皿(51)、土師器内黒塊(46)、土師器高杯(50)を図化した。60はⅣ期、45・48・51は9世紀中葉以降、46は10世紀代であろう。40と46の底面には、墨書が確認される。40は墨書不明文字2と縦方向のヘラ記号を持つ。46の文字も判読不明である。60は重ね焼きⅠかⅡ類である。

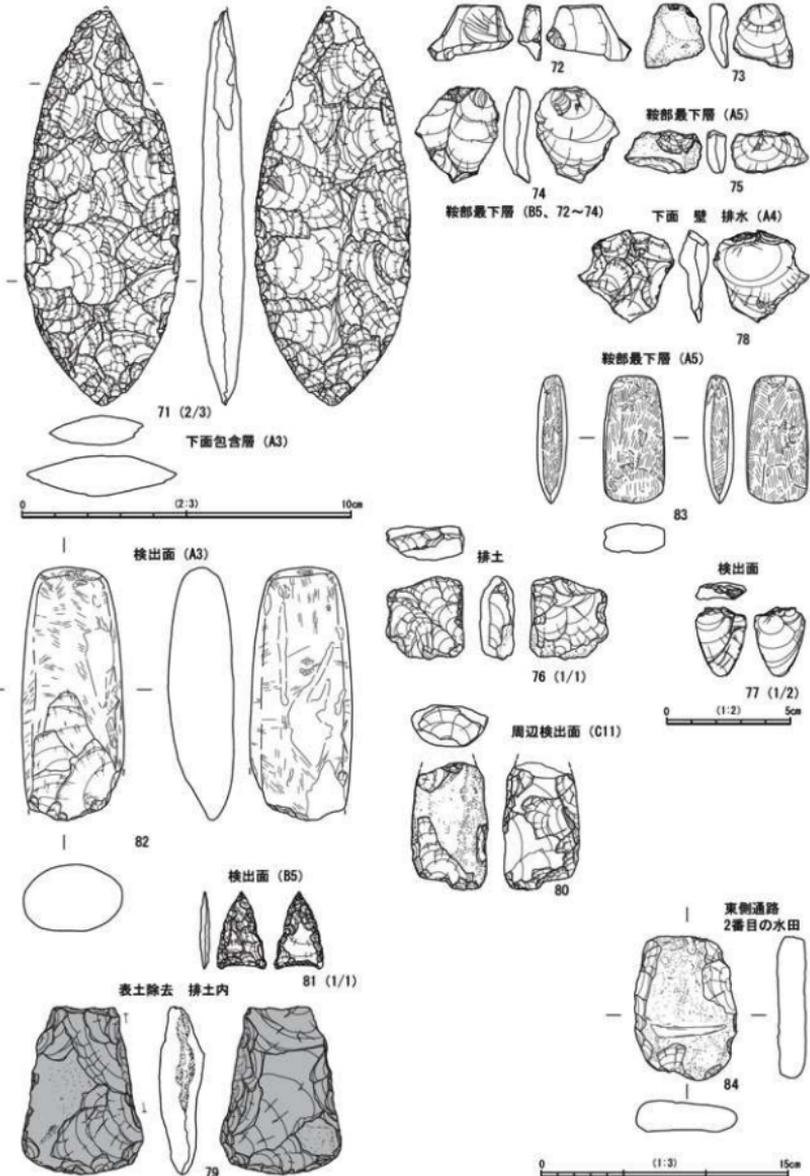
中・近世では、龍泉窯青磁碗(第21図47)、越前焼甕(62)、加賀焼摺鉢(63・64)などを図化した。47は全体に厚く、見込みには花文を持つようである。63は27mm間に13本の鉋目がある。64は外面にケズリ、内面は使用により滑らか。第24図93は総黒色の漆器碗であり、近世と思われ、樹種はトチノキである。



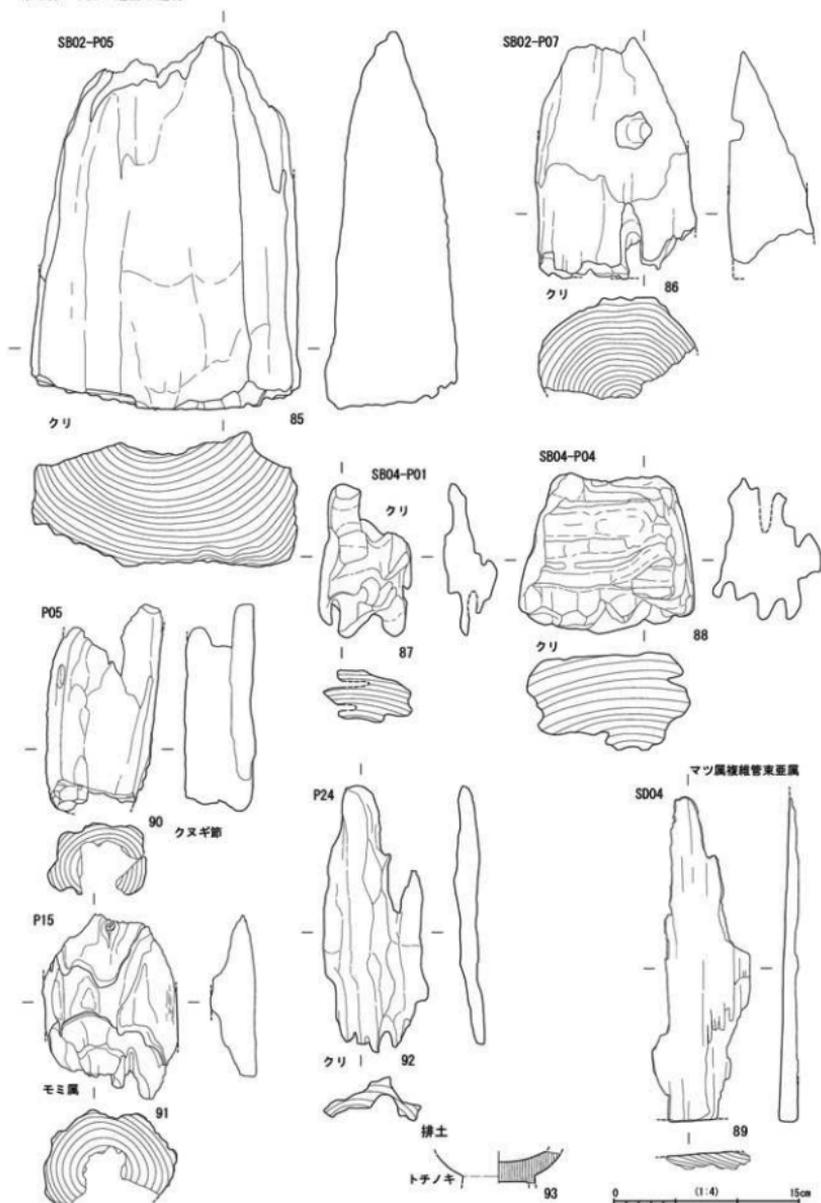
第20図 1区出土遺物 1 (S=1/3)



第22図 1区出土遺物3 (S=1/3・1/2)



第23図 1区出土遺物4 (S=1/3・1/2・2/3)



第24図 1区出土土木製品(S=1/4)

種名	管理	地区	グリッド	出土層階等	跡地	口径	底径	高さ	遺存率	色調(内)	色調(外)	輪郭	胎土	構成	顕微(内)	顕微(外)	備考
1	0104	1E	C9	S001-P03	高坪	破片	破片	(3.2)	破片	破片	灰白	灰白	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
2	0101	1E	C9	S001-P03	裏	破片	破片	(4.6)	破片	白	灰白	白	褐色粒・褐色粒や砂多	灰	灰	中心部ナリナリ	中心部ナリナリ
3	0119	1E	C9	S001-P06	裏	破片	破片	(2.8)	破片	白	白	白	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
4	0100	1E	C9	S001-P06上層	高坪	破片	破片	(1.6)	破片	灰白	灰白	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
5	0102	1E	C9	S001-P06中	傾面	破片	破片	(2.1)	1/12	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	外周工具のナリ痕
6	0103	1E	C9	S000-P09	坪身	破片	破片	(3.7)	破片	白	白	白	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	外周部胎土・体口縁部の遺痕
7	0109	1E	A3	S001	窪跡	破片	破片	(8.1)	破片	白	白	白	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
8	0101	1E	A3	S001	窪跡	破片	破片	(4.4)	破片	白	白	白	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
9	0102	1E	A3	S002	窪跡	破片	破片	(2.0)	1/120下	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
10	0103	1E	A3	S002	坪身	破片	破片	(3.3)	破片	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
11	0149	1E	A3	S004	高坪	破片	破片	(3.6)	3/12	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
12	0149	1E	A3	S004	高坪	破片	破片	(4.4)	4/12	灰白	灰白	灰白	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
13	0150	1E	D10	S006上層	高坪	破片	破片	(2.7)	1/6	灰	灰白	灰白	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
14	0151	1E	D10-11	S006上層	有台座	破片	破片	(2.3)	1/120下	灰	灰白	灰白	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
15	0194	1E	B7	S009	窪	破片	破片	(5.1)	1/120下	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
16	0196	1E	B8	S009	加蓋蓋	破片	破片	(6.5)	破片	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
17	0195	1E	B8	S009	傾面	破片	破片	(2.3)	5/12	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
18	0192	1E	C9	S010	坪身	破片	破片	(2.6)	1/120下	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
19	0197	1E	D10	S011	無台座	破片	破片	(3.3)	1/12	白	白	白	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
20	0147	1E	C7	S012中・ 中底・C7	窪跡	破片	破片	(2.4)	1/12	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
21	0153	1E	C8	S012中層	坪身	破片	破片	(2.4)	1/12	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
22	0198	1E	C8	S012中層	高坪	破片	破片	(5.3)	破片	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
23	0199	1E	C8	S003	窪	破片	破片	(2.6)	2/12	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
24	0200	1E	C8	S003	坪身	破片	破片	(11.7)	底面	白	白	白	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
25	0173	1E	A6	P07	窪跡	破片	破片	(1.8)	1.5/12	明赤	明赤	明赤	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
26	0174	1E	B7	P08	高坪	破片	破片	(2.0)	2/12	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
27	0175	1E	C10	P57	坪身	破片	破片	(2.1)	1.5/12	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
28	0176	1E	C10	P57	高坪	破片	破片	(2.9)	1/120下	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
29	0177	1E	C10	P57	窪?	破片	破片	(3.6)	破片	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
30	0178	1E	D10	P66	窪	破片	破片	(2.3)	3/12	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
31	0185	1E	B5	S004	高坪	破片	破片	(1.8)	1/120下	白	白	白	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
32	0104	1E	B5	S005	窪	破片	破片	(2.7)	底面	白	白	白	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
33	0186	1E	B5	S007	高坪	破片	破片	(3.9)	1/12	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
34	0187	1E	A6	S007	窪跡	破片	破片	(1.2)	1/12	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
35	0188	1E	A6	S010	小窪	破片	破片	(3.3)	1/12	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
36	0145	1E	D9	北溝	窪	破片	破片	(4.0)	破片	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	
37	0202	1E	D10	北溝	窪	破片	破片	(4.0)	破片	灰	灰	灰	褐色粒	灰	ナリ	ナリ	

表3-1 瓦任土遺物調査表1

標識番号	標識地区	グリッド	出上標識等	設置	口径 (cm)	高さ (cm)	設置高さ	色黒(内)	色黒(外)	幅	版土	構成	設置(内)	設置(外)	備考
38	0204	B5	北壁SB	壁	-	-	壁小	灰	灰	-	石灰・白色粒を多量	角	同心円状のナナ字	ナナ字タテ	道路標識
39	0106	B5	北壁(17号)	高弁	-	-	壁片	灰	灰	(3.9)	1→2mmの石灰(白)・白色粒を多量	角 シタリ	マヌ	マヌ	道路標識
40	0157	C6	北壁溝	無台弁	(15.6)	(2.7)	1/12	灰白	灰白	1/12	黒石・石灰を多量	角	ロクロナ字	ロクロナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
41	0158	B6	北壁溝標識土上	壁	(12.7)	-	2/12	にこい青	にこい青	-	黒石・石灰の粒を多量含む	角	ヨコナナ字	ハナシ・ヨコナナ字	内側から壁の厚さ
43	0159	B10	北壁	弁	-	-	(1.8)	黒のみ	灰白	-	白色粒を多量含む	角	ロクロナ字	ロクロナ字	外周に黒字
44	0203	B10	北壁	壁	-	-	(8.6)	1/12	灰白	灰白	白色粒を多量含む	角	ロクロナ字	ロクロナ字	外周に黒字
45	0161	B9	北壁	弁	-	-	(5.1)	1.5/12	青灰	青灰	白色粒を多量含む	角	黒ナナ字	ロクロナ字・黒ナナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
45	0160	B2-A5	北壁溝	無台弁	-	(10.0)	2/12	灰白	灰白	2/12	白色粒を多量含む	角	ロクロナ字	黒ナナ字・黒ナナ字	外周に黒字・ハナシ、度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
46	0162	B9	北壁	有台弁	-	-	(1.4)	2/12	黒	にこい青	0.5mmの黒石多量、白色粒・黒石	角	ハナシ(角)	ヨコナナ字	内側
47	0149	B5	標識土上	有台弁	(8.3)	(2.6)	5/12	明緑灰	明緑灰	-	黄色粒を多量含む	角	ロクロナ字	ロクロナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
48	0163	B5	標識土上	有台弁	(7.1)	(1.4)	7/12	灰白	灰白	7/12	黒石・石灰を多量含む	角	ロクロナ字	ロクロナ字	内側から壁の厚さ
49	0164	B5	標識土上	高弁	-	-	(8.3)	灰白	灰白	-	黒石・石灰を多量含む	角	ナナ・ハナシ	マヌ	内側から壁の厚さ
50	0168	B11	北壁	無台弁	-	-	(5.4)	6/12	灰白	灰白	0.5mmの白色粒を多量含む	角	マヌ	マヌ	内側から壁の厚さ
51	0165	B5	標識土上	有台弁	(8.6)	(1.7)	2/12	灰	灰	-	白色粒を多量含む	角	ロクロナ字	ロクロナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
52	0166	B5	標識土上	弁	-	-	(3.7)	2/12	灰	灰	0.5mmの白色粒を多量含む	角	ロクロナ字	黒ナナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
53	0206	B5	標識土上	弁	-	-	(1.5)	壁片	灰	-	黒石・石灰を多量含む	角	ロクロナ字	黒ナナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
54	0209	B5	標識土上	弁	(10.8)	-	(2.1)	小弁	灰	-	0.5mmの白色粒を多量含む	角	ロクロナ字	黒ナナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
55	0167	B5	標識土上	壁	(8.8)	(2.5)	2/12	灰青	灰青	-	1→2mmの黒石・石灰を多量含む	角	ヨコナナ字	ヨコナナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
56	0169	A2	北壁溝	壁	(6.3)	-	(4.7)	2.5/12	青灰	青灰	黒石・石灰を多量含む	角	ヨコナナ字・ヨコナナ字	ヨコナナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
57	0208	B5	C1(北壁)	壁	-	-	(3.4)	壁片	灰	-	白色粒・黒石を多量含む	角	ロクロナ字	ロクロナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
58	0170	B5	北壁	高弁	-	-	(2.1)	3/12	灰白	灰白	黒石・赤黒石の粒を多量含む	角	ロクロナ字	ロクロナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
59	0171	B5	北壁	壁	(14.8)	-	(8.6)	2/12	黒	黒	0.5mmの白色粒を多量含む	角	ロクロナ字	ロクロナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
60	0172	B5	北壁	有台弁	(11.8)	-	(4.0)	1/12	灰白	灰白	白色粒を多量含む	角	ナナ字	ナナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
61	0201	B5	北壁	壁	-	-	(8.2)	1/12(下)	にこい青	にこい青	1→2mmの黒石・石灰を多量含む	角	ナナ字	ナナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
62	0205	B5	北壁	壁	-	-	(4.7)	1/12(下)	黒	黒	白色粒・石灰を多量含む	角	ナナ字	ナナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
63	0207	B5	北壁	壁	-	-	(5.2)	壁片	灰白	灰白	0.5mmの黒石を多量含む	角	ナナ字	ナナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線
64	0210	B5	北壁	壁	-	-	(5.7)	2/12	明赤	明赤	黒石・石灰を多量含む	角	ナナ字	ナナ字	度(12)・度(18)の外周に黒字・ハナシ、度(18)の直線

第4表 1区に設置する道路標識

報告番号	管理番号	地区	グリッド	出土遺物等	形状	長 (cm)	幅 (cm)	厚・高 (cm)	重さ (g)	石材	備考
65	0211	1区	A4	S005	石球	5.4	7.4	5.3	200.0	珪質頁岩	自然産；有(産戸埋) 高さの一部に黒痕、黒色の付着物
66	0220	1区	D10E	S004上層	石球	(6.15)	(9.65)	3.1	(137)	凝灰岩	
67	0220	1区	D10E	S004上層	石球	8.95	7.0	3.3	251	凝灰岩	ガリリ多し
68	0213	1区	B8E	S009	不明	7.8	3.6	3.1	94.1	凝灰岩	自然産；有
69	0227	1区	D9	北壁 溝	磨製石片	(5.0)	(5.2)	(2.6)	(98.1)	凝灰岩	裏面に磨耗による痕跡。
70	0222	1区	B9	南壁	削片	2.1	1.8	1.0	2.3	黒曜石	
71	0212	1区	A3	下層台舎壁	火曜鏡	(12.1)	4.7	1.3	(63.7)	凝灰岩	全体的に黒化が顕著
72	0214	1区	B5	輪郭壁下層	削片	3.0	4.6	1.4	20.9	ガラス質火山岩	黒化が強い
73	0215	1区	B5	輪郭壁下層	削片	3.8	3.5	1.1	9.7	凝灰岩	自然産；有
74	0216	1区	B5	輪郭壁下層	削片	5.8	5.0	1.4	29.1	凝灰岩	自然産；有
75	0217	1区	A5	輪郭壁下層	削片	2.6	4.6	1.1	11.1	凝灰岩	自然産；有、右側部・裏面は粗粒
76	0221	1区	A5	削土	削片	1.6	1.6	0.7	2.2	玄關	両側部部に粗粒が顕著
77	0223	1区	A5	削土	削片	2.8	2.0	0.6	3.3	黒曜石	
78	0224	1区	A4	下層 壁跡水	削片	5.6	5.3	1.8	33.3	凝灰岩	
79	0218	1区	C11	井土跡水跡土内	打製石片	10.2	7.3	2.6	173.6	凝灰岩	
80	0219	1区	C11	風辺跡土内	打製石片	(7.8)	4.6	2.5	(118.0)	テラサイト	自然産；有、全体的に黒化が顕著
81	0220	1区	B5	輪郭壁下層	石球	3.0	2.0	0.4	2.0	下呂石	自然産；有(戸埋)
82	0225	1区	A3	輪郭壁下層1	磨製石片	(15.5)	6.4	4.1	(819)	凝灰岩	大型輪刀
83	0226	1区	A5	輪郭壁下層	磨製石片	7.8	3.7	1.8	90.3	凝灰岩	
84	0228	1区	A5	東側遺跡2層目の水田	石球	8.8	6.2	1.9	147.2	凝灰岩	

報告番号	管理番号	地区	グリッド	出土遺物等	形状	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚・高 (cm)	材質	不取リ	備考
85	0203	1区	C7E	S002-P05	削片	(30.9)	21.8	11.0	クリ	破目	
86	0206	1区	C7E	S002-P07	削片	(19.7)	(13.1)	(8.5)	クリ	北持丸木	古墳
87	0207	1区	B6E	S004-P01	削片	(12.5)	(7.5)	(4.3)	クリ	割れ	古墳
88	0270	1区	E7E	S004-P04	削片	(13.1)	(14.3)	(8.0)	クリ	磨丸・平皮	
89	0208	1区	A3E	S004	(26.5)	(8.0)	(1.5)	マツ属植物等炭素質	破目	近代	
90	0204	1区	B6E	P05	15.0	8.55	5.8	コナク属クヌギ年輪	北持丸木	不明	
91	0209	1区	A2E	P15	(15.1)	(11.0)	(7.9)	モミ属	北持丸木	不明	
92	0205	1区	P24		21.7	8.5	3.66	クリ	割れ	不明	
93	0271	1区		削土			(2.6)		トナリキ	焼木取り	残存 表9/12、底巻(5/7)

第4章 第2次調査

第1節 概要と基本層序

1. 概要

第2次調査は3,370㎡を対象に、2-1・2-2・2-3区と細分して調査を実施した(第25図)。遺構番号はSB、SI、SD、SK、SF、NR、P、SXを用い、それぞれ1から番号を付した。

2区は調査区全体が耕地整理時の削平を受けており微地形は判然としなが、1区と同様南側が低くなっている。遺構検出面は標高5.10～6.50m前後と高低差がある。削平を受けたため遺構の深さは全体的に浅いものの、遺構密度は1区と比較しても高い。掘立柱建物8棟、周溝をもつ建物1棟、溝17条、井戸も含めた土坑21基、道路状遺構(波板状凹凸)、河川跡、小穴などを検出した(第27～30図)。遺構の時期は大きく古墳時代後期～平安時代と近世の2時期に分けられる。古墳時代後期～平安時代では、調査区を北から南へ縦断する河道の両岸に遺構が展開している。掘立柱建物群、周溝をもつ建物、井戸、土坑群の一部が当該期に属するとみられ、当遺跡はこの時期に最盛期を迎えたと考えられる。近世の遺構としては、土坑、井戸、柱穴などが検出面の標高レベルが高い調査区北側でまとまって検出された。底部に腐物を敷いた土坑や、結桶を井戸枠とした井戸なども確認した。柱列は明らかでないが、礎石をもつ柱穴などもあり、他にも掘立柱建物の存在が予想される。また、西側はA1～C3区にかけて2面(下層)を調査(第27図)しており、少数のピットを確認した。

2. 基本層序

層序は、上位から表土(盛土、耕作土)、暗灰黄色粘土(整地土)、黒褐色粘土(包含層)、にぶい黄橙色粘土(漸移層)、にぶい黄橙色～灰白色粘土(基盤層)を基本としている(第25図)。前述のとおり耕地整理時に削平を受けており、土層観察からは包含層が攪拌されたような様相も見受けられた。

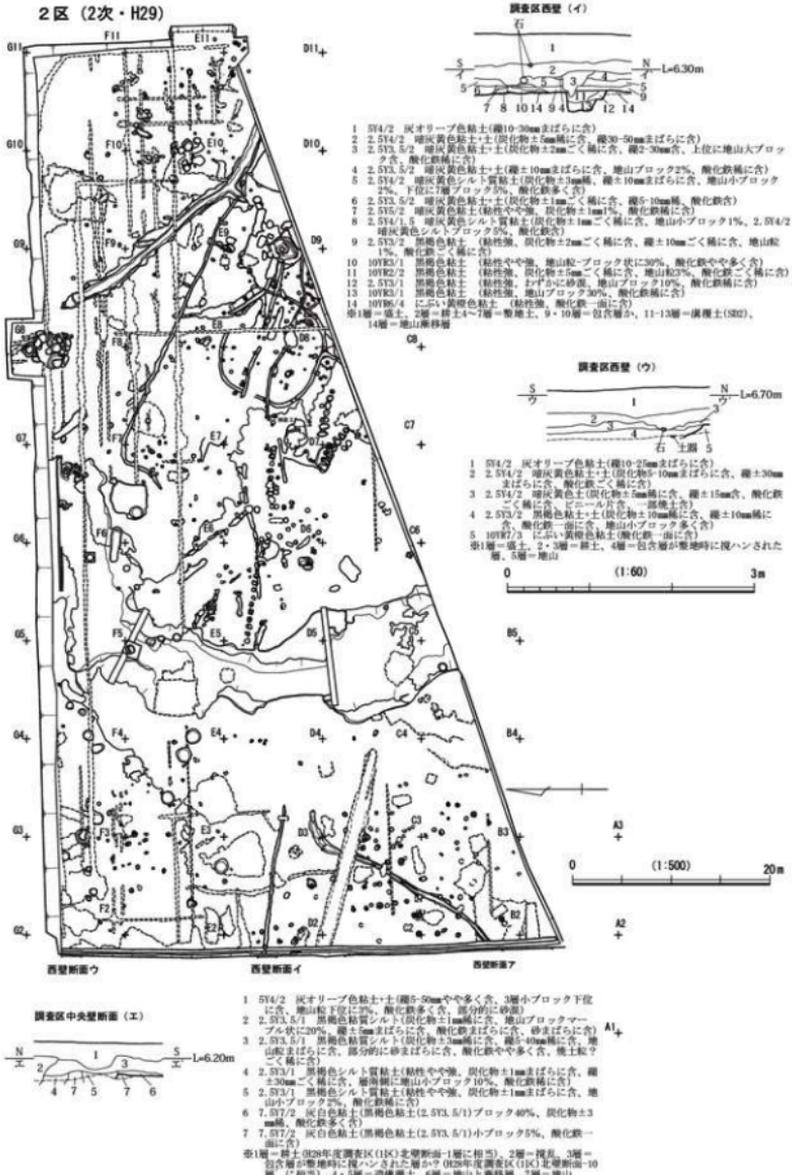
第2節 2区の遺構と遺物

1. 掘立柱建物・柱列

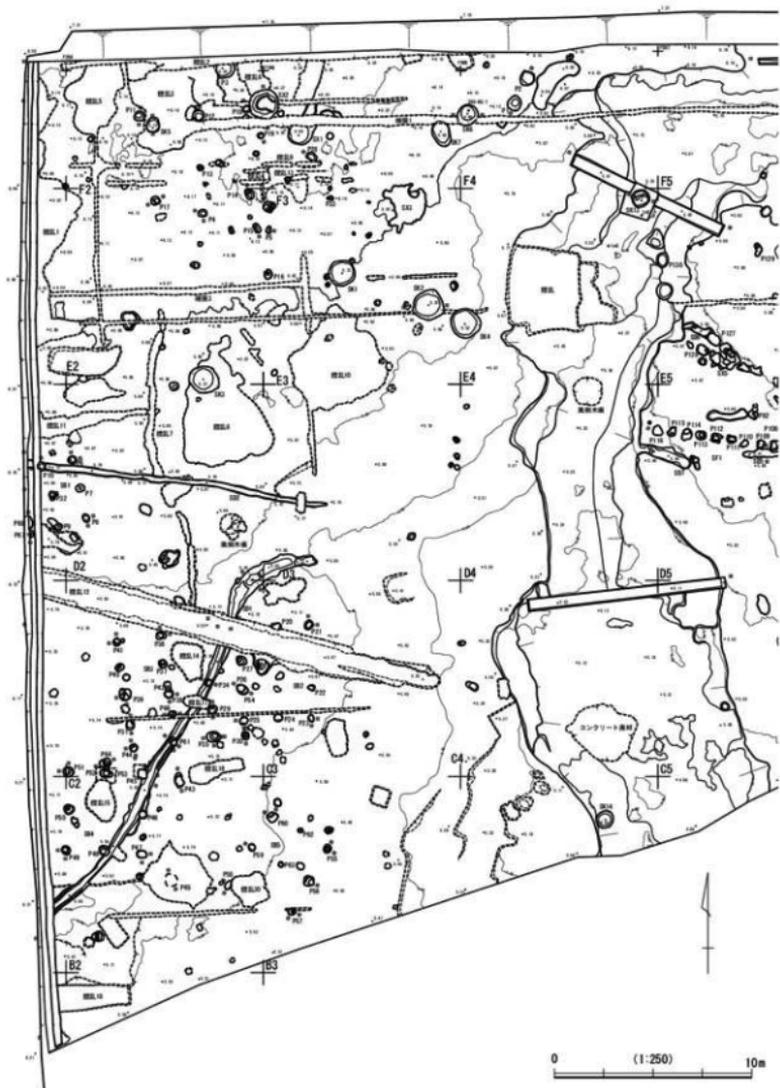
掘立柱建物は2区において8棟確認しており、時期は古墳時代後期～平安時代と近世に位置付けられる。前年度調査の1区同様、2×2間の正方形に近い建物と桁行が長い長方形の建物が対をなしていると考えられる。SB1～5までが河道右岸に、SB6～8が左岸に位置する。また、建物配置を想定することはできなかったが、柱痕跡ない礎石をもつ柱穴が点在しているため実際の棟数は増えるものと予想される。

以下、個別に記述していく。

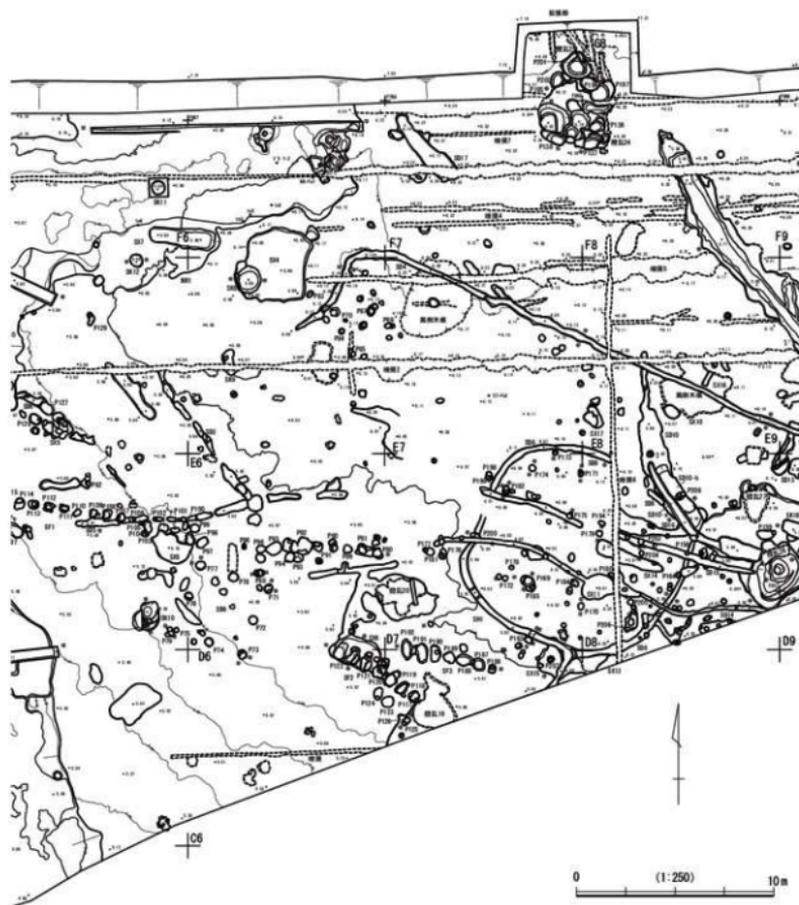
SB1(第31図、図版18) 2区西端D1・2グリッドで検出し、検出面は標高5.89～5.97mである。2間(2.9m)×2間(3m)の総柱建物で、西辺が調査区外へ延びる。主軸はN-14°-Wである。柱間や柱配列は比較的整っており、柱間は梁間で1.45～1.5m、桁行で1.5～1.6mを測る。柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、いずれも径40～45cm程である。深さはP8が12cmと最も浅く、他は23～40cmを測る。土層観察から柱痕跡や柱の抜き取り跡を確認できるピットが多く、P6では南方方向への抜き取り跡とみられる土層を確認した。柱根はP32とP67(第58図241スダジイ)が残存しており、径15cm程の柱が据えられて



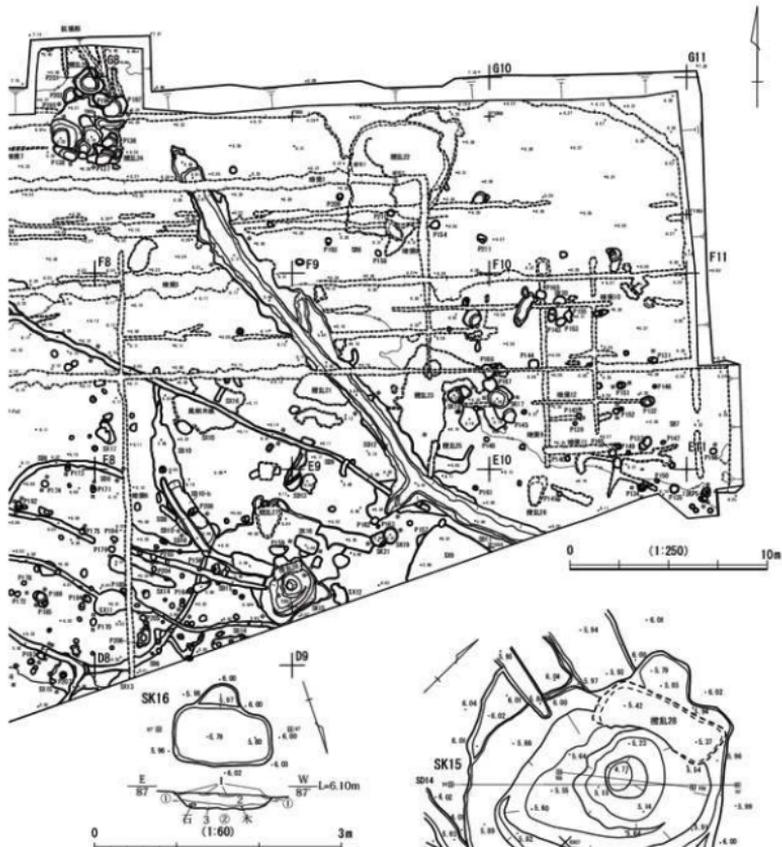
第25図 2区全体図・調査区壁断面図(S=1/500・1/60)



第28図 2区部分図1 (S=1/250)



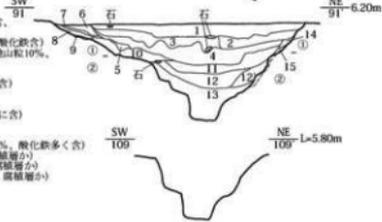
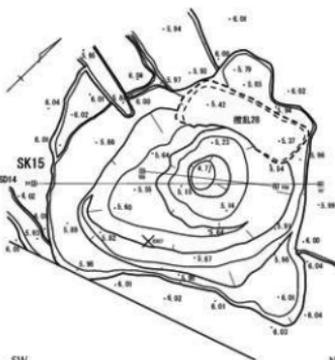
第29図 2区部分図2 (S=1/250)



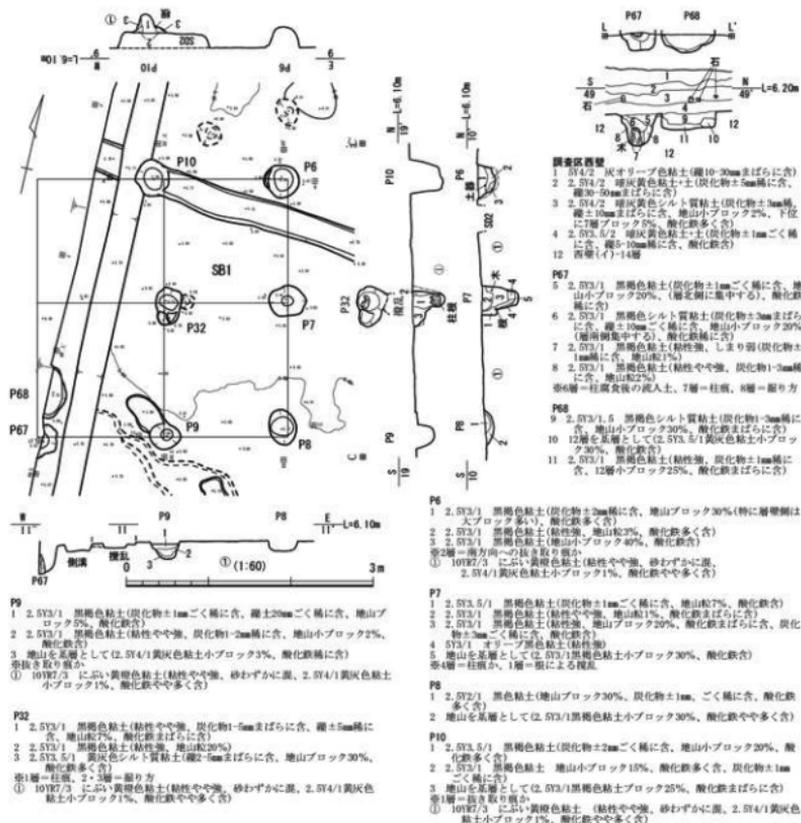
- 1 2.SY3/1.5 黒褐色シルト(わずかに砂混、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
 - 2 2.SY3/1 黒褐色粘土(炭化物±3mmごく稀に含、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
 - 3 2.SY2.5/1 黒褐色シルト質粘土(炭化物±2mmごく稀に含、地山粒10%、酸化鉄まばらに含)
- 巻上土の腐植土の塊状 砂90グラッド北東斜面一段下げた後、抽出した遺構
- ① 5% 3/2 灰オリーブ色シルト(砂わずかに混、細10-20mmまばらに含、2.SY3/1黒褐色シルト基状に20%、酸化鉄多く含)
 - ② 2.SY3/1 オリーブ灰色シルト質粘土に2.SY3/1黒褐色シルト質粘土基状に10%、酸化鉄まばらに含)

SK15

- 1 2.SY2.5/1 黒褐色シルト質粘土(礫±15mm、±100mmまばらに含、炭化物10-10mm稀に含、酸化鉄多く含)
- 2 2.SY2.5/1 黒褐色粘土(粘性強、礫±10mm稀に含、炭化物±3mm稀に含、地山粒1%、酸化鉄含)
- 3 2.SY2.5/1 黒褐色シルト質粘土(礫10-100mmごく稀に含、炭化物0-10mmまばらに含、地山粒10%、酸化鉄含)
- 4 2.SY3/1 黒褐色粘土(粘性強、炭化物±3mmごく稀に含、酸化鉄中位に一面に含)
- 5 2.SY3/1 黒褐色シルト(炭化物±1mmごく稀に含、地山粒1%、酸化鉄まばらに含)
- 6 2.SY3/1 黒褐色シルト(炭化物±1mm稀に含、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
- 7 2.SY3/1 黒褐色シルト(地山粒1%、酸化鉄まばらに含)
- 8 2.SY2.5/1 黒褐色シルト質粘土(炭化物±2mmごく稀に含、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
- 9 地山を基層として12.SY3/1.5黒褐色シルト質粘土ブロック5%、酸化鉄稀に含)
- 10 2.SY3/1 黒褐色粘土(炭化物±2mm稀に含、地山ブロック10%、酸化鉄やや多く含)
- 11 2.SY3/1 黒褐色シルト質粘土(粘性強、しまり弱、植物遺体含、地山小ブロック2%、酸化鉄多く含)
- 12 2.SY2.5/1 オリーブ灰色粘土(粘性強、しまり弱、植物遺体含、地山小ブロック1%、腐植層が)
- 13 2.SY3/1 オリーブ黒色粘土(粘性強、しまり弱、植物遺体含、地山小ブロック3%、腐植層が)
- 14 2.SY2.5/1 黒褐色粘土(炭化物±1mmごく稀に含、地山粒2%、酸化鉄稀に含)
- 15 地山に近接する不整形シルトコアに含
- ① 50% 1/1 オリーブ灰色シルト質粘土に2.SY3/1黒褐色粘土ブロック7%、酸化鉄多く含)
- ② 2.SY3/1 オリーブ灰色粘質シルト(粘性やや強、酸化鉄多く含)



第30圖 2区部分図3、SK15・16(S=1/250・1/60)



第31図 2区SB1実測図(S=1/60)

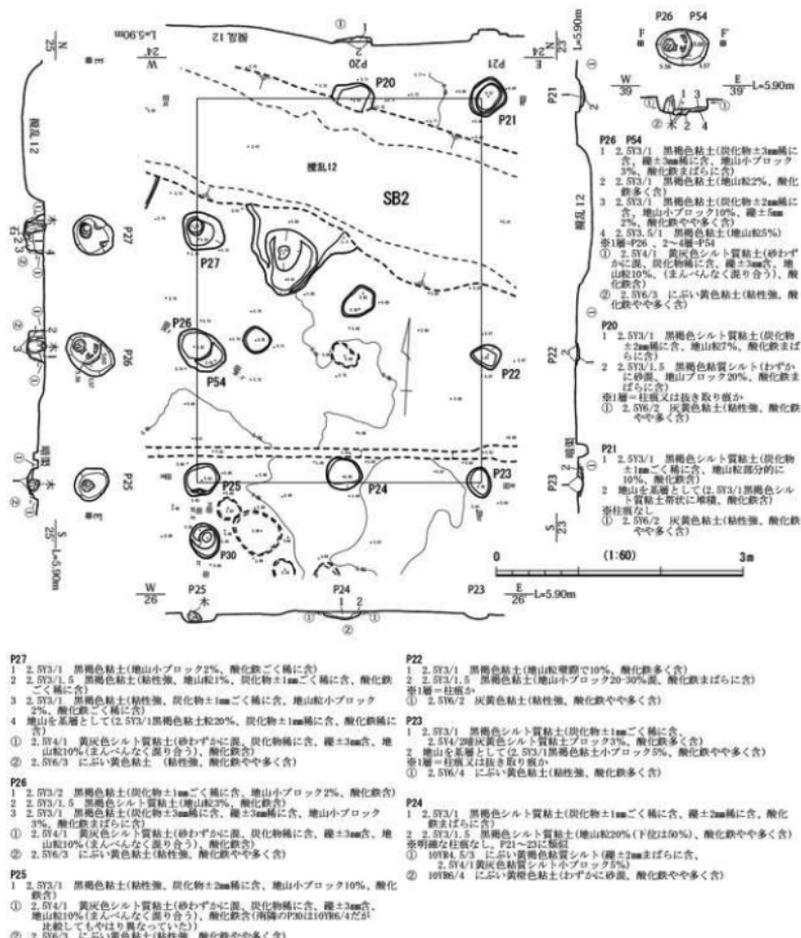
いたようである。柱穴の覆土は黒褐色～黒色である。柱穴からは土師器の細片が少量出土しているほか、P7から6世紀前葉に位置付けられる須恵器の坏蓋(第52図94)が出土している。

SB2(第32図、図版19) 2区南西隅C2・3グリッドで検出し、検出面は標高5.64～5.74mである。2間(3.4m)×3間(4.7m)の側柱建物で、建物北西隅の一部が攪乱12によって切られている。主軸はN-4°-Wである。柱間は梁間で約1.65～1.7m、桁行で約1.5～1.6mとほぼ揃っており、柱配列も比較的整っている。柱穴の平面形態は方形や円～楕円形と不揃いである。径は長軸で34～51cm程で、深さは4～24cmを測る。P20・P22・P23で確認した柱痕跡ないし抜き取り跡とみられる土層や、柱根はP25、P26・P27(第58図242・243共にサクラ属)に残存しており、径15～20cm程の柱が据えられていたと考えられる。柱穴の覆土は概ね黒褐色である。P26から出土した須恵器片は、SB1-P7出土の須恵器坏蓋と接合する(第52図94)。また、P26に切られているP54が建物の建て替えによるものなのか、別遺構なのかは判然としない。建物の時期はSB1と同時期と考えられる。

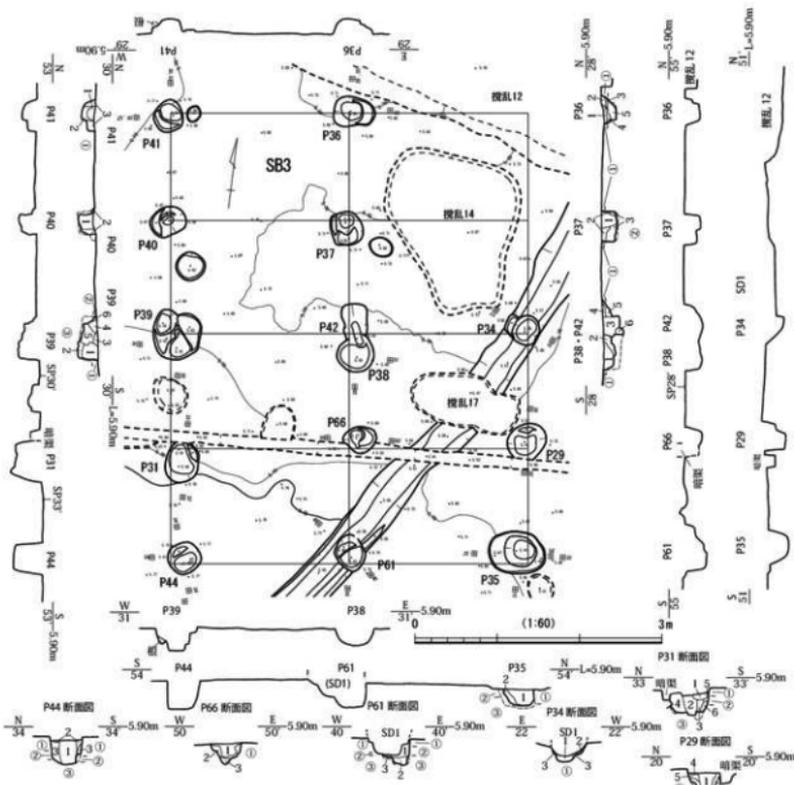
SB3(第33図、図版20) 2区南西隅C2グリッドで検出した。検出面は標高5.67～5.77mである。2間(4.2m)×4間(5.6m)の総柱建物で、建物北東隅の一部が攪乱12・14によって切られる。主軸はN-7°-Wである。柱間は梁間で約2.1～2.2m、桁行で約1.3～1.5mと比較的揃っており、柱配列にも大きなずれはない。柱穴の平面形態は方形や円～楕円形、不整形円形と不揃いである。径は長軸で39～70cm程、深さは13～43cmを測る。土層からは柱痕跡や抜き取り跡が確認でき、P40では北方向への、P35では西方向への抜き取り跡とみられる土層をそれぞれ確認した。柱根は残存していないが、柱痕跡から柱の径は15～20cm程と推定される。柱穴の覆土は概ね黄灰色～黒褐色である。柱穴からは土師器の細片がごく少量出土している。建物の時期は古墳時代後期～平安時代とみられるが、より詳細な時期の特定には至らなかった。

SB4(第34図、図版21) 2区南西隅C1・C2・B2グリッドで検出し、検出面は標高5.67～5.77mである。2間(3.8m)×2間(4m)で、建物中央部は周囲の柱穴の底面レベル近くまで攪乱を受けているため総柱か側柱かは不明である。しかし、北辺の柱列から飛び出すP64の土質がSB4の柱穴と類似していることや、柱痕跡が明瞭なことから、棟持柱をもつ建物だった可能性がある。主軸はN-2°-Eである。柱間や柱配列は整っており、柱間は梁間で約1.8～2m、桁行で約1.9～2.1mを測る。柱穴の平面形態は概ね円形や方形を呈し、径は長軸で48～56cm前後、深さは17～37cmを測る。柱痕跡ないし抜き取り跡を観察できる柱穴が多く、P49では東方向への抜き取り跡とみられる土層が観察できた。これらの土層観察やP51から出土した柱根(第58図244クリ)から、設置されていた柱の径は15～20cm前後と推測される。なお、P51の柱根は耕地整理時に原位置から多少動いた可能性がある。柱穴の覆土は概ね黄灰色～黒褐色である。建物の時期は古墳時代後期～平安時代に位置付けられるが、出土遺物が細片のため、詳細な時期の特定はできていない。

SB5(第36図、図版22) 2区南西隅B2・3グリッドで検出し、検出面は標高5.52～5.68mである。2間(3.2～3.5m)×2間(3.6～4.2m)の総柱建物で、南辺の一部が攪乱30によって切られている。主軸はN-30°-Eである。柱間は梁間で1.5～1.7m、桁行で1.7～2.3mと不規則で、柱配列に大きなずれはないものの、建物の平面形は南西へと開くような形を呈する。柱穴の平面形態は円～楕円形、方形を呈し、径は長軸で28～54cm程、深さは9～42cm程を測る。柱根はP55、P59(第58図245クリ)、P60が残存しており、礎板はP59・P62(第59図247・第58図246共にクリ)が確認された。P63からは柱根の一部とみられる木片が出土している。出土した柱根や柱痕跡から、径15～20cm程の柱が据えられていたと推定される。柱穴の覆土は概ね黄灰色～黒褐色、一部で黒色である。時期は他の掘立柱建物と同様、古墳時代後期～平安時代に比定できるが、出土遺物が少なく他遺構との切り合いもないので詳細な時期は不明である。



第32図 2区SB2実測図(S=1/60)



- P41**
- 2.573/1.5 黒褐色粘土(粘性強、炭化物±1mmごく稀に含、地山粒3%、酸化鉄ごく稀に含)
 - 2.573/1 黒褐色粘土(粘性強、炭化物±2mmごく稀に含、地山小ブロック7%、酸化鉄稀に含)
 - 地山を基層として(2.573/1黒褐色粘土ブロック10%、炭化物2-5mmまばらに含、縦2-5mmまばらに含、酸化鉄まばらに含)
- ※1層=柱痕、3層=扉り方
- P40**
- 2.573/1.5 黒褐色粘土(粘性強、炭化物±2mmごく稀に含、2.573/1.5黄灰色粘土小ブロック上段に22%、地山ブロック5%、酸化鉄稀に含)
 - 地山を基層として(2.574/1黄灰色粘土ブロック15%、炭化物±2mmごく稀に含、酸化鉄に含)
- ※1層=柱痕又は北方向への建取り痕か
- P39**
- 2.573/1 黒褐色粘土(粘性強、炭化物1-5mm稀に含、縦±5mm稀に含、地山小ブロック5%、酸化鉄まばらに含)
 - 2.573/5/1 黒褐色粘土(粘性強、炭化物±1mmごく稀に含、地山小ブロック2%、酸化鉄まばらに含)
 - 10195.5/3 に近い黄灰色粘質シルト(2.573/1.5黒褐色粘質シルトブロック40%、縦±10mm稀に含、酸化鉄稀に含)
 - 2.573/1.5 黒褐色粘質シルト(炭化物±2mmごく稀に含、地山粒1%、酸化鉄稀に含)
 - ③層を基層として(2.573/1.5黒褐色粘土ブロック40%、縦±5mm稀に含、酸化鉄含)
 - 10196.2 灰黄色粘土質粘土(2.573/1.5黒褐色粘質シルト小ブロック5%、酸化鉄まばらに含)
- ※1層=柱痕か(全や不明)
- ① 2.573/1 黒褐色粘土(粘性強、炭化物±1mm稀に含、縦2-30mm稀に含、2.573/1黒褐色粘質シルト7%)、②層粒5%
- ② 10195.5/3 に近い黄灰色粘質シルト(2.573/1.5黒褐色粘質シルトブロック3%、炭化物±1mmごく稀に含、酸化鉄稀に含)
- ③ 10196.5/4 に近い黄灰色粘土(粘性強、縦2-10mm含、2.574/1黄灰色粘土部粒に2%、酸化鉄やや多く含)

- P31**
- 2.573/1 黒褐色粘質シルト(炭化物±2mm稀に含、縦5-15mm稀に含、地山ブロック7%、酸化鉄稀に含)
 - 2.573.5/1 黒褐色シルト質粘土(炭化物1-5mmまばらに含、地山小ブロック7%、酸化鉄まばらに含)
 - 2.573/1 黒褐色粘土(炭化物±1mmごく稀に含、地山粒2ごく稀に含、酸化鉄稀に含)
 - 2.573/2 黒褐色粘土(炭化物±1mmごく稀に含、地山粒3%、酸化鉄まばらに含)
 - 地山を基層として(2.574/1黄灰色粘土小ブロック30%、縦±3mm稀に含、酸化鉄稀に含)
 - 地山を基層として(2.574/1黄灰色粘土小ブロック7%、炭化物±1mm稀に含、縦5-10mm稀に含、酸化鉄まばらに含)
- ※2層=柱痕、2-3層=扉り方
- ① 2.572/1 黒褐色粘質シルト(縦2-5mmまばらに含、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
- ② 2.575.5/3 に近い黄灰色粘質シルト(縦±2mmまばらに含、2.574/1黄灰色粘土ブロック3%、酸化鉄稀に含)
- ③ 10196.4 に近い黄褐色粘土(粘性やや強、わずかに砂面、酸化鉄に含)
- ④ 2.573.5/1黄灰色粘土小ブロック19%、酸化鉄含)
- P44**
- 2.573.5/1 黒褐色シルト質粘土(炭化物±2mmまばらに含、縦5-10mm稀に含、地山小ブロック5%、酸化鉄まばらに含)
 - 2.573/1 黒褐色粘質シルト(縦±3mm稀に含、地山小ブロック1%、酸化鉄まばらに含)
 - 2.574/1 黄灰色粘土(粘性強、地山小ブロック40%、酸化鉄ごく稀に含)
- ※1層=柱痕、2・3層=扉り方
※土質はP31に類似
- ① 2.572/1 黒褐色粘質シルト(縦2-5mmまばらに含、地山粒2%、酸化鉄まばらに含)
- ② 2.575.5/3 に近い黄灰色粘質シルト(縦±2mmまばらに含、2.574/1黄灰色粘土ブロック3%、酸化鉄稀に含)
- ③ 10196.4 に近い黄褐色粘土(粘性強、酸化鉄やや多く含)

第33図 2区SB3実測図(S=1/60)

- P36**
 1 2.SY3/1 黒褐色シルト質粘土(堆山粒1%)
 2 2.SY3/1.5 黒褐色粘土(炭化物±1mmこく稀に含、地山小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
 3 2.SY5/2 輝灰黄色シルト質粘土(炭化物±1mmこく稀に含、地山粒1%、酸化鉄まばらに含)
 4 2.SY3/1 黒褐色シルト質粘土(堆山粒±3mmこく稀に含、地山小ブロック50%、酸化鉄まばらに含)
 5 2.SY3/1.5 黒褐色シルト質粘土(2.SY3/2輝灰黄色粘土ブロック10%、地山小ブロック下に10%、酸化鉄まばらに含)
 ※1層=柱状、又は抜き取り痕

- P37**
 1 2.SY3/1 黒褐色粘土(粘性、炭化物±1mmこく稀に含、地山小ブロック2%、酸化鉄まばらに含)
 2 2.SY3/1 黒褐色粘土(炭化物±1mmこく稀に含、堆山粒±2mmこく稀に含、地山小ブロック2%)
 3 堆山を基層として(2.SY3/1)黒褐色粘土ブロックの混土層(堆山±5mmこく稀に含、酸化鉄まばらに含)
 ※1層=柱状、2・3層=掘り方

- P38**
 1 地山ブロックと2.SY4/1黄灰色粘土ブロックの混土層(粘性、炭化物±1mm稀に含、堆山±5mm稀に含、酸化鉄まばらに含)
 2 2.SY3/1 黒褐色粘土(粘性、炭化物±3mmまばらに含、堆山±5mmこく稀に含、地山小ブロック20%、酸化鉄まばらに含)

- P42**
 3 2.SY3/1.5 黒褐色粘土(粘性やや強、炭化物±2mm稀に含、堆山±10mm稀に含、地山小ブロック2%酸化鉄まばらに含)
 4 2.SY3/1 黒褐色シルト質粘土(堆山粒1%、酸化鉄まばらに含)
 5 地山ブロックと2.SY3/1黒褐色粘土ブロックの混土層(炭化物1-5mm稀に含、酸化鉄まばらに含)
 6 2.SY3/1.5 黒褐色粘土(粘性、炭化物±1mm稀に含、地山小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
 ※1・2層=P38、3~6層=P42、6層=柱状
 ① 2.SY6/2 灰黄色粘土(粘性やや強、わががに砂混、堆山±5mm稀に含、2.SY3/1黒褐色粘土粘土又は小ブロック状に5%、酸化鉄まばらに含)
 ② 10YR6.5/4 に近い黄褐色粘土(粘性強、酸化鉄含)

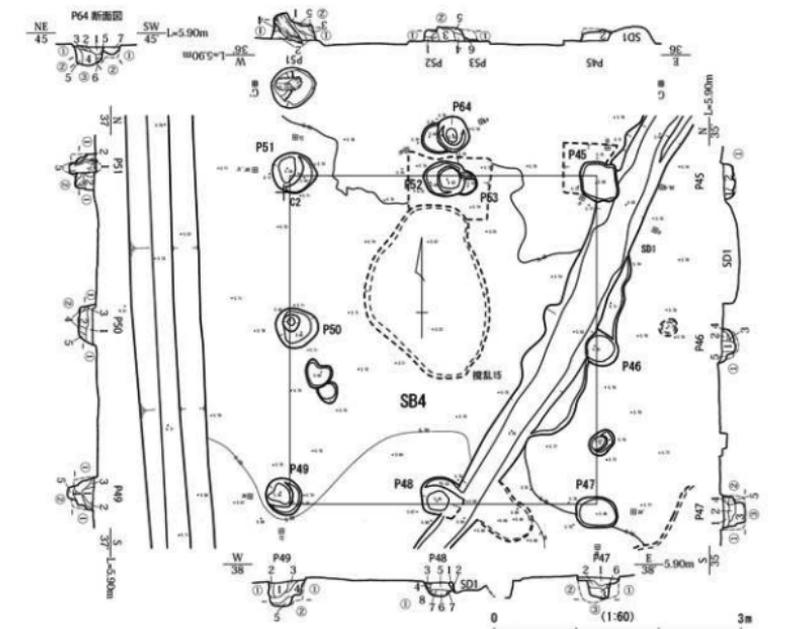
- P66**
 1 2.SY3/1 黒褐色粘土(炭化物±3mm稀に含、堆山±20mmまばらに含、地山粒3%、酸化鉄稀に含)
 2 2.SY3/1 黒褐色粘土(堆山±5mmまばらに含、地山小ブロック40%、酸化鉄稀に含)
 3 堆山を基層として(2.SY3/1)黒褐色粘土小ブロック5%、堆山±10mmまばらに含、酸化鉄含)
 ※1層=北方への抜き取り痕、2・3層=掘り方又は抜き取り時の剥り土
 ① 2.SY6/2 に近い黄色粘土(粘性強、2.SY4/1黄灰色粘土小ブロック2%、酸化鉄やや多く含、堆山±20mmまばらに含)

- P61**
 1 2.SY3/1.5 黒褐色粘土(炭化物1-10mm稀に含、堆山±10mmまばらに含、地山小ブロック2%、酸化鉄含)
 2 2.SY3/1 黒褐色粘土(粘性やや強、地山小ブロック10%、酸化鉄含)
 3 堆山を基層として(2.SY4/1)黄灰色粘土小ブロック7%、炭化物±3mm稀に含、堆山±10mmまばらに含、酸化鉄含)
 ※1・2層=柱状、3層=掘り方
 ※P30、P35と列をなすや、対はなし
 ① 2.SY6/2 灰黄色粘土(粘性やや強、炭化物±1mmこく稀に含、堆山±10mmまばらに含、酸化鉄稀に含)
 ② 堆山を基層として(2.SY3/1)黄灰色粘土±40%、酸化鉄稀に含、堆山±20mmまばらに含)
 ③ 10YR6/4 に近い黄褐色粘土(堆山±10mmまばらに含、酸化鉄やや多く含)

- P34**
 1 2.SY3/1.5 黒褐色粘土(炭化物±2mm稀に含、堆山±5mm稀に含、地山小ブロック3%、2.SY4/1黄灰色粘土(炭化物)に帯状堆積、酸化鉄やや多く含)
 2 堆山を基層として(2.SY4/1)黄灰色粘土ブロック40%、炭化物±3mmまばらに含、堆山±10mmまばらに含、酸化鉄多く含)
 3 堆山を基層として(2.SY3/1)黄灰色粘土ブロック10%、酸化鉄稀に含)
 ※P30=柱状、2・3層=掘り方
 ① 2.SY6/2 灰黄色粘土(2.SY3/1)黒褐色粘土ブロック5%、酸化鉄多く含)

- P29**
 1 2.SY3/1 黒褐色シルト質粘土(炭化物1-5mm稀に含、地山粒2%、酸化鉄稀に含)
 2 2.SY3/1 黒褐色粘土(堆山小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
 3 2.SY3/1.5 黒褐色粘土(堆山小ブロック2%、酸化鉄まばらに含)
 4 堆山を基層として(2.SY3/1)黒褐色粘土ブロック20%、堆山±2mm含、酸化鉄まばらに含)
 5 2.SY3/1 黒褐色シルト質粘土(炭化物±1mm稀に含、堆山±5mm稀に含、地山小ブロック10%)
 6 堆山を基層として(2.SY3/1)黒褐色粘土小ブロック5%、酸化鉄稀に含)
 ① 2.SY6/2 灰黄色粘土(2.SY3/1)黒褐色粘土ブロック5%、酸化鉄多く含)

- P35**
 1 2.SY3/1 黒褐色粘土(粘性やや強、炭化物±3mm稀に含、地山小ブロック2%、酸化鉄まばらに含)
 2 2.SY4/1 黄灰色粘土(堆山±5mm稀に含、地山小ブロック40%、2.SY3/1黒褐色粘土シルト小ブロック20%、酸化鉄まばらに含)
 ※1層=西方への抜き取り痕のみ、2層=掘り方
 ① 10YR6.5/4 に近い黄褐色シルト(堆山±10mmまばらに含、2.SY3/1粘質シルト小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
 ② 2.SY3/1.5 黒褐色粘土(炭化物±1mmこく稀に含、堆山小ブロック15%、酸化鉄まばらに含、地山小ブロック1%)
 ③ 10YR6/4 に近い黄褐色粘土(酸化鉄やや多く含)



第34図 2区SB3・4 (S=1/60)

P51

- 2.574/1 黄灰色粘土(粘性やや強、礫土10mm層に含、酸化鉄ごく稀に含)
- 2.573/1 黒褐色粘土(粘性やや強、炭化物1mmごく稀に含、礫2-10mmまばらに含、2.573/2黒褐色粘土小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
- 2.572/1 黄灰色粘土(粘性やや強)
- 2.574/1 黄灰色粘土(粘性やや強、地山小ブロック40%、酸化鉄稀に含、炭化物1mm層に含、礫土10mm層に含、地山粒40%、酸化鉄稀に含)
- 地山を基礎として2.574/1黄灰色粘土小ブロック20%、礫2-10mm層に含、酸化鉄稀に含)

※断面形状時に往復動いたもの

※1-2層=自然底への直上、3-5層=掘り方

① 2.573/1 黒褐色粘土(礫2-10mmまばらに含、炭化物土2mm層に含)

② 10YR7/3 に近い黄褐色粘土(粘性強、酸化鉄やや多量)

P50

- 2.573/1 黒褐色粘土(炭化物1-5mmまばらに含、礫5-15mm層に含、2.576.5/2灰黄色粘土小ブロック10%、酸化鉄含)
- 2.573/1 黒褐色粘土(炭化物2mm層に含、礫土3mm層に含、2.576.5/2灰黄色粘土粒3%、酸化鉄ごく稀に含)
- 2.573/2 黒褐色粘土(炭化物1.5mm層に含、礫土5mm層に含、酸化鉄ごく稀に含)
- 2.573/1 黄灰色粘土(炭化物1.5mm層に含、礫土2mmごく稀に含、②小ブロック・粒20%、酸化鉄まばらに含)
- 2.575/1 黄灰色粘土(礫土2mmごく稀に含、②小ブロック40%(ブロックの境界は不明確))

※2層=自然、3-5層=掘り方

① 2.573/1 黒褐色粘土(礫2-10mmまばらに含、炭化物土2mm層に含)

② 10YR6/4 に近い黄褐色粘土(炭化物土2mm層に含、礫土2mm層に含、酸化鉄やや多量)

P48

- 2.573.5/1 黄灰色粘土(粘性やや強、炭化物)10mm含、礫土2mmごく稀に含、2.576/2灰黄色粘土粒20%、酸化鉄まばらに含)
- 2.573/2 黒褐色粘土(粘性強、炭化物)1-5mmまばらに含、礫土3mm層に含、2.576/2灰黄色粘土粒20%
- 2.573/1 黒褐色粘土(炭化物土2mm層に含、礫土3mm層に含、2.576/2灰黄色粘土粒1%、②小ブロック3%、酸化鉄稀に含)
- 2.573/1 黒褐色粘土(炭化物)1mmまばらに含、礫土10mm層に含、2.576/2灰黄色粘土小ブロック30%、酸化鉄ごく稀に含)
- 2.574/1 黄灰色粘土(粘性強、炭化物土1mm層に含、②小ブロック20%、酸化鉄まばらに含)

※1層=東方向への抜き取り機、2-3層=抜き取り時の硬土、5層=柱のあたり根

① 2.573/1 黒褐色粘土(炭化物土2mm含、礫土10mmまばらに含、2.576/2灰黄色粘土小ブロック・粒上位25%、酸化鉄まばらに含)

② 10YR5/4 に近い黄褐色粘土(粘性強、上位で色調暗くなる、礫土10mm層に含)

P46

- 2.573/2 黒褐色粘土(粘性やや強め、2.577/1灰白色粘土と黒色粘土のブロック10%混、酸化鉄含)
- 2.574/2 埴灰黄色粘土(粘性やや強め、2.577/1灰白色粘土と黒褐色粘土のブロック10-20%混、酸化鉄含)
- 2.574/2 埴灰黄色粘土(2.577/1灰白色粘土と黒褐色粘土の小ブロック20-30%混、酸化鉄若干含)
- 2.574/2 埴灰黄色粘土(3層に於て地山の硬土多く含まるに30-40%混)
- 2.574/2 埴灰黄色粘土(2層より上を掘り出した硬土、地山と黒褐色粘土の小ブロックまばらに20%混、酸化鉄若干含)
- 2.573/1 黒褐色粘土(粘性やや強め、2.577/1灰白色粘土マール状位10-20%混、酸化鉄若干含)
- 2.573/1 黒褐色粘土(断面に比べ灰黄色粘土の混入40%と多くなる)
- 2.577/1 灰白色粘土(粘性強、黒褐色粘土小ブロック5%混)

※1-2層=301層土、6層=柱頭、7層=掘り方

P52

- 2.573/1 黒褐色粘質シルト(砂わずかに混、炭化物土1mm層に含、礫5mm層に含、酸化鉄稀に含)
- 2.573/2 黒褐色粘質シルト(砂わずかに混、炭化物土2mm層に含、礫5mmまばらに含、酸化鉄まばらに含)
- 2.573/1 黒褐色粘質シルト質粘土(炭化物土2mm層に含、礫土5mmまばらに含、酸化鉄稀に含)
- 2.573/1 黒褐色粘質シルト(炭化物土2mm層に含、礫2-5mmまばらに含、酸化鉄ごく稀に含)
- 2.574/1.5 埴灰黄色粘土(礫土2mm層に含、地山粒2%)

※1-5層=P52、6層=P53 3層=掘り又は抜き取り、1-2、4・5層=掘り方

P53

- 2.573/1 黒褐色シルト(炭化物土1mmまばらに含、地山小ブロック2%、礫土2mm層に含、酸化鉄含)
- 2.573/1 黒褐色粘土(礫土10mmまばらに含、炭化物土2mm層に含)
- 2.576/2に近い黄褐色粘土(地山小ブロックと2.574/1灰黄色粘土が細かく混ざり合う(礫約20mm含、炭化物土1mm層に含、酸化鉄まばらに含)

P45

- 2.573/2 黒褐色粘質シルト(わずかに砂混、礫土2mm層に含、酸化鉄まばらに含)
- 2.573/1 黒褐色粘土(礫2-10mm含、2.574/2灰黄色粘土小ブロック3%、酸化鉄稀に含)

※明確な柱頭・抜き取り痕なし

① 2.573/1 黒褐色粘土(礫2-10mmまばらに含、炭化物土2mm層に含)

P46

- 2.573.5/1 黄灰色粘質シルト(礫土3mm層に含、2.577/2.576/2灰黄色粘土粒10%、2.573/1黒褐色シルト粒2%、酸化鉄やや多量)
- 2.573.5/1 黄灰色粘質シルト(2.577/2.576/2灰黄色粘土粒2%、2.573/1黒褐色シルト粒1%)、酸化鉄稀に含)
- 2.573/1 黒褐色粘質シルト(炭化物土2mm、酸化鉄ごく稀に含)
- 2.573/1 黄灰色粘質シルト(2.577/2.576/2灰黄色粘土粒2%、2.573/1黒褐色粘土小ブロック10%、酸化鉄稀に含)
- 2.573.5/1 黄灰色粘土(2.577/2.576/2灰黄色粘土粒20%、2.573/1黒褐色粘土粒2%、酸化鉄まばらに含)
- ※1層=柱頭、2-5層=掘り方
- ① 2.573/1 黒褐色粘土(礫2-10mmまばらに含、炭化物土2mm層に含)

P47

- 2.573/1.5 黒褐色シルト質粘土(炭化物土2mm層に含、酸化鉄まばらに含)
- 2.573/2 黒褐色粘土(2.577/2.576/2灰黄色粘土小ブロック・粒3%、酸化鉄稀に含)
- 2.574/1 灰黄色粘土(炭化物土2mm層に含、2.577/2.576/2灰黄色粘土粒3%、酸化鉄やや多量)
- 2.573/1.5 黒褐色シルト(炭化物土1mm層に含、2.573/1黒褐色粘質シルト粒20%、2.577/2.576/2灰黄色粘土粒20%、酸化鉄ごく稀に含)
- 2.573/1 黒褐色粘質シルト(2.577/2.576/2灰黄色粘土小ブロック10%)
- 2.574/1 灰黄色粘土(2.577/2.576/2灰黄色粘土粒・小ブロック30%、下位は2.573/1黒褐色シルト粒3%、酸化鉄ごく稀に含)
- ※2・3層=柱頭、4・5層=掘り方、①=掘り=掘り跡
- ① 2.573/1 黒褐色粘土(礫2-10mmまばらに含、炭化物土2mm層に含)
- ② 2.573/1 黒褐色粘土(炭化物土2mm層に含、礫2-10mmまばらに含、2.577/2.576/2灰黄色粘土小ブロック7%、地山粒2%)
- ③ 10YR3/3 に近い黄褐色粘土(礫2-5mmまばらに含、10YR4/2灰黄色粘土小ブロック10%、酸化鉄多量)

P44

- 2.573/2 黒褐色粘土(炭化物10mm前後)稀に含、地山と灰黄色粘土が小ブロックでまばらに10%混)
- 2.573/2 黒褐色粘土(1層より地山の硬土混)
- 2.573/2 黒褐色粘土(土1層に硬土混)
- 2.573/2 黒褐色粘土(断面に比べ色調やや暗味増す、炭化稀層に含、下位を中心に地山小ブロック10%混)
- 2.573/2 黒褐色粘土(地山と灰黄色粘土がブロックでまばらに10-20%混)
- 2.573/2 黒褐色粘土(断面に比べ色調やや暗味増す、炭化ブロック30%混)
- 2.574/2 埴灰黄色粘質シルト(下位を中心に地山と灰黄色粘土が小ブロックでまばらに10-20%混、酸化鉄若干含)

※4層=柱頭、5・6層=掘り方、7層=掘り跡

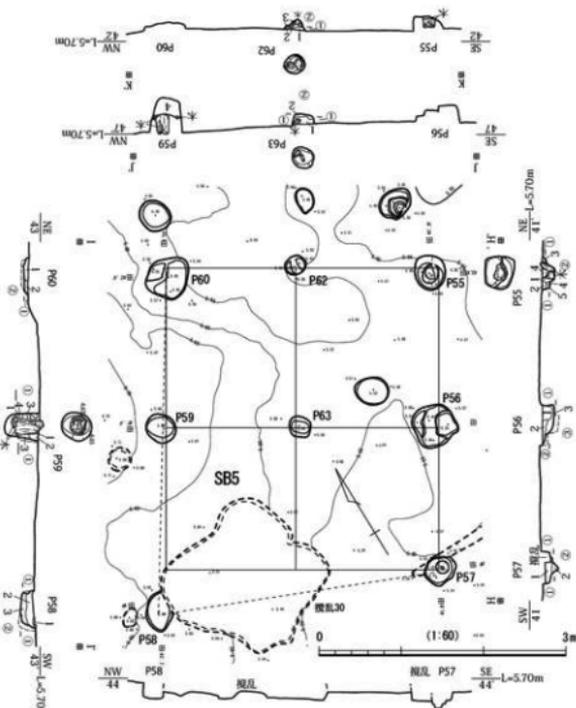
※柱頭ラインからは北へ飛び出すP47やP52よりもほかの柱穴に土質類似し、柱頭明確、残存柱

① 2.573/2-3/1 黒褐色粘土 = 軟弱埋土

② 2.574/2 埴灰黄色粘土 = 軟弱埋土

③ 10YR6/6 明黄褐色粘土 = 地山

第35図 2区SB4土層注記



- P60**
- 2.5Y3.5/1 黒褐色粘土シルト(②小ブロック10%, 酸化鉄やや多く含む)
 - 2.5Y3.1/5 黒褐色粘土(礫±5mmまばらに含む, ②ブロック10%, 酸化鉄やや多く含む)
- ①層→柱頭から、2層→振り方か
- 2.5Y3/1.5 黒褐色粘土質粘土(礫±5mmまばらに含む, ②小ブロック3%, 酸化鉄やや多く含む)
 - 10Y8/4 に近い黄褐色粘土(礫±10mmまばらに含む, 2.5Y4/1 黄灰色粘土較多%, 酸化鉄含む)
- P69**
- 2.5Y3/1 黒褐色粘土(粘性やや強, しまりなし)
 - 2.5Y3/1 黒褐色粘土(炭化物±1mm層に含む, 礫±5mm層に含む, ②和5%, 酸化鉄まばらに含む)
 - 2.5Y3/1 黒褐色粘土(礫±5mm層に含む, ②和5%, 酸化鉄層に含む)
 - 2.5Y2.5/1 黒褐色粘土(②小ブロック20%, 酸化鉄層に含む)
- ①層→柱頭, 2~4層→振り方, 奇数面に露出有
- 2.5Y3/1.5 黒褐色粘土(炭化物±3mm層に含む, 礫±3mm層に含む, 下段で漸移的に含土量が多くなる)
 - 10Y8/3 に近い黄褐色粘土(粘性強, 礫±2mm層に含む, 2.5Y4/1 黄灰色粘土小ブロック3%, 酸化鉄まばらに含む)
- P68**
- 2.5Y3.5/1 黄灰色粘土シルト(炭化物±1mmごく稀に含む, 礫±10mmまばらに含む, 2.5Y3.2/5 暗灰色粘土小ブロック5%, 酸化鉄層に含む)
 - 2.5Y2/1 黄灰色粘土(礫±3mm層に含む, ②ブロック3%, 酸化鉄やや多く含む)
 - 2.5Y3/1 黄灰色粘土(粘性強, 礫±5mm層に含む, ②ブロック7%, 酸化鉄やや多く含む)
- ①層→柱頭, 2層→振り方
- 10Y8/3 に近い黄褐色粘土(粘性強, 礫±3mm層に含む, 2.5Y4/1 黄灰色粘土小ブロック25%, 酸化鉄含む)
 - 10Y8/4 に近い黄褐色粘土(粘性強, 礫±5mmまばらに含む, ②和3%, 酸化鉄多く含む)
- P62**
- 10Y8/1 黒褐色粘土質粘土(砂質, 炭化物±1mmに混, 礫±5mm層に含む, ②小ブロック2%, 酸化鉄層に含む)
 - 2.5Y3/1 黒褐色粘土(②和20%, 酸化鉄層に含む)
 - ②を基層として(2.5Y3/1)黒褐色粘土較多20%, 酸化鉄層に含む
- ①層→柱頭, 2層→振り方
- 2.5Y3/1 黒褐色粘土(礫±2mmまばらに含む, ②和3%, 酸化鉄多く含む)

- P63**
- 2.5Y3/1 黒褐色粘土(粘性やや強, ②和2%, 酸化鉄まばらに含む, 礫±3mm層に含む)
 - 2.5Y4/1 黄灰色粘土(炭化物±1mm層に含む, 礫±3mm層に含む, ②和20%, 酸化鉄層に含む)
- ①層→柱頭, 2層→振り方
- 2.5Y3.5/1 黄灰色粘土(②和3%, 酸化鉄層に含む, 炭化物±1mmごく稀に含む)
 - 10Y8.5/3 に近い黄褐色粘土(粘性強, 2.5Y4/1 黄灰色粘土小ブロック30% (境界不明))
 - 10Y8/3 に近い黄褐色粘土(粘性強, 2.5Y4/1 黄灰色粘土小ブロック10% (上段で増す), 礫±3mmまばらに含む)
- P65**
- 2.5Y3/1.5 黒褐色粘土シルト(酸化鉄ごく稀に含む)
 - 2.5Y3/1 黒褐色粘土質粘土(砂わずかに混, 酸化鉄多く含む)
 - 2.5Y3/1 黒褐色粘土(炭化物±1mmごく稀に含む, ②小ブロック5%, 酸化鉄まばらに含む)
 - 2.5Y3/1 黒褐色粘土(②和10%, 酸化鉄層に含む)
 - 2.5Y3/1 黒褐色粘土(炭化物±1mmごく稀に含む, 礫±2mm層に含む, ②和1%, 酸化鉄まばらに含む)
- ①層→柱頭, 2層→振り方
- 2.5Y3/1 黒褐色粘土±2mmごく稀に含む, ②小ブロック実測に20%, 酸化鉄やや多く含む)
 - 2.5Y6/2 灰黄色粘土(礫±10mmやや多く含む, 2.5Y3/1 黒褐色粘土較多2%, 酸化鉄やや多く含む)
- P66**
- 2.5Y3/1.5 黒褐色粘土(礫±3mmごく稀に含む, ③小ブロック1%, 酸化鉄まばらに含む)
 - 2.5Y3/1 黒褐色粘土質粘土(礫±5mmまばらに含む, ③ブロック25%, 酸化鉄含む)
 - 2.5Y3.5/1 黄灰色粘土(礫±2mmまばらに含む, ③ブロック40%, 酸化鉄含む)
- ①層→柱頭から, 2~3層→振り方か
- 2.5Y3/1 黒褐色粘土(礫±3mm層に含む, ②和1%, 酸化鉄層に含む)
 - 10Y8/1.5 暗灰色粘土(酸化鉄層に含む)
 - 10Y8/4 に近い黄褐色粘土(粘性強, 礫±3mm層に含む, 2.5Y4/1 黄灰色粘土小ブロック2%, 酸化鉄含む)
- P67**
- 2.5Y3/1 黒褐色粘土(炭化物±3mm層に含む, 礫±5mmまばらに含む, 砂わずかに混, 酸化鉄やや多く含む)
 - ②を基層として(2.5Y3/1)黒褐色粘土小ブロック30%, 礫±2mm層に含む, 酸化鉄やや多く含む)
- ①層→柱頭, 2層→振り方
- 10Y8/3 に近い黄褐色粘土(粘性強, 2.5Y4/1 黄灰色粘土較多1%, 礫±1mm層に含む, 酸化鉄多く含む)

第36図 2区SB5実測図(S=1/60)

SB6(第37図、図版23) 2区中央部C6・D5・D6で検出し、検出面の標高は5.65～5.94m前後である。梁間と桁行の区別が難しいが2間(3.6m)×2間(3.6m)の側柱建物で、主軸はN-22°-Eである。柱間は約1.6～1.9mを測り、柱配列に大きなずれはない。柱穴の平面形態は円～方形、不整形を呈する。径は長軸で20～50cm程を測る。深さはP75とP79で約2～4cmと最も浅く、その他は12～23cm程である。土層断面で柱痕跡ないし抜き取り跡を確認できる柱穴が多く、P73は南西方向へ、P76は北方向へ、P78は南東方向へそれぞれ柱を抜き取ったものと推測される。柱根は出土していないが、土層観察から掘えられていた柱は径20～25cm前後と考えられる。柱穴の覆土は概ね黄灰色～黒色である。柱穴からは少量の須恵器・土師器片のほか、P77から須恵器の甕(第52図95)などが出土しており、古墳時代後期に位置付けられる。

SB7(第38図、図版24) 2区南東隅D10・D11・E10グリッドで検出し、検出面は標高6.15～6.29m前後である。2間(3.3m)×3間(6.5m)の側柱建物で、主軸はN-5°-Eである。柱間は梁間で約1.6～1.7m、桁行で約2～2.3mを測り、柱配列は比較的整っているが、建物の平面形は北側へやや開く。柱穴の平面形態は円～楕円形、不整形を呈する。径は長軸で40～70cm程、深さは約3～29cmを測る。柱根は残存していないが、柱痕跡ないし抜き取り跡とみられる土層が観察でき、径15～20cm前後の柱が掘えられたと考えられる。柱穴の覆土は概ね黒褐色で、一部で灰黄褐色や褐灰色である。柱穴からは土師器・須恵器の細片が出土した。SB7の西側ではP151・P152・P165がSB7と軸をほぼ同じくして検出され、柱痕跡または抜き取り跡とみられる土層も観察できたが、出土遺物が細片のため時期は不明で、SB7に伴う遺構なのかは判然としない。SB7も他の掘立柱建物同様、古墳時代後期～平安時代に位置付けられよう。

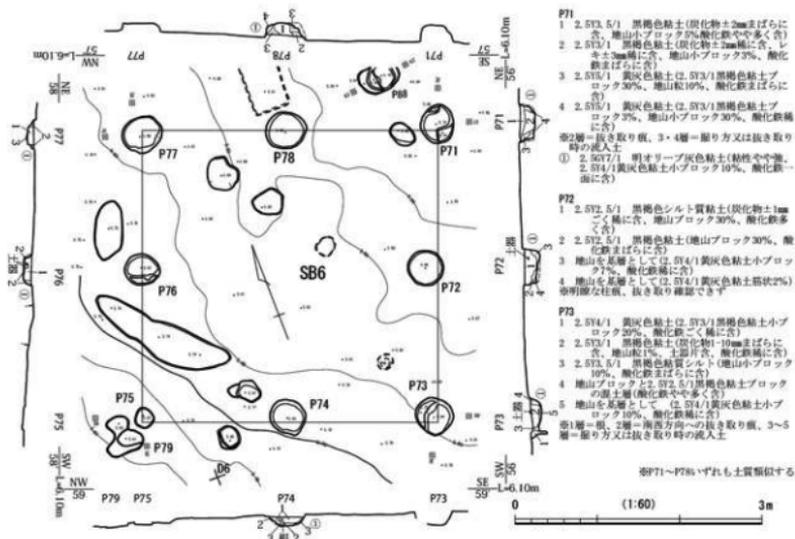
SB8(第37図) 2区北東隅F9グリッドで検出し、検出面の標高は6.25～6.32m前後である。2間(3.8m)×3間(7.4m)の総柱建物とみられ、北辺には礎石らしき石が残っていた。主軸はN-73°-Wである。柱間は梁間で約1.5～2.3m、桁行で約2.2～2.6mと少々ばらつきが見られるが、柱配列は比較的整っている。柱穴の平面形態は円～楕円形、隅丸方形を呈する。径は長軸で35～50cm程、深さは3～23cm程を測る。出土遺物は少量の土師器・須恵器片のみで時期は不明だが、近世の遺構が集中している調査区北部での検出のため、近世の建物の可能性がある。

P139・140・141・142(第39図) 2区東端D・E10グリッドで検出した。検出面は標高6.12～6.30m前後で、平面形は隅丸方形や円～楕円形を呈する。いずれも長軸は20～30cm程度で、深さは5～25cm程を測る。柱根は残存していないが、土層観察から柱痕跡ないし抜き取り跡が確認できた。柱列の軸はN-13°-Eである。なお、P139は柱列からやや外れていることや、覆土の色調が比較的明るいことから、柱列には含まれない可能性が高い。柱穴からの出土遺物は少量の須恵器・土師器片のみで、時期は不明である。

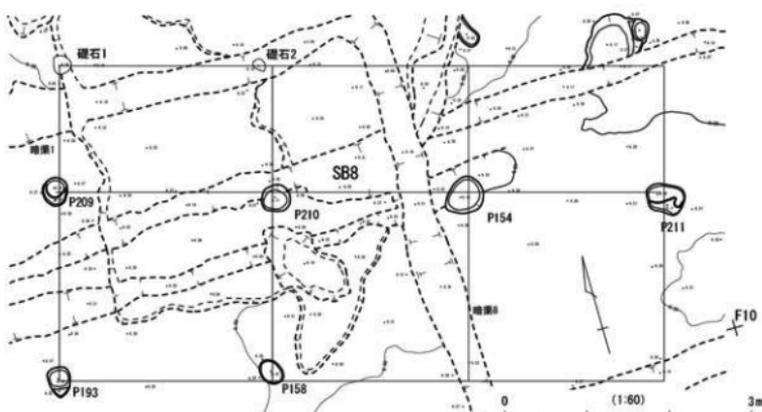
P1・2(第44図) 2区北部F4グリッドで検出し、検出面の標高は6.09～6.14m程である。平面形は楕円形と方形を呈し、P1で長軸70cm、深さ4～9cm、P2で長軸80cm、深さ5～8cmを測る。柱根や明瞭な柱痕跡は残っていなかった。2基を結ぶ軸はN-25°-Eである。出土遺物が小片のため時期は不明だが、近世遺構が集中している調査区北側で検出されたため、近世の遺構と考えられる。

P4・5(第40図) 2区北西隅E2・3グリッドで検出した。検出面は標高6.09～6.14mである。平面形は円～楕円形を呈し、P4で長軸45cm、深さ24～26cm、P5で長軸41cm、深さ16cmを測る。P4には柱根(第59図267)が残存しており、P5からは礎石らしき石が出土している。2基を結ぶ軸はN-75°-Wである。P5から土師器の細片がごく少量出土した。近世の柱穴と推定できる。

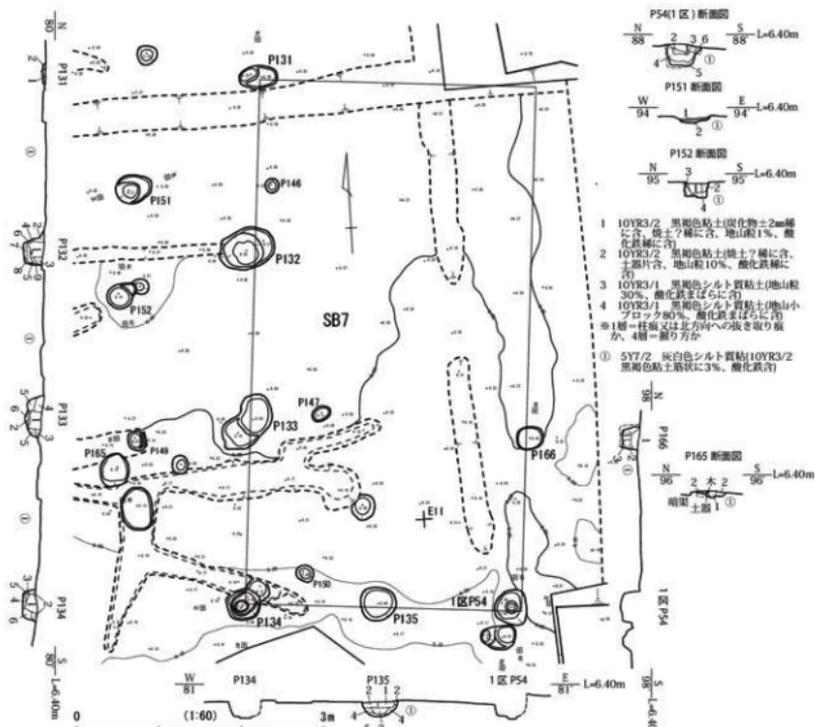
P14・15(第40図) 2区北西隅E2グリッドで検出し、検出面は標高6.14～6.24mである。平面形は楕円形を呈し、P14で長軸58cm、深さ19～23cm、P15で長軸50cm、深さ40cmを測る。2基とも柱痕跡が確



- P77**
2. S73/1 黒褐色粘質シルト(炭化物±3mmまばらに含、堆山小ブロック2%、酸化鉄まばらに含)
 - 堆山を基層として②、S73/3 黒褐色粘質シルト 小ブロック30%、酸化鉄まばらに含)
 2. S73/5/1 黄灰色粘土(堆山粗10%、酸化鉄細に含)
- ※1層=柱状、2層=篩り方
- P76**
2. S72/5/1 黒褐色シルト質粘土(炭化物±1mm細に含、細5~20mm細に含、土器片含、堆山粗1%、酸化鉄やや多く含)
 2. S73/1 黒褐色粘土(堆山小ブロック40%、酸化鉄細に含)
- ※1層=北方向への抜き取り、2層=篩り方又は抜き取り時の流入土
 ① 2. S67/7 明オリーブ灰色粘土 (粘性やや強、2. S74/1 黄灰色粘土小ブロック10%、酸化鉄一面に含)
- P75**
 黒褐色粘土 堆山粗の単層
- P78**
2. S72/1 黒色粘土(炭化物1~3mm細に含、堆山小ブロック5%、酸化鉄まばらに含)
 2. S73/3 黒褐色粘質シルト(炭化物2~3mmまばらに含、堆山粗2%、酸化鉄まばらに含)
 2. S73/5/1 黒褐色シルト質粘土(堆山小ブロック・粗50%、酸化鉄細に含)
 - 堆山に色むけをせずの層
- ※1層=南東方向への抜き取り、2~4層=篩り方又は抜き取り時の流入土
 ① 2. S67/7 明オリーブ灰色粘土(粘性やや強、2. S74/1 黄灰色粘土小ブロック10%、酸化鉄一面に含)
- P74**
2. S73/1 黒褐色粘土(炭化物±2mm細に含、堆山小ブロック3%、酸化鉄細に含)
 2. S73/3 黒褐色粘土(炭化物±2mm細に含、堆山小ブロック10%、酸化鉄細に含)
- ※明確な柱状又は抜き取り確認できず
 ① 2. S67/7 明オリーブ灰色粘土(粘性やや強、2. S74/1 黄灰色粘土小ブロック10%、酸化鉄一面に含)

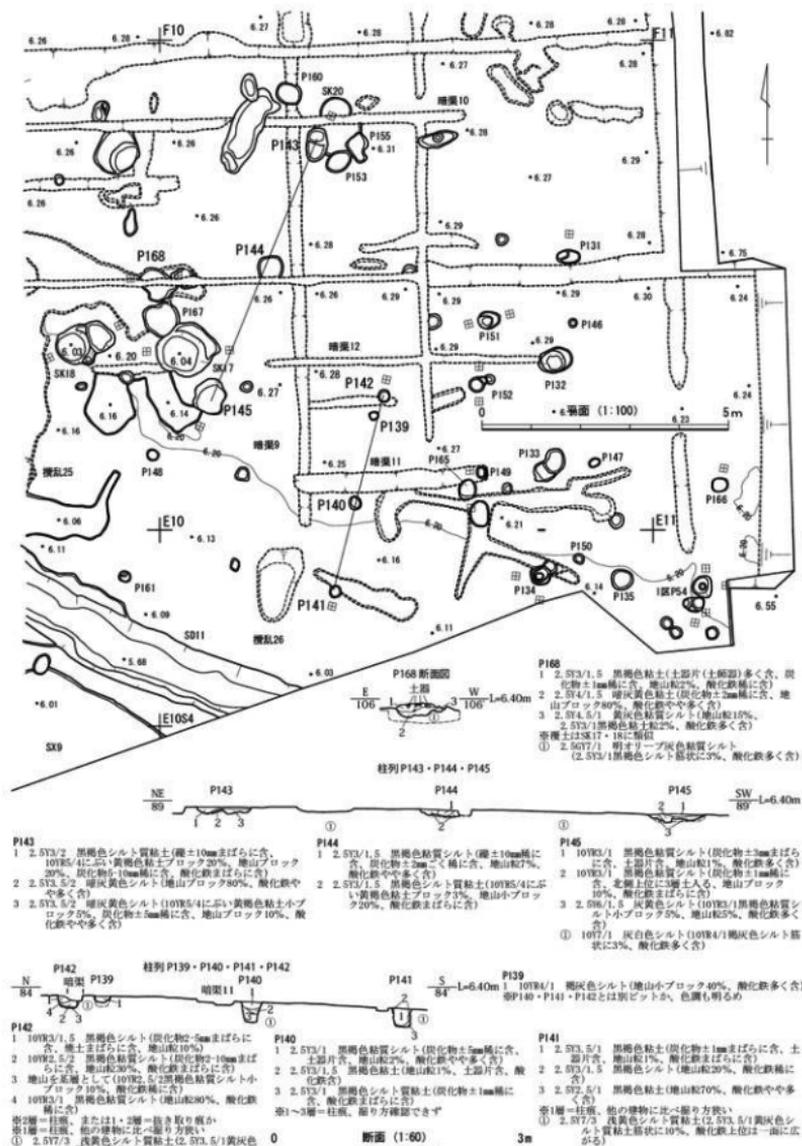


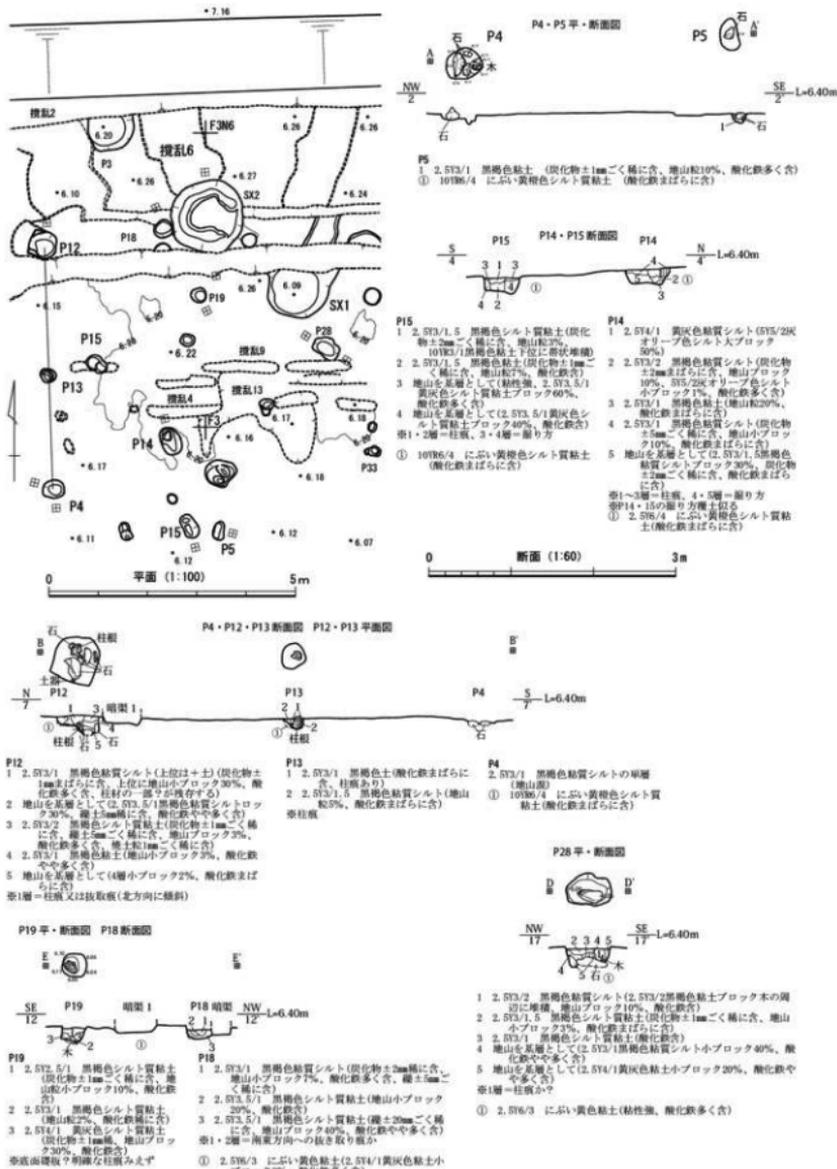
第37図 2区SB6・8実測図(S=1/60)



- P131**
- 10YR3/2 黒褐色粘質シルト(炭化物±1mm幅に含、地山粒2%)
 - 地山を基層として(10YR3/1, 5)黒褐色粘土小ブロック20%、酸化鉄やや多く含
 - ※1層=柱眼、2層=盛り方
- P132**
- 2.5Y2/2 黒褐色粘質シルト(炭化物2-10mm含、焼土粒まばらに含、土器片含、地山粒25%、酸化鉄多く含)
 - 10YR3/2 黒褐色粘質シルト(焼土小ブロック60%、酸化鉄やや多く含)
 - 10YR3/2 黒褐色粘質シルト(炭化物±2mm幅に含、焼土73%、地山粒30%、酸化鉄まばらに含)
 - 10YR3/2 黒褐色粘質シルト(炭化物±2mmまばらに含、地山粒30%、酸化鉄やや多く含)
 - 地山を基層として(10YR3/1)黒褐色粘土粒20%、酸化鉄多く含)
 - 地山を基層として(10YR3/1)黒褐色粘土粒20%、酸化鉄まばらに含)
 - 10YR3/1 黒褐色粘土(地山粒20%、酸化鉄多く含)
 - 地山を基層として(10YR3/1)黒褐色粘土小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
 - ※1層=柱眼、盛り方は2層、5-6層、7層、8-9層で各々ままり有
- P133**
- 10YR3/2 黒褐色粘土(炭化物2-10mmまばらに含、焼土粒まばらに含、地山粒7%、酸化鉄まばらに含)
 - 10YR4/2 黒褐色粘土質粘土(地山粒30%、酸化鉄多く含)
 - 10YR3/2 黒褐色粘質シルト(焼土10mm幅に含、地山粒15%、酸化鉄まばらに含)
 - 10YR3/1.5 黒褐色粘土(焼土粒多く含、地山小ブロック60%)
 - 10YR2.5/1.5 黒褐色粘土小ブロック20% (盛り方、酸化鉄まばらに含む)
 - 10YR2.5/1.5 黒褐色粘土(炭化物±2mm幅に含、地山小ブロック50%、酸化鉄多く含)
 - 地山を基層として(10YR3/2)黒褐色粘土小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)
 - ※1層=柱眼、盛り方は2層、6層で各々ままり有
- P134**
- 10YR3/1 黒褐色粘土(炭化物2-10mmまばらに含、土器片含、地山粒3%、酸化鉄まばらに含)
 - 10YR3/2 黒褐色粘土(炭化物±1mm幅に含、地山粒10%、酸化鉄やや多く含)
 - 10YR4/1 黒褐色粘土(炭化物±3mm幅に含、地山粒15%、酸化鉄まばらに含)
 - 10YR3/1 黒褐色粘土(地山小ブロック20%、酸化鉄やや多く含)
 - 10YR3/1 黒褐色粘土(炭化物±2mmまばらに含、地山粒20%、酸化鉄まばらに含)
 - ※1層=柱眼、盛り方は2層(両方上) ②.5Y4/1黄灰色粘土粒状に3%
- P135**
- 10YR3.5/1 黒褐色粘土(炭化物±2mmまばらに含、焼土7%に含、地山粒3%、酸化鉄多く含)
 - 10YR3/1 黒褐色粘土(炭化物2-5mmまばらに含、焼土7%に含、地山小ブロック50%、酸化鉄多く含)
 - 2.5Y2/1 黒褐色シルト質粘土(焼土10mm幅に含、地山粒200%、酸化鉄多く含)
 - 2.5Y3.5/1 黒褐色粘土(地山粒60%、酸化鉄多く含)
 - 2.5Y3.5/1 黒褐色粘土(地山粒20%、酸化鉄多く含)
 - ②.5Y7/2 灰黄色粘土(②.5Y4/1黄灰色粘土粒状に10%、酸化鉄やや多く含)
- P166**
- 2.5Y2/2 黒褐色シルト質粘土(炭化物2-5mm幅に含、焼土ごく稀に含、地山粒1%)
 - 10YR4/2 灰黄色粘土(粘性强、地山粒10%、炭化物±1mm幅に含、2.5Y2/2黒褐色粘土小ブロック20%、酸化鉄多く含)
 - 10YR4/1 褐色粘土(炭化物±2mmまばらに含、地山粒30%、焼土ごく稀に含、2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック2%、酸化鉄まばらに含)
 - ※1層=柱眼、3層=地のビツト付、柱下段でまらなな盛り方みられる
 - ①.5Y6.5/3 浅黄色粘質シルト(②.5Y3.5/2黄灰色粘質シルト小ブロック1%、酸化鉄多く含)
- PS4(1区)**
- 2.5Y2/1.5 黒褐色シルト質粘土(炭化物2-5mmまばらに含、焼土5mm幅に含、地山粒2%、酸化鉄多く含)
 - 10YR3/1 黒褐色シルト質粘土(地山粒10%、2.5Y2.5/1黒褐色シルト質粘土粒5%、酸化鉄多く含)
 - 10YR3/1 黒褐色シルト質粘土(炭化物±2mm幅に含、地山小ブロック30%、酸化鉄多く含)
 - 10YR3/1 黒褐色粘土(炭化物±2mm幅に含、焼土稀に含、地山小ブロック50%、酸化鉄多く含)
 - 2.5Y2/1.5 黒褐色粘土(炭化物±3mm幅に含、焼土5mm幅に含、地山小ブロック5%)
 - ※1層=柱眼、盛り方は2層、4層、6層、5層で各々様相相違
 - ①.5Y6.5/2 浅黄色粘質シルト(②.5Y3.5/2黄灰色粘質シルト小ブロック1%、酸化鉄多く含)
- P151**
- 10YR3/1.5 黒褐色シルト質粘土(炭化物2-10mmまばらに含、焼土7%に含、地山小ブロック2%、酸化鉄多く含)
 - 地山を基層として(10YR3/1.5)黒褐色シルト質粘土粒10%、酸化鉄まばらに含)
 - ※P151、P152、P165、間隔異なるが同様に差
- P152**
- 5Y7/2 灰白色シルト質粘土(10YR3/2黒褐色粘土粒状に3%、酸化鉄多く含)

第38図 2区SB7実測図(S=1/60)





第40図 2区柱列等実測図2 (S=1/100・1/60)

認でき、掘方の覆土には類似性が認められる。2基を結ぶ軸はN-13°-Wである。P14からごく少量の須恵器・土師器細片が出土したのみで時期は不明だが、近世に属すると思われる。

P143・144・145(第39図) 2区東端E10グリッドで検出し、検出面の標高は6.20～6.32m前後である。平面形は楕円形・方形・不整形を呈する。長軸は50～70cm程、深さは8～14cm程を測る。柱根や明瞭な柱痕跡は確認できなかった。柱列の軸はN-23°-Eである。柱穴からは少量の須恵器・土師器片が出土したのみで、時期は不明である。

P12・13・4(第40図) 2区北西隅E・F2グリッドで検出し、検出面の標高は6.12～6.23mである。P12の平面形は方形を呈し、長軸57cm、深さは30cm前後である。P13の平面形は円形で、長軸33cm、深さ18cmを測る。P12・13共に柱根(第60図268・269共にクリ)が残存し、さらにP12では抜き取る際北方向に柱を動かしたような土層が確認できる。柱列の主軸はN-3°-Wで、柱間は2.3～2.6m程を測る。柱根や石以外の出土はなく時期は不明だが、近世の柱穴と考えられる。

2. 周溝をもつ建物

2区では周溝をもつ建物を1棟検出し、SD10も可能性があろうか。上部は耕地整理時の削平を受けており、確認できたのは浅い周溝と4基の支柱穴のみである。

SH1(第41図、図版25) 2区中央付近D7・8グリッドを中心に検出した。検出面は標高6.01～6.13m前後である。調査にあたっては北西部をaとし、時計回りにb・c・dと細分して小穴などの調査、遺物の取り上げを行った。周溝であるSD8を含めた検出規模は長軸約10.7m、短軸約10mを測る。支柱穴は4基を確認し、柱配置から方形をなすものと考えられる。柱間は概ね3～4m程を測り、支柱穴から想定される建物の主軸はN-33°-Eである。支柱穴の平面形は円～楕円形を呈する。P169で径約50cm、深さ約13cm、P170で長軸約40cm、深さ約11cm、P175で長軸約30cm、深さ約13～18cmを測る。P170・175では北方向への抜き取り跡ないし柱痕跡と思われる土層が確認できた。付近には柱痕跡がある柱穴が存在する(薄イトーン)ことから、周溝に沿って多角形の柱が廻る可能性が指摘できる。周溝の平面形は隅丸方形で、溝の幅は20～50cm程、深さ2～26cm程を測る。支柱穴からはごく少量の土師器細片が出土し、周溝からは土師器碗や甗(第52図96)などが出土した。付近の検出面では、須恵器坏身(97)や奈良・平安時代に位置付けられる須恵器高坏(98)を確認した。遺物の様相などから、建物の年代は古墳時代後期頃に位置付けられる。

3. 土 坑

SK1(第28図、図版17) 2区北西部E3グリッドで検出した。検出面は標高5.94～6.01m前後で、平面形は円形を呈する。長軸1.35m、短軸1.3m、深さは21～29cmを測る。断面形は不整形な逆台形状を呈する(図版27)。須恵器や17～18世紀に位置付けられる磁器片のほか、17世紀前半の唐津焼皿(第52図107)などが出土していることから、近世の土坑とみられる。

SK2(第42図、図版27) 2区北西部E3グリッドで検出し、検出面は標高5.81～5.94m前後である。平面形は円形を呈し、径1.58m、深さは46～59cmを測る。断面形は角に丸みをもつ箱形を呈し、覆土は黄灰色～黒褐色である。上位で底板(第59図249・250)や指物(251)が出土したほか、少量の須恵器・土師器片、近世の陶器碗(第52図108)、不明木製品(第59図252)、底板(253)などが出土していることから、近世の井戸と推定される。寄生虫卵の分析では、糞便が混じり込んでいる(第4章第2節参照)。

SK3(第28図) 2区北西E2グリッドで検出し、検出面は標高5.93m前後である。平面形は楕円形を呈し、1.7×1.4m、深さ56cmである。

SK4(第28図、図版27) 2区北西E3グリッドで検出し、検出面は標高5.80m前後である。SK2の南東側約50cmに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、1.5×1.45m、深さ36cmである。

SK5(第42図、図版27) 2区北西隅F2グリッドで検出し、検出面は標高6.14m前後である。平面形は楕円形を呈し、長軸74cm、短軸65cm、深さ101cm前後を測る。断面形は箱状で、覆土は黄灰色～黒褐色である。ごく少量の須恵器細片や多量の礫が出土しているが、この礫は地山礫より大きく人為的に入れられたものと考えられる。礫の下からは土糞袋の垂角礫が出土しており、廃棄時に投げ入れられたと推定される。17世紀前半に位置付けられる刷毛目の唐津焼碗(第52図109)や、17世紀前半に位置付けられる肥前焼の皿(110)などが出土したことから、近世の井戸と考えられる。

SK6(第42図、図版28) 2区北西部F4グリッドで検出し、検出面は標高6.10～6.16mである。平面形は円形で、径108cm、深さ111～117cmを測る。断面形は概ね逆台形状だが、掘方の一部で階段状を呈する。覆土は灰色～黒褐色、一部オリーブ黒色である。結桶を枠として用いた井戸で、上位で桶の側板(第59図254～256)が一部残存していた。少量の須恵器・磁器片のほか、陶器碗(第52図111・108)や、漆接ぎとみられる痕跡が残る京焼風の碗(112)、肥前磁器の蓋(113)などが出土している。また、栓と思われる木製品(第59図257、マツ属複雑管束亜属)や角材(258アスナロ)、杓子状木製品(259)に加え、桶内の腐植土中からは漆器椀(カエデ属?)に穴を開けて柄(アスナロ)を付けた柄杓(260)が出土した。111は17世紀後半～18世紀前半と思われることから、遺構の年代は江戸時代前半に位置付けられる。寄生虫卵の分析では、糞便が混じり込んでいる(第4章第2節参照)。

SK7(第28図) 2区北西部F3グリッドで検出した。検出面は標高6.09～6.16mで、平面形は楕円形を呈する。暗渠に切られているが長軸は136cm程、深さ約103～110cmを測る。18世紀前期頃の磁器片や土師器片のほか、側面2箇所孔が空けられている板状木製品(第60図261)などが出土した。

SK8(第50図、図版28) 2区北部E6グリッド、SX4の底面で検出した。検出面の標高は6.03～6.06m前後で、平面形は楕円形を呈する。長軸約1.4m、短軸約1.2m、深さ約17～19cmを測る。断面形は不整形な半円状で、覆土は黄灰色～黒褐色である。板状木製品(第60図262)が出土した。遺物や平面プランがSK1～4に類似していることなどから、年代は近世に比定される。

SK10(第48図、図版28) 2区中央付近D5グリッドで検出し、検出面の標高は5.58～5.69m前後である。平面形は不整形で、長軸約1.5m、短軸約1.3m、深さ約5～74cmを測る。断面形は角に丸をもった箱状だが、南側が階段状を呈する。覆土は概ね黄灰色～黒褐色だが、一部で地山ブロックと黒褐色粘土ブロックの混土層を確認した。少量の土師器片や須恵器の坏片などが出土しているが、時期は不明である。

SK11(第29図、図版28) 2区北部F5グリッドで検出し、検出面は標高5.86～5.95m、平面形は円形を呈する。長軸72cm、短軸67cm、深さ約11cmを測り、断面形は皿状である。時期は近世と推定される。

SK12(第46図、図版29) 2区北部E5グリッド、NR1の底面で検出した。検出面は標高5.94～5.97m前後で、平面形は円形を呈する。長軸約65cm、短軸約60cm、深さ約38cmを測り、断面形は箱状である。覆土は黒褐色で、上位で少量の磁器や土師器が出土している。平面形や断面形、覆土の特徴が他の近世土坑と類似することから、遺構の時期は近世と推定される。

SK13(第42図、図版29) 2区西半E4グリッドで検出した。検出面は標高5.63～5.65m前後で、平面形は円形を呈する。径約90cm、深さは18～40cm程で、断面形は不整形な半円状を呈する。覆土は概ね黒褐色で、底部付近は地山との混層である。出土遺物はごく少量の土師器細片のみだが、NR1を切り込んでいることから近世の土坑とみられる。

SK14(第50図、図版17) 2区南部B4グリッドでNR1の底面で検出した。検出面は標高4.95m、平面形は円形を呈する。長軸93cm、短軸74cm、深さ約14cmを測る。時期は不明であるが、NR1を切り込ん

でいることから近世の土坑とみられる。

SK15(第30図、図版29) 2区南東部D8・9グリッドの検出面から一段下げた面で検出した。検出面の標高は5.99～6.04m前後である。平面形は不整形を呈し、長軸約3.1m、短軸約3m、深さは2～122cm程である。断面形は階段状を呈し、覆土は概ね黒褐色～黒色だが、植物遺体を含む層や腐植層とみられるオリブ黒色粘土層も確認した。多量の須恵器・土師器片のほか、土師器壺(第52図114)や、須恵器有台(115)、土鍾(116)、時期不明の凝灰岩製砥石(117)などが出土している。遺物の様相などから、古代末以降の井戸であり、井戸枠・水溜などが抜かれたものと推定される。

SK16(第30図、図版29) 2区南東部D9グリッドの検出面から一段下げた面で検出した。検出面は標高5.96～6.03m前後で、平面形は概ね隅丸方形を呈する。長軸約1.2m、短軸約1m、深さ約3～20cmを測る。断面形は逆台形状で、覆土は黒褐色である。比較的多量の須恵器・土師器片のほか、古墳時代の土師器甕(第52図118)が出土した。

SK17(第46図、図版30) 2区東部E10グリッドで検出し、検出面は標高6.22m前後である。平面形は不整形を呈し、長軸約1.2m、短軸約1m、深さ約7～19cmを測る。断面形は逆台形状で、覆土は黒褐色である。少量の土師器片や、全体が摩耗した土師器の小型丸底壺(第52図119)、土師器壺(120)などが出土していることから、古墳時代後期に位置付けられる。

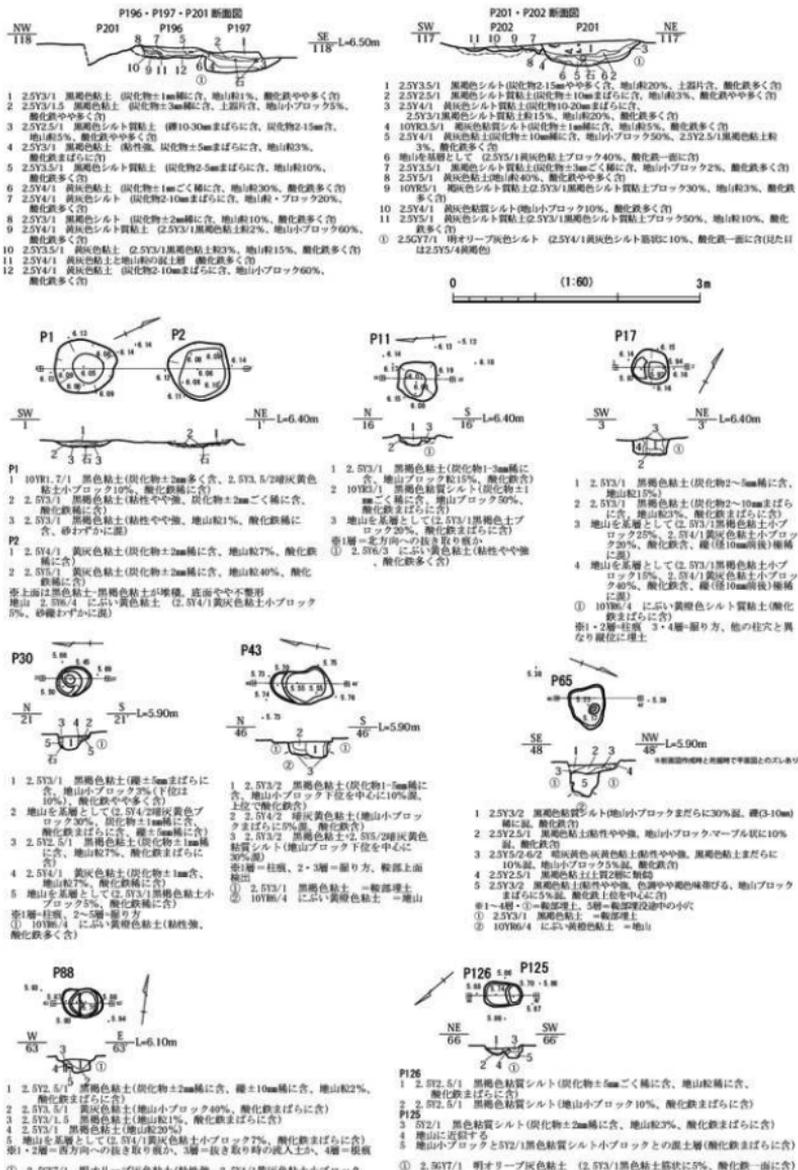
SK18(第46図、図版30) 2区東部E9グリッドで検出した。検出面の標高は6.18～6.21m前後で、平面形は不整形円形を呈する。長軸約1.2m、短軸約95cm、深さ約9～15cmを測る。断面形は半円状だが中央付近でやや浅くなっている。覆土は黒褐色である。出土遺物は少量の土師器片のみで時期は不明だが、平面形や覆土が類似することからSK17と同時期と推定される。

SK19(第46図、図版30) 2区東部D9グリッドで検出した。検出面は標高6.04～6.07m前後で、平面形は円形を呈する。長軸約85cm、短軸約75cm、深さ約26cmを測る。断面形は箱状で、覆土は黒褐色～黒色である。SK21より新しい遺構だが、少量の土師器片が出土しているに過ぎず時期は不明である。

SK21(第46図、図版30) 2区東部D9グリッドで検出し、検出面は標高6.04～6.07m前後である。平面形は不整形で、径80cm前後、深さ約12～22cmを測る。SK19に切られているため全容は不明だが、断面形は逆台形状を呈するとみられる。覆土は概ね黒褐色で、覆土の特徴はSK17・18に類似する。少量の土師器細片のほか、手捏ねの土師器(第52図121)が出土した。覆土の特徴や遺物の様相から、遺構の年代は古墳時代後半に位置付けられると考える。

土坑群(第43図、図版32) 2区北端F7・8グリッドで検出した。北側が調査区外へ延びることを確認し、調査区を一部拡張して掘削を行った。検出面は標高6.24～6.42m前後である。5m×3m程の範囲に、長軸1～2m程度の不整形～楕円形を呈する数基の土坑が集中している。遺構にはP136～138・P195～197・P201・P202と、ビット番号を付けて調査を行った。上部が削平されているため、最も深いP201でも深さ33cm程である。P136からは全体が摩耗した土師器の甕(第52図122)やごく少量の土師器細片が出土した。P137からは土師器片が少量出土しているが、接合には至らなかった。P138からは少量の土師器片と土師器甕(123)などが出土している。P196は比較的多量の土師器が出土したが、いずれも細片で図化には至っていない。P197からは多量の土師器片と共に土師器壺(124)や土師器高坏(125・126摩耗)、完形の手捏ね土師器(127、口縁部歪み大)などが出土した。P201では石や比較的多量の土師器片のほか、土師器甕(第54図128)、土師器壺(129)、完形の土師器小壺(130)、土師器高坏(131)などが出土している。土坑群の性格は不明だが、出土した遺物の様相などから年代は古墳時代後半に位置付けられる。

SX2(第43図、図版31) 2区北西隅F2・3グリッドで検出し、検出面の標高は6.21～6.27mである。平面形は円形を呈し、長軸1.5m、短軸1.47m、深さ35～42cmを測る。断面形は概ね逆台形状で、覆土



- 2.5Y3.5/1 黒褐色シルト (炭化物1mm幅に含、地山10%、酸化鉄中多) 含、地山小ブロック2%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y2.5/1 黒褐色粘土 (炭化物3mm幅に含、土層1片含、地山小ブロック3%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y2.5/1 黒褐色粘土質シルト (縦10.30mmまばらに含、地山約2.15mm幅に含、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y3.5/1 黒褐色粘土 (炭化物2.5mmまばらに含、地山約3%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y3.5/1 黒褐色粘土 (炭化物2.5mmまばらに含、地山約10%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (炭化物1mm幅に含、地山約30%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト (炭化物2.10mmまばらに含、地山約・ブロック20%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y3/1 黒褐色シルト (炭化物2mm幅に含、地山約10%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト (炭化物2.5mm幅に含、地山小ブロック60%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y3.5/1 黄灰色粘土 (炭化物2.5Y3/1黒褐色粘土約3%、地山約15%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y4/1 黄灰色粘土と地山約の混生土 (酸化鉄多) 含。
- 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (炭化物2.10mmまばらに含、地山小ブロック60%、酸化鉄中多) 含。

- 2.5Y3.5/1 黒褐色シルト (炭化物2.5mm幅に含、地山約20%、土層1片含、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y2.5/1 黒褐色粘土質シルト (炭化物10.20mmまばらに含、地山約3%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y4/1 黄灰色粘土質シルト (炭化物10.20mmまばらに含、地山約3%、酸化鉄中多) 含。
- 10YR3.5/1 黒褐色粘土質シルト (炭化物1mm幅に含、地山約5%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (炭化物10mm幅に含、地山小ブロック50%、2.5Y2.5/1黒褐色粘土約3%、酸化鉄中多) 含。
- 地山を基層として (2.5Y3/1黄灰色粘土小ブロック40%、酸化鉄一面) 含。
- 2.5Y3.5/1 黒褐色粘土質シルト (炭化物2mm幅に含、地山小ブロック2%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (炭化物10mm幅に含、酸化鉄中多) 含。
- 10YR5/1 黒褐色粘土質シルト (炭化物2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック30%、地山約3%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (地山小ブロック10%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y3/1 黄灰色粘土質シルト (炭化物2.5Y3/1黒褐色粘土質シルト小ブロック50%、地山約10%、酸化鉄中多) 含。
- 2.5Y7/1 明オリーブ灰色シルト (2.5Y4/1黄灰色粘土約5%、酸化鉄一面に含(土山は2.5Y3/4黒褐色)

- P1**
- 10YR1.7/1 黒褐色粘土 (炭化物2mm多) 含、2.5Y3.5/2暗灰色粘土小ブロック10%、酸化鉄面に含。
 - 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (粘土や中塊、炭化物2mmごく稀に含、酸化鉄面に含)。
 - 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (粘土や中塊、地山約1%、酸化鉄面に含、砂りすりに混)
- P2**
- 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (炭化物2mm幅に含、地山約7%、酸化鉄面に含)。
 - 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (炭化物2mm幅に含、地山約40%、酸化鉄面に含)。
- ※土山は黒色粘土・黒褐色粘土の堆積。底面や中・底面
① 2.5Y3/4 に近い黄灰色粘土
② 5Y4/1黄灰色粘土小ブロック5%、砂りすりに混)

- P11**
- 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (炭化物1.3mm幅に含、地山小ブロック15%、酸化鉄面に含)。
 - 10YR3/1 黒褐色粘土質シルト (炭化物2.1mm幅に含、地山小ブロック50%、酸化鉄面に含)。
 - 地山を基層として (2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック20%、酸化鉄まばらに含)。
※1層=北方方向の抜き取り穴
① 2.5Y6/3 に近い黄灰色粘土 (粘土や中塊、酸化鉄多) 含)
- P17**
- 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (炭化物2~5mm幅に含、地山約2%) 含。
 - 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (炭化物2~10mmまばらに含、地山約3%、酸化鉄まばらに含)。
 - 地山を基層として (2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック25%、酸化鉄多、縦(縦10mm前後)幅に混)
 - 地山を基層として (2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック15%、2.5Y4/1黄灰色粘土小ブロック40%、酸化鉄多、縦(縦10mm前後)幅に混)
- ① 2.5Y3/4 に近い黄灰色粘土質シルト (酸化鉄まばらに含)
※1・2層=柱礎 3・4層=張り方、他の柱穴と異なり縦位に埋土)

- P30**
- 2.5Y2.5/1 黒褐色粘土 (縦5mmまばらに含、地山小ブロック2% (土山は10%)、酸化鉄中多) 含。
 - 地山を基層として (2.5Y2.5/2暗灰色粘土小ブロック30%、炭化物1mm幅に含、酸化鉄多) 含。
 - 2.5Y2.5/1 黒褐色粘土 (炭化物2.1mm幅に含、酸化鉄多) 含。
 - 2.5Y4/1 黄灰色粘土 (炭化物1mm幅に含、地山約3%、酸化鉄面に含)。
- ※土山を基層として (2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック2% 含、酸化鉄多) 含。

① 10YR6/4 に近い黄灰色粘土 (粘土性、酸化鉄多) 含)

P43

 - 2.5Y3/2 黒褐色粘土 (炭化物1.5mm幅に含、地山小ブロック7% 底を中心に10%混、土層1枚鉄面含)。
 - 2.5Y4/2 暗灰色粘土 (地山小ブロックまばらに10%混、酸化鉄面含)。
 - 2.5Y3/2 黒褐色粘土 (2.5Y2.5/2暗灰色粘土質シルト (地山小ブロック下位を中心に30%混) 含)。
 - ※土層=柱礎、2・3層=張り方、較硬上面
 - 2.5Y3/1 黒褐色粘土 = 較硬埋土
 - 10YR6/4 に近い黄灰色粘土 = 地山

- P65**
- 2.5Y3/2 黒褐色粘土質シルト (地山小ブロックまばらに30%混、縦(3-10mm)幅に混、酸化鉄面含)。
 - 2.5Y2.5/1 黒褐色粘土 (粘土や中塊、地山小ブロックマーブル状に10%混、酸化鉄面含)。
 - 2.5Y3/2.2 暗灰色粘土 (黄灰色粘土 (粘土や中塊、黒褐色粘土まばらに10%混、地山小ブロック5%混、酸化鉄面含) 含)。
 - 2.5Y2.5/1 黒褐色粘土 (炭化物1mm幅に含、酸化鉄多) 含。
 - 2.5Y3/2 黒褐色粘土 (粘土や中塊、色澤やや暗褐色にまばらに5%混、酸化鉄面を中) 含。
- ※1~4層 = ①=柱礎、5層=較硬面(底面)の小穴
① 2.5Y3/1 黒褐色粘土 = 較硬埋土
② 10YR6/4 に近い黄灰色粘土 = 地山

- P88**
- 2.5Y2.5/1 黒褐色粘土 (炭化物2mm幅に含、地山約2%、酸化鉄まばらに含)。
 - 2.5Y3.5/1 黒褐色粘土 (地山小ブロック40%、酸化鉄まばらに含)。
 - 2.5Y3/1.5 黒褐色粘土 (地山約1%、酸化鉄まばらに含)。
 - 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (地山約1%、酸化鉄多) 含。
- ※土山を基層として (2.5Y3/1黄灰色粘土小ブロック7%、酸化鉄まばらに含)
※1・2層=東方方向の抜き取り穴、3層=抜き取り時の流入土、4層=根拠
- ① 2.5Y7/1 明オリーブ灰色粘土 (粘土性、酸化鉄多) 含)

- P126**
- 2.5Y2.5/1 黒褐色粘土質シルト (炭化物2.5mmごく稀に含、地山約5%に含、酸化鉄まばらに含)。
 - 2.5Y2.5/1 黒褐色粘土質シルト (地山小ブロック10%、酸化鉄まばらに含)。
- P125**
- 3YR2/1 黒色粘土質シルト (炭化物2mm幅に含、地山約3%、酸化鉄まばらに含)。
 - 地山小ブロックと3Y2/1黒色粘土質シルト小ブロックとの混生土 (酸化鉄まばらに含)。
 - 2.5Y7/1 明オリーブ灰色粘土 (2.5Y3/1黒褐色粘土約5%、酸化鉄一面に含)

第44図 2区土坑群・ピット実測図 (S=1/60)

は黄灰色～黒褐色である。底部には筵状の編物が2枚重ねて敷かれていた。上の編物は長さ75cm、幅81cmで、下の編物は南西部が折り重なっているため全長は不明だが、130cm以上とみられる。幅は上の編物と同程度と思われる。土層断面の観察から、径80～95cm程の底のないたらい状の枠内部に編物を敷いていたものと推定される。須恵器・土師器・陶磁器片が少量出土しており、時期は江戸時代前半に位置付けられる。

4. 溝

SD1(第45図、図版17) 2区南西B2・C2グリッドを中心に検出し、検出面は標高5.58～5.79m程である。西側は調査区外へ延びるが、長さ約23.3mを測る。幅は約25～95cmと北東部が幅広で、深さは9～25cmを測る。主軸は中央部でN-27°-E、緩く屈曲して北東部でN-60°-Eである。断面形は半円状～逆台形状で、覆土は黒褐色～黒色である(図版26)。少量の須恵器・土師器細片のほか、6世紀後半代の須恵器坏蓋(第52図99)が出土した。

SD2(第45図、図版17) 2区西端D1～3グリッドで検出し、検出面の標高は5.74～5.99mである。西側は調査区外へ延びるが、長さ15.3m程を確認した。幅は25～40cm程、深さは3～20cmを測る。主軸はN-83°-Wである。断面形は逆台形状で、覆土は黒褐色である(図版26)。少量の須恵器・土師器細片のほか、7世紀前葉に位置付けられる須恵器の坏身(第52図100)が出土した。

SD3(第46図、図版17) 2区西端D1～3グリッドで検出し、検出面の標高は5.93m前後である。途切れ途切れであるが、長さ6.2mを確認した。幅0.1～0.6m、深さ1～7cmである。

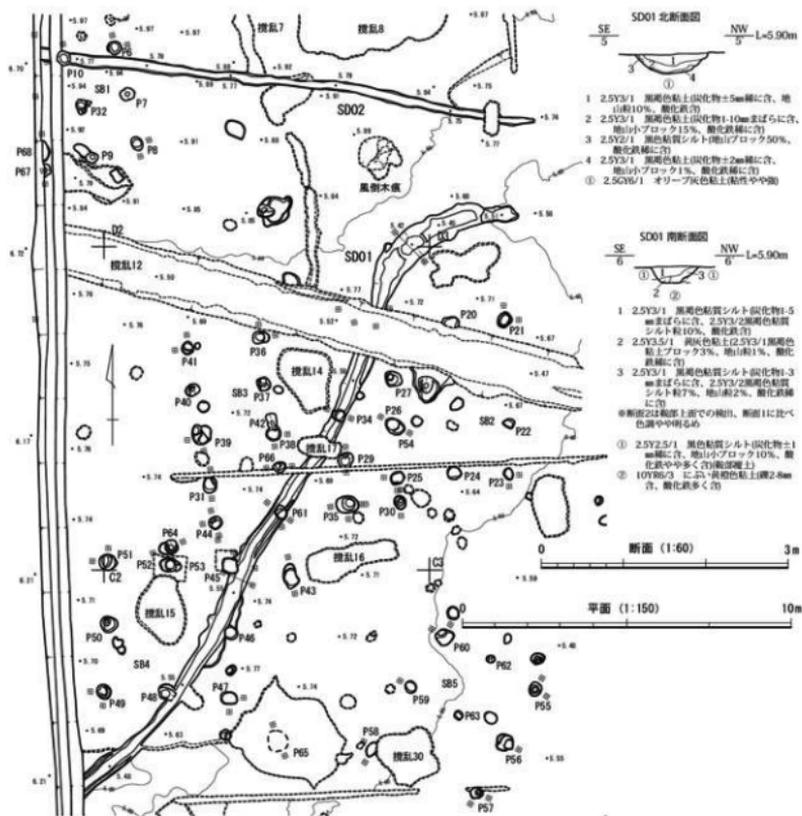
SD4(第46図、図版17) 2区中央付近D6・E6グリッドで検出した。検出面の標高は5.13～6.24m前後である。東側がSD9に繋がっており、長さ約11.8mを確認した。幅は20～50cm程、深さは3～11cm程である。主軸は西部でN-28°-E、くの字に屈曲し東部でN-65°-Wである。断面形は半円状で、覆土は黒褐色である(図版26)。須恵器・土師器が少量出土しているが、細片のため時期は不明である。

SD5(第46図、図版17) 2区中央D5・6グリッドで検出し、検出面の標高は5.70～5.93m前後である。途切れた部分も含めると全長は13.9m程を測る。幅は15～50cm程、深さは4～14cm程である。溝は緩く屈曲しており、主軸は西部でN-87°-E、中央部でN-74°-E、東部でN-89°-Eである。断面形は不整形な半円状で、覆土は概ね黒褐色、下位で地山ブロックが漸移的に混入している。出土遺物はごく少量の土師器細片のみだが、SF1のピット群に切られていることから9世紀以前の遺構と解釈できる。

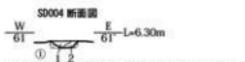
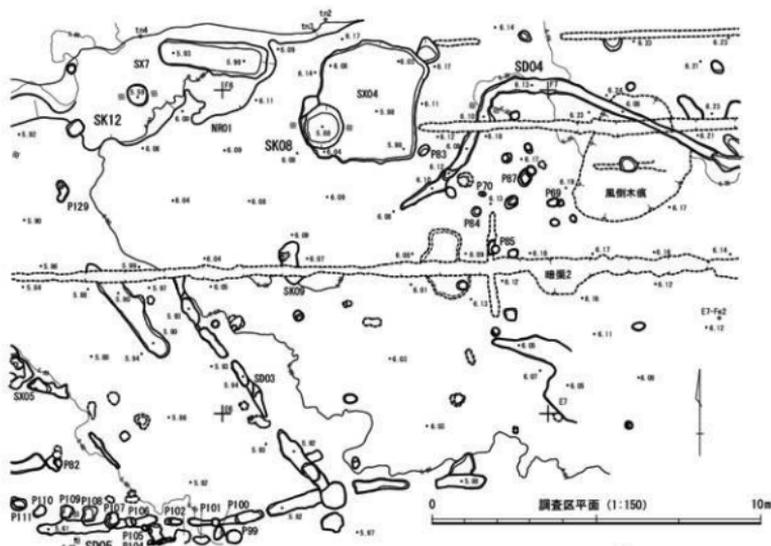
SD9(第47図、図版17) 2区東半E7～9・D9グリッドで検出し、検出面の標高は6.06～6.22m前後である。長さは約22mで、1区D10グリッドで検出したほぼ同じ幅・軸の溝が続きとするならより長くなる。幅約20～50cm、深さ約8～13cmを測る。主軸はN-66°-Wである。断面形は逆台形状で、覆土は黒褐色である(図版26)。須恵器や土師器の細片のほか、古墳時代後半に位置付けられる須恵器の坏身(第52図101)が出土した。

SD10(第47図、図版17) 2区東半D・E8グリッドで検出した。検出面の標高は6.00～6.12m前後で、長さ約13.5mを測る。SD10-aは幅約30～70cm、深さ約2～18cmを測る。SD10-bはSD10-aに切られているため正確な幅は不明だが、70～100cm前後とみられる。深さは約12～14cmを測る。溝の平面形は緩やかな弧を描き、断面形は逆台形状、覆土は黄灰色～黒褐色である(図版26)。須恵器や土師器が多数出土したが、いずれも細片のため時期は不明である。

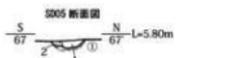
SD11・12(第47図) 2区F8・E8・E9・D9・D10グリッドで検出し、検出面の標高は6.04～6.26m前後である。当初別遺構として番号を付したが、SD11・12③断面の土層観察では別々の溝となる様相がとらえられなかったため、②断面付近(屈曲部)で広めに地山が削られたものと想定し、一つの遺構と



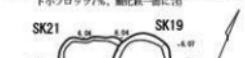
第45図 2区SD1・2実測図(S=1/150・1/60)



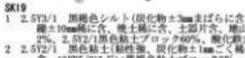
- 2.5Y3/1.5 黒褐色シルト質粘土(珪石)ブロック40%、酸化鉄や多く含む
- 2.5Y3/1.5 黒褐色シルト質粘土(珪石)10%、酸化鉄や多く含む
- 2.5Y6/3 赤褐色シルト(2.5Y4/1黄褐色シルト小ブロック)2%、酸化鉄一面を含む



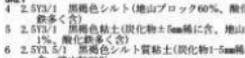
- 2.5Y3/1 黒褐色粘土(珪石)±3mm層を含む、珪化物±3mm程度を含む、珪土ブロック3%、酸化鉄多く含む
 - 2.5Y3/1 黒褐色粘土(珪石)ブロック40%、酸化鉄多く含む
- ※下段で地(1)ブロック層状に認められる(黒褐色シルト)
- ① 2.5Y6/2 赤褐色シルト (2.5Y4/1黄褐色シルト小ブロック)7%、酸化鉄一面を含む



- 2.5Y3/1 黒褐色シルト(珪化物)±3mmまばらに含む、珪土10mm層を含む、珪土層を含む、珪土層片を含む、珪土層片2%、2.5Y2/1黒褐色シルトブロック60%、酸化鉄多く含む
- 2.5Y2/1 黒褐色粘土(珪石)±1mm層を含む、珪土層片2%、珪土層片として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック)10%、酸化鉄多く含む

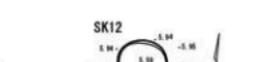


- 2.5Y3/1 黒褐色シルト(珪化物)±3mmまばらに含む、珪土10mm層を含む、珪土層片を含む、珪土層片2%、2.5Y2/1黒褐色シルトブロック60%、酸化鉄多く含む
- 2.5Y2/1 黒褐色粘土(珪石)±1mm層を含む、珪土層片2%、珪土層片として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック)10%、酸化鉄多く含む

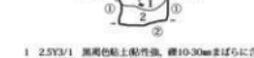


- 2.5Y3/1 黒褐色シルト(珪石)±3mm層を含む、珪化物±3mm程度を含む、珪土ブロック3%、酸化鉄多く含む
- 2.5Y3/1 黒褐色シルト(珪石)±3mm層を含む、珪化物±3mm程度を含む、珪土ブロック3%、酸化鉄多く含む

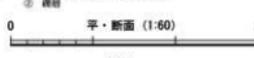
- 2.5Y2/1 黒褐色粘土(珪石)±1mm層を含む、珪土層片2%、珪土層片として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック)10%、酸化鉄多く含む
 - 2.5Y2/1 黒褐色粘土(珪石)±1mm層を含む、珪土層片2%、珪土層片として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック)10%、酸化鉄多く含む
- ※SK21の珪土特徴はSK17・18に類似



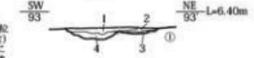
- 2.5Y3/1 黒褐色粘土(珪石)±3mmまばらに含む、珪化物±10mm層を含む、珪土層片2%、2.5Y2/1黒褐色シルト(珪石)±1mm層を含む、珪土層片2%、珪土層片として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック)3%、酸化鉄一面を含む
- 2.5Y3/1 黒褐色粘土(珪石)±3mmまばらに含む、珪化物±10mm層を含む、珪土層片2%、2.5Y2/1黒褐色シルト(珪石)±1mm層を含む、珪土層片2%、珪土層片として(2.5Y3/1黒褐色粘土小ブロック)3%、酸化鉄一面を含む



- 10YK3/1 黒褐色シルト(珪石)10-50mmまばらに含む、珪化物10mm層を含む、珪土小ブロック2%、酸化鉄や多く含む
- 10YK3/1.5 黒褐色粘土(珪石)1-5mm層を含む、珪土層片1%、珪土層片として(珪石)ブロック60%、酸化鉄や多く含む
- 10YK3/1.5 黒褐色粘土(珪石)1-5mm層を含む、珪土層片1%、珪土層片として(珪石)ブロック60%、酸化鉄や多く含む



- 2.5Y3/1 黒褐色シルト質粘土(珪化物)±2mm層を含む、珪土層片2%、珪土層片として(珪石)ブロック50% (中に珪石)多く含む、酸化鉄多く含む
- 10YK3/1 黒褐色シルト質粘土(珪石)±2mm層を含む、珪土層片2%、珪土層片として(珪石)ブロック50% (中に珪石)多く含む、酸化鉄多く含む
- 10YK3/1 黒褐色シルト質粘土(珪石)±2mm層を含む、珪土層片2%、珪土層片として(珪石)ブロック50% (中に珪石)多く含む、酸化鉄多く含む



- 10YK3/1 黒褐色シルト(珪石)10-50mmまばらに含む、珪化物10mm層を含む、珪土小ブロック2%、酸化鉄や多く含む
- 10YK3/1.5 黒褐色粘土(珪石)1-5mm層を含む、珪土層片1%、珪土層片として(珪石)ブロック60%、酸化鉄や多く含む
- 10YK3/1.5 黒褐色粘土(珪石)1-5mm層を含む、珪土層片1%、珪土層片として(珪石)ブロック60%、酸化鉄や多く含む



- 2.5Y6/2 赤褐色シルト(珪石)±3mmまばらに含む、珪土10mm層を含む、珪土層片2%、2.5Y4/1黄褐色粘土小ブロック10%、酸化鉄多く含む
- 2.5Y6/2 赤褐色シルト(珪石)±3mmまばらに含む、珪土10mm層を含む、珪土層片2%、2.5Y4/1黄褐色粘土小ブロック10%、酸化鉄多く含む

- 10YK3/1 黒褐色シルト(珪石)10-50mmまばらに含む、珪化物10mm層を含む、珪土小ブロック2%、酸化鉄や多く含む
- 10YK3/1.5 黒褐色粘土(珪石)1-5mm層を含む、珪土層片1%、珪土層片として(珪石)ブロック60%、酸化鉄や多く含む
- 10YK3/1.5 黒褐色粘土(珪石)1-5mm層を含む、珪土層片1%、珪土層片として(珪石)ブロック60%、酸化鉄や多く含む

第46圖 2区SD4・5、SK実測図(S=1/150・1/60)



第47図 2区SD9～12実測図(S=1/250・1/60)

してまとめて報告する。南部が2区調査区外へ延び、前年度調査の1区において溝の続き(1区SD08)が検出されている。1区と合わせた長さは約37mだが、1区東側で調査区外へ延びるため全長は不明である。幅は約1.1~1.9m、深さは18~53cm程である。主軸は、屈曲部より南部がN-62°-W、北部がN-39°-Wである。断面形は階段状~逆台形状で、覆土は概ね黄灰色~黒褐色である(図版26)。土層観察では、水が流れていたというより淀んで堆積したような様相や、北東方向から土が流入した様子が見て取れる。なお、遺物は③断面以南出土のものはSD11、以北出土のものはSD12として取り上げた。SD11からは多量の須恵器・土師器細片のほか、古墳時代に位置付けられる手捏ねの土師器(第52図102)や中世の加賀焼摺鉢(103)、中・近世の杭(第59図248)などが出土している。SD12からは多量の須恵器・土師器細片のほか、少量の陶器片、黒曜石剥片、近世の京焼風碗(第52図104)などが出土した。遺物の様相から、年代は中世~近世に位置付けられる。

SD14(第41図、図版25) 2区中央付近D7・8グリッドで検出し、検出面の標高は5.98~6.07m前後である。SX11などによって切られた部分も含めると長さは17.3m程で、溝の東部は2区調査区外へ延びる。幅約20~30cm、深さ約2~8cmで、溝は緩く蛇行してS11の周溝であるSD8を切っている。少量の須恵器・土師器細片のほか、近世に位置付けられる染付の小坏(第52図105)が出土した。

SD15(第41図、図版25) 2区中央付近D7・8グリッドで検出した。検出面は標高6.03~6.09m前後で、途切れた部分も含めると全長は14.6m程である。幅約20~40cm、深さは約4~12cmを測る。主軸はN-72°-Wである。断面形は不整形な逆台形状で、覆土は黒褐色である。S11の周溝であるSD8を切るが、少量の土師器細片が出土しているに過ぎず、時期は不明である。

SD17(第29図、図版17) 2区北部F7グリッドで検出した。検出面は標高6.22~6.29m前後で、全長は約4.2m、幅約60~120cm、深さ約6~11cmを測る。主軸はN-38°-Wである。底部外側にヘラ記号「-」と記された奈良・平安時代に位置付けられる須恵器の坏(第52図106)が出土している。

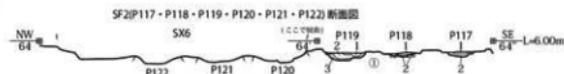
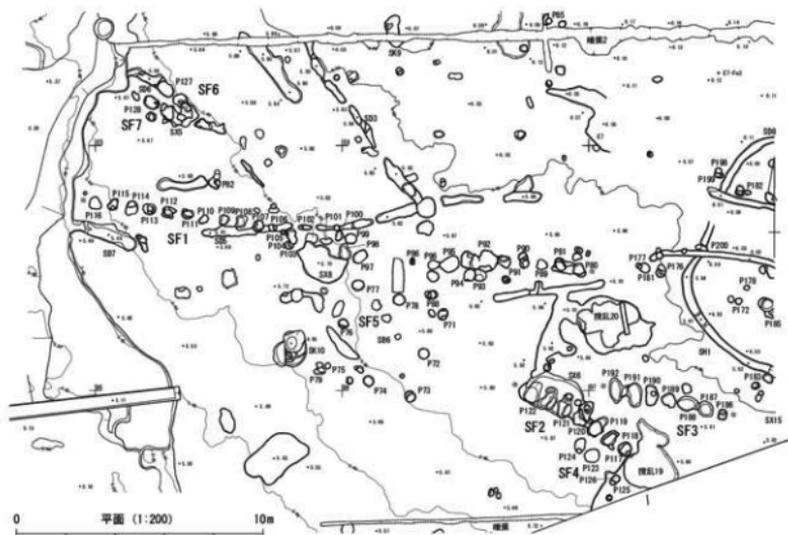
5. 道路状遺構

2区河道の左岸、調査区中央から河道にかけて不整形な小穴が連続する波板状凹凸を検出した。右岸では確認できなかった。

SF1(第48図、図版33) 2区中央D5・6グリッドを中心に検出し、検出面は標高5.56~5.98m前後である。長さ約20mにわたって長軸約20~150cmの小穴が近接して並んでいる。深さは約1~16cmといずれも浅い。主軸はN-81°-Wである。断面形は概ね半円状~逆台形状で、覆土は黄灰色~黒褐色、一部で灰オリーブ色である。SF1の西側では穴の底や上部に木片が混入するビットが多い。SF2・3では見られない特徴だが、その意味や河道に近いこととの関連性などは不明である。遺物は、P98から須恵器有台坏(第53図132)、P112から須恵器甕(133)、P115から須恵器瓶または壺(134)などが出土しており、須恵器の時期は9世紀頃に比定されるので、それ以降であろう。

SF2(第48図、図版33) 2区南部C6・7グリッドを中心に検出し、検出面の標高は5.86~5.93m前後である。長さは5m程で、長軸約60~110cmの小穴が連続して並んでいる。深さは1~21cm程を測る。主軸はN-56°-Wで、SF1やSF3とは異なる軸方向を示す。断面形は半円状~不整形な逆台形状で、覆土は黒褐色である。遺物はP124から出土したごく少量の土師器細片のみだが、SF1と同時期なら9世紀以降に位置付けられる。

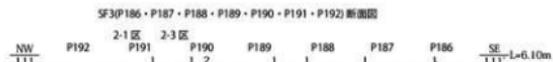
SF3(第48図、図版33) 2区南部C・D7グリッドで検出した。検出面は標高5.89~5.97m前後で、長さは約5mを測る。長軸約40~110cmの小穴が連続して並んでおり、深さは8~18cm程である。主軸はN-72°-Wで、SF1と似た方向を示している。断面形は不整形な半円状で、覆土は黄灰色~黒色である。



- P119**
2. 5/3/1 黒褐色シルト質粘土 (炭化物±1mm層に含、堆山ブロック3%、酸化鉄多く含)
 2. 5/3/1 黒褐色シルト質粘土 (堆山ブロック10%、酸化鉄多く含)
 - 堆山を基層として (2. 5/3/1黒褐色粘土ブロック2%、酸化鉄やや多く含)

- P118**
2. 5/3/1 黒褐色シルト質粘土 (炭化物±1mm層に含、堆山ブロック3%、酸化鉄多く含)
 - 堆山を基層として (2. 5/3/1黒褐色粘土ブロック2%、酸化鉄やや多く含)

- P117**
2. 5/3/1 黒褐色シルト質粘土 (炭化物±1mm層に含、堆山ブロック3%、酸化鉄多く含)
 - 堆山を基層として (2. 5/3/1黒褐色粘土ブロック2%、酸化鉄やや多く含)
 - ① 5/6/2 灰オリーブ色粘土 (2. 5/3/1黒褐色粘土ブロック2%、酸化鉄多く含)



- P191**
2. 5/4/1 黄灰色粘土 (炭化物±2mm層に含、堆山約2%、酸化鉄やや多く含)
 - 堆山に近接するがわずかに露

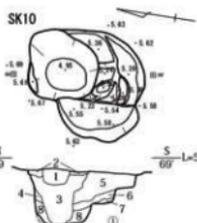
- P190**
2. 5/3/1 黒褐色粘質シルト (糞±5mm層に含、酸化鉄多く含、わずかに砂混)
 2. 5/3/1 黒褐色粘土 (堆山20%とマール状に混り合、酸化鉄多く含)
 - 堆山に近接するがわずかに露

- P189**
2. 5/3/1 黒褐色粘質シルト (糞±5mm層に含、酸化鉄多く含、わずかに砂混)
 2. 5/3/1 黒褐色粘土 (堆山20%とマール状に混り合、酸化鉄多く含)
 2. 5/3. 5/1 黒褐色粘土 (堆山約2%、酸化鉄やや多く含)

- P187 P188**
2. 5/3/1 黒褐色粘質シルト (糞±5mm層に含、酸化鉄多く含、わずかに砂混)
 2. 5/3/1. 5 黒褐色粘質シルト (炭化物±2mm層に含、堆山ブロック10%、酸化鉄多く含)

- P186**
2. 5/3/1 黒褐色粘質シルト (糞±5mm層に含、酸化鉄多く含、わずかに砂混)
 2. 5/3/1. 5 黒褐色粘質シルト (炭化物±2mm層に含、堆山ブロック15%、酸化鉄多く含)
 2. 5/2. 5/1 黒色粘土 (炭化物±2mm層に含、堆山ブロック20%、酸化鉄多く含)

- ① 2. 5/6/7/1 明オリーブ灰色粘質シルト (2. 5/2/1黒褐色粘質シルト小ブロック5%、酸化鉄多く含)



2. 5/3/1. 5/1 黄灰色粘土ブロックと堆山ブロックの混土層(糞±5mm層に含、酸化鉄やや多く含)
2. 5/3/1. 5/1 黄灰色粘土ブロックと2. 5/4/1黄灰色粘土ブロックの混土層(堆山小ブロック2%、酸化鉄まばらに含)
2. 5/3/1. 黒褐色粘質シルトブロック(糞±15mm層に含、炭化物±2mm層に含、堆山ブロック40%、酸化鉄やや多く含)
- 堆山ブロックと2. 5/3/1黒褐色粘土ブロック(粘性層)の混土層(酸化鉄層に含)
2. 5/3/1. 5/1 黒褐色粘質シルト(わずかに砂混、酸化鉄±40mm含、炭化物±3mm層に含、酸化鉄まばらに含)
2. 5/3/1. 黒褐色粘土(粘性層)
- 堆山を基層として(2. 5/3/1黒褐色粘土ブロック10%、酸化鉄多く含)
- 堆山を基層として(2. 5/4/1黄灰色粘土ブロック5%、酸化鉄やや多く含)

- ① 2. 5/6/6/1 緑灰色シルト質粘土(粘性層、土位は2. 5/4/1黄灰色粘質シルトブロック10%、酸化鉄一層に含)



第48図 2区SF1～3、SK10実測図1 (S=1/200・1/60)

出土遺物は少量の須臾器や土師器の細片のみだが、SF1・2と同様9世紀以降に比定できると考える。なお、SF1～3の波板状凹凸の周辺で硬化面や轍など路面と認定できる痕跡は確認されていないが、削平を受けていることや地盤が軟らかいことなどから、痕跡として残らなかった可能性もある。

調査中に認識した道路状遺構以外に、それらに繋がる可能性があるピット列を指摘したい。

SF1-c (第48図、図版17) 2区南部D7グリッドのSI1の西側に位置し、検出面の標高は5.98m前後である。P177・181、P176がSF1から延びる可能性がある。深さは4～14cmであるが、P176の中央部は24cmと深いので柱穴と思われる。

SF4 (第48図、図版17) 2区南部C6・7グリッドを中心に検出し、検出面の標高は5.85～5.89mである。SF2の南西側0.2～0.7mに位置し、長さ2.4mにP124、123、P125・126があり、深さ4cmでP126が12cm、P125が16cmである。主軸はN-44°-Wである。

SF5 (第48図、図版17) 2区南部D6グリッドのSB6内に位置し、検出面の標高は5.86m前後である。二つの深さ2cm程度のピットが2つあり、SF2～4からSF1のP97～99に繋がる可能性がある。

SF6・7 (第48図、図版17) 2区南部E5グリッドで検出し、検出面の標高は5.70～5.82mである。北側のSD6・P127・SX5・ピットをSF6(長さ4.6m、深さ5～19cm)、南側のピット・P128・SX5・ピットをSF7(長さ4.1m、深さ3～11cm)とした。

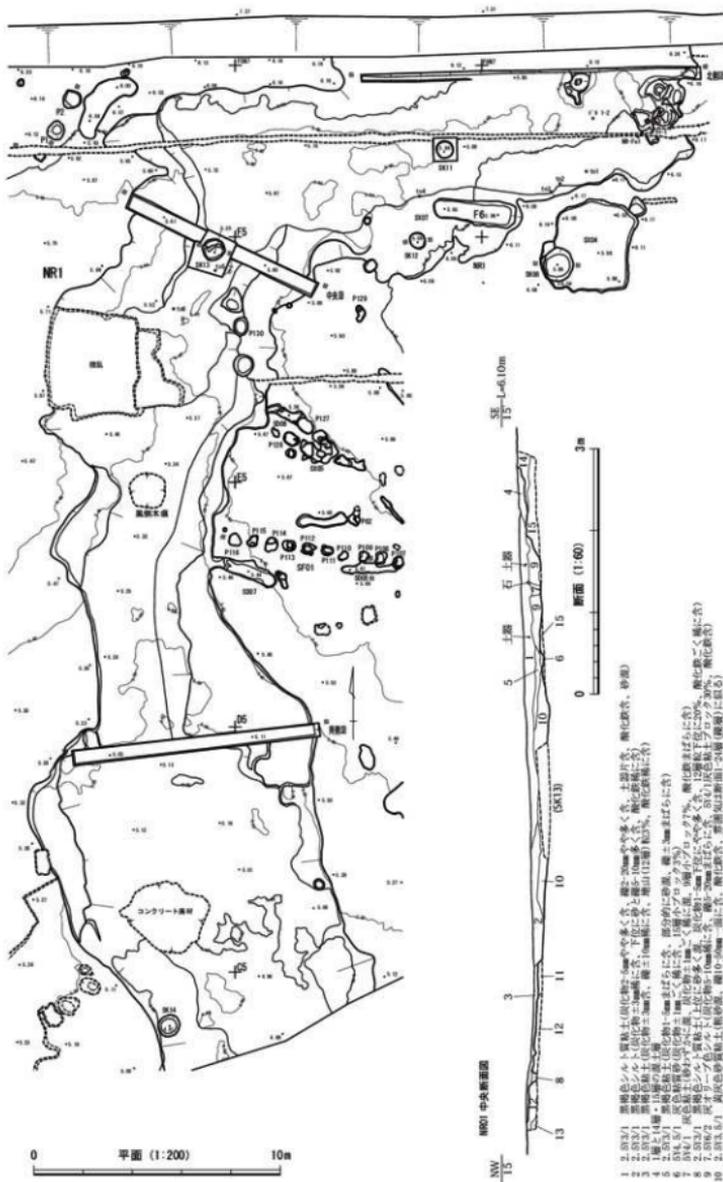
6. 河川跡

NR1 (第50図、図版34・35) 2区を北から南へ縦断する河道を検出した。検出面は標高5.01～6.27m前後である。1区で検出された箇所も含めると長さ約63m前後で、幅約5～14m、深さ約7～42cmを測る。調査区北端から南西へ流れ、F5グリッド杭付近で流路は南へと向きを変えている。断面形は概ね半円状を呈する。遺物は5m四方の小グリッドを設定して取り上げを行った。NR1からは、古墳時代の甕把手(第53図135)や土師器甕(136)・須臾器坏身(137)・滑石製白玉(第57図235)などのほか、6世紀後葉に位置付けられる須臾器坏身(第53図138)、奈良～平安時代に属する墨書土器(139・140・141・142・143)や須臾器坏(144)、9世紀前葉～中葉に位置付けられる須臾器坏(145)、年代不明の土錘(146)・石英製碁石(236)・カマ状鉄製品(240)などが出土している。特に墨書土器の出土が目目され、道教の符号である九字の略号「#」などが墨書されていることから、水辺で祭祀を行った後、河道に廃棄されたものと考えられる。他にも、下駄(第60図263)・杭(264・265)・木錘(266)などの木製品が出土しており、いずれも近世に位置付けられる。縄文時代の遺物も出土しており、深鉢(第54図147～149)、底部(150)などのほか、打製石斧(第57図232・233)、石鏃(215～219)、石錘(220)、石匙(221)、石錘(234)、剥片(222～227)なども確認した。今回の調査では縄文時代の遺構は確認されていないため、これらの遺物は河道上流にあたる遺跡北側の丘陵部に当該期の集落が存在したことを示唆している。河道の年代としては縄文～古代に位置付けられ、近世には埋没していた可能性がある。

7. 小 穴

番号を付した小穴は222基を数える。掘立柱建物の柱穴として柱列を捉えられたもの以外にも、建物プランは把握できなかつたが柱根や礎石らしき石、柱痕跡などが認められた小穴も複数確認できたため、断面図を作成したもののなかから以下に記述する。

P11 (第44図) 2区北西隅F2グリッドで検出した。検出面は標高6.15～6.19mで、平面形は方形を呈する。長軸は49cm、深さ9～13cmを測り、北方向への抜き取り跡とみられる土層を確認した。出土遺物はないが、調査区北側で検出されたことから近世の柱穴と推定される。



第50図 2区NR1実測図1 (S=1/200・1/60)

P16 2区北西部E3グリッドで検出し、検出面の標高は6.05～6.07mである。平面形は楕円形を呈し、長軸約50cm、深さ約25～27cmを測る。17世紀後半～18世紀前半の京焼風陶器壺(第53図151)が出土していることなどから、近世の遺構と考えられる。

P17(第44図) 2区北西隅E2グリッドで検出し、検出面は標高6.15m前後、平面形は楕円形である。長軸53cm、深さ22cm前後を測り、柱痕跡を確認した。出土遺物がないが、近世の柱穴の可能性がある。

P18・19(第40図) 2区北西隅F2グリッドで検出し、検出面の標高は6.25m前後である。平面形は円形を呈し、P18で長軸37cm、深さ17cm、P19で長軸32cm、深さ23～25cmを測る。P18では南東方向への抜き取り跡とみられる土層を確認した。P19では明確な柱痕跡は確認できないが、底面に礎板らしき木材が残存していた。2基を結ぶ軸はN-25°-Wである。土器は出土していないが、近世の柱穴と考えられる。

P28(第40図) 2区北西隅F3グリッドで検出した。検出面は標高6.25mで、平面形は楕円形を呈する。長軸は60cm、深さは28cmを測る。木片が混入する柱痕跡らしき土層や礎石を確認した。土器の出土はなく時期は不明だが、近世に属するとみられる。

P30(第44図) 2区西端C2グリッドで検出した。検出面は標高5.66～5.69mで、平面形は楕円形を呈する。長軸44cm、深さ21～23cmを測り、柱痕跡を確認した。出土遺物はなく時期は不明である。

P33 2区北西部E3グリッドで検出した。検出面は標高6.17m、平面形は不整形である。長軸約33cm、深さは28cm程を測る。17世紀前半の唐津焼皿(第54図152)が出土した。近世の遺構である。

P43(第44図) 2区南西部B2グリッド、鞍部の上面で検出し、検出面の標高は5.73～5.75mである。平面形は楕円形を呈し、長軸78cm、深さ18～20cmを測る。土層観察から柱痕跡が確認できる。出土遺物はごく少量の土器器片のみで、時期は不明である。

P65(第44図) 2区南西隅B2グリッドで検出した。鞍部が埋没する途中で掘削された小穴である。検出面の標高は5.69m前後で、平面形は円形を呈する。長軸約70cm、深さは30cm前後を測る。柱根や柱痕跡などは残っていない。出土遺物もなく時期は不明である。

P68(第31図) 2区西端D1グリッドで検出した。検出面は標高5.89mで、平面形は楕円形を呈するとみられる。長軸は約60cm、深さは約19cmを測る。柱痕跡は確認できず、SB1とは別の遺構と考えられる。少量の土器器片が出土したのみで、時期の特定には至っていない。

P86 2区中央付近D6グリッドで検出し、検出面の標高は5.91mである。平面形は方形を呈し、長軸約30cm、深さ約12～20cmを測る。奈良・平安時代の土器器壺(第54図153)が出土した。

P88(第44図) 2区中央部D6グリッドで検出した。検出面は標高5.94m前後で、平面形は楕円形を呈する。長軸約50cm、深さ約6～23cmを測り、西方向への抜き取り跡やその際の流入土とみられる土層を観察した。出土遺物はなく時期は不明である。

P125・126(第44図) 2区南部C7グリッドで検出し、検出面の標高は5.86～5.88m前後である。平面形は楕円形と方形を呈する。P125で長軸約25cm、深さ約17cm、P126で径約30cm、深さ約14cmを測る。柱根や明瞭な柱痕跡は確認できず、ごく少量の須恵器・土器器片が出土しているが、時期は不明である。

P159 2区南東部D8グリッドで検出した。検出面は標高6.02m前後で、平面形は楕円形を呈する。長軸1m前後、深さは6cm程を測る。内面が摩耗した古墳時代の土器器壺(第54図154)が出土した。

P168(第39図) 2区東端E9・10グリッドで検出した。検出面は標高6.23m前後で、平面形は不整形な方形で、長軸約70cm、深さ10cm前後を測る。柱痕跡などは確認できず、覆土はSK17・18などに類似している。P168からは土器器壺(第54図155)が出土しており、古墳時代に位置付けられる。遺物の様相や年代から見て、P168は柱穴ではなく、P167やSK17・18などを含めた土坑群のうちの一つと考えられる。

P171(第41図) 2区東半D7グリッド、SI1-aで検出した。検出面は標高6.13m前後で、平面形は楕円形を呈する。長軸約40cm、深さ約6~17cmを測り、南方向への抜き取り跡とみられる土層を確認した。出土遺物はなく時期は不明である。

P172(第41図) 2区東半D7グリッド、SI1-dで検出した。検出面の標高は6.02m前後である。平面形は不整形を呈し、径約30cm、深さ約17cmを測る。土層観察で柱痕跡を確認した。柱穴からは少量の土師器が出土しているが、小片であり時期は不明である。

P173(第41図) 2区東半E7グリッド、SI1-aで検出した。検出面の標高は6.11mで、平面形は円形を呈する。径は約25cm、深さは6~19cm程で、柱痕跡らしき土層が観察できる。出土遺物は少量の土師器片のみで、時期は不明である。

P174(第41図) 2区東半D7グリッド、SI1-aで検出し、検出面は標高6.08mである。平面形は円形を呈し、径約35cm、深さ約10cmを測る。土層観察で柱痕跡を確認した。柱穴からの出土遺物はなく時期は不明である。

P179(第41図) 2区東半D8グリッド、SI1-bで検出した。検出面の標高は6.07mで、平面形は隅丸方形を呈する。径は30cm程で、深さは12cm程を測り、柱痕跡を確認した。ごく少量の土師器片が出土したのみで、時期は不明である。

P182(第41・42図) 2区東半D7グリッド、SI1-aで検出した。検出面は標高6.07m前後で、平面形は不整形を呈する。長軸約50cm、深さ約1~5cmを測り、柱痕跡ないし杭痕跡と思われる土層を確認した。出土遺物はなく時期は不明である。

P183(第41・42図) 2区東半D7グリッドで検出した。検出面は標高6.04m前後で、平面形は楕円形を呈する。長軸約45cm、深さ約89cmを測り、土層は斜位状に堆積している。南西方向に傾いた杭らしき木材が残存していたが、対となるような小穴は確認できなかった。出土遺物は少量の土師器細片のみだが、SD8を切ることから古墳時代後期以降に位置付けられる。

P200(第41・42図) 2区東半D7グリッドで検出した。検出面の標高は6.04mで、平面形は楕円形を呈する。一部SD14に切られており判然としませんが、長軸で50cm前後、深さは6~19cm程を測る。土層観察では底面が平坦な柱痕跡が確認できる。柱穴からは少量の土師器細片のほか、須恵器蓋(第54図156)が出土した。有台坏の蓋を焼成時に上向きに据えた為に、内面に自然軸がかかる。SD8より新しくSD14より古い切り合い関係や、遺物の様相から、年代は9世紀に属すると考えられる。

P203(第41・42図) 2区東半D8グリッド、SI1-bで検出し、検出面は標高6.08mである。平面形は円形を呈し、長軸は約30cm、深さは約11cmである。柱痕跡らしき土層を確認した。SD15に切られているが、出土遺物はなく時期は不明である。

P204(第41・42図) 2区東半D8グリッド、SI1-bで検出した。検出面は標高6.06~6.08mで、平面形は楕円形を呈する。長軸は約25cm、深さは17cm程を測る。柱痕跡らしき土層が確認できるが、出土遺物はなく時期は不明である。

P205(第41・42図) 2区東半D8グリッド、SI1-cで検出し、検出面は標高6.03mである。平面形は隅丸方形で、径約30cm、深さは約22cmを測る。柱痕跡らしき土層を観察した。切り合い関係からSX11より古いことを確認したが、両遺構とも出土遺物は少量の須恵器・土師器片のみで、時期は不明である。

P206(第41・42図) 2区東半D8グリッド、SI1-cで検出し、検出面の標高は6.04mである。平面形は楕円形を呈し、長軸で約40cm、深さは19cm程を測る。柱痕跡と思われる土層が確認できるが、出土遺物はごく少量の土師器細片のみで時期は不明である。

P221(第27図) 2区南西隅の2面(鞍部底面)B2グリッドで検出した。検出面は標高5.56~5.58mで、

平面形は円形を呈する。径は約40cm、深さは9～23cm程を測る。出土遺物はなく時期は不明である。

P222(第27図) 2区南西隅の2面B2グリッドで検出した。検出面は標高5.46mで、平面形は不整形を呈する。長軸で約1m、深さ約5～30cmを測る。2層から木片が出土していることや、木片の周辺に粘性の強い暗灰黄色粘土がみられることから、柱根が腐朽した痕跡の可能性はある。出土遺物はなく時期は不明である。

8. そ の 他

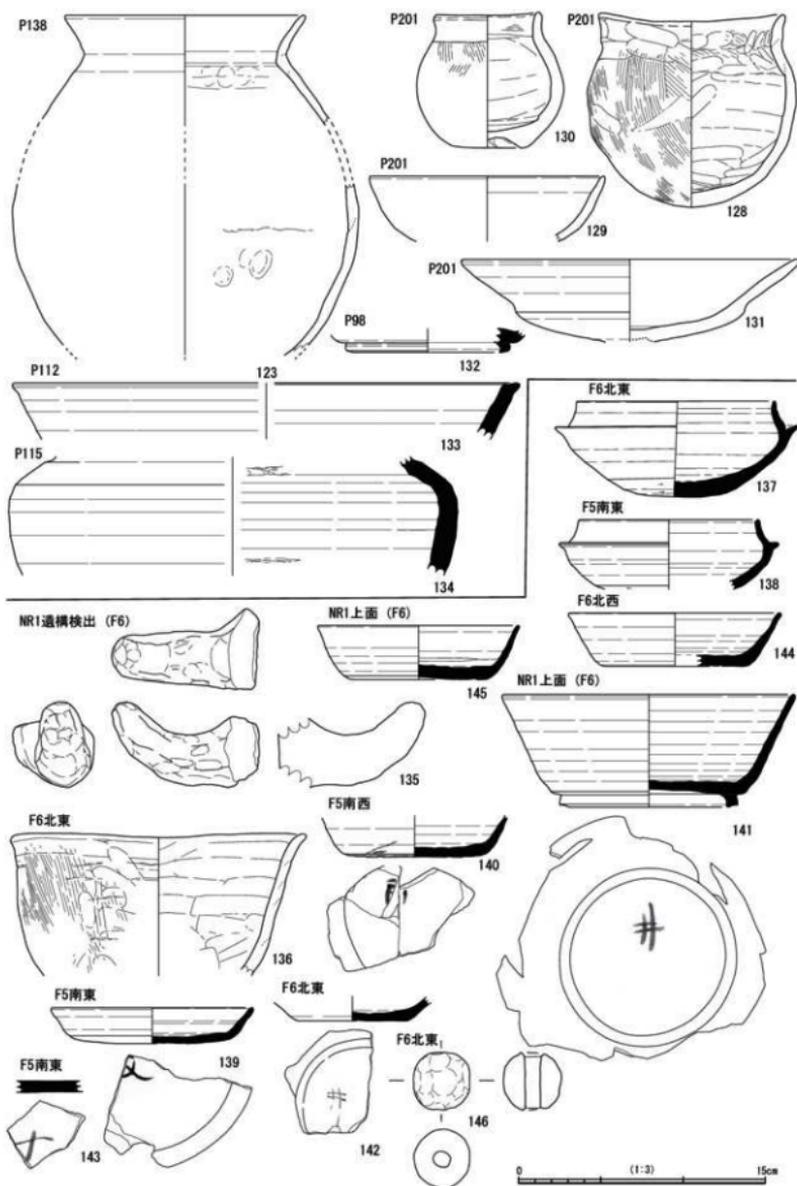
SX4(第46図) 2区北部E・F6グリッドで検出した。検出面は標高6.10～6.15m前後で、平面形は不整形な方形を呈し、南西側にはSK3(近世)がある。長軸約3.8m、短軸約3.5mを測り、深さは4～17cm程である。少量の須恵器・土師器細片のほか、染付碗(第54図157)、越前焼摺鉢(158・159)、陶器壙(160)、瓶(161)などが出土したことから、年代は近世(17世紀代)に位置付けられる。

SX6(第43図) 2区南部C・D6グリッドで検出した。検出面は標高5.88～5.93m前後で、平面形は不整形な楕円形を呈し、SF2の一部である。長軸3.2m前後、短軸約1.4m、深さ約9～15cmを測る。断面形は概ね半円状で、覆土は黒褐色である。上段部分は落ち込みに堆積した包含層の可能性はある。須恵器・土師器片が少量出土している。

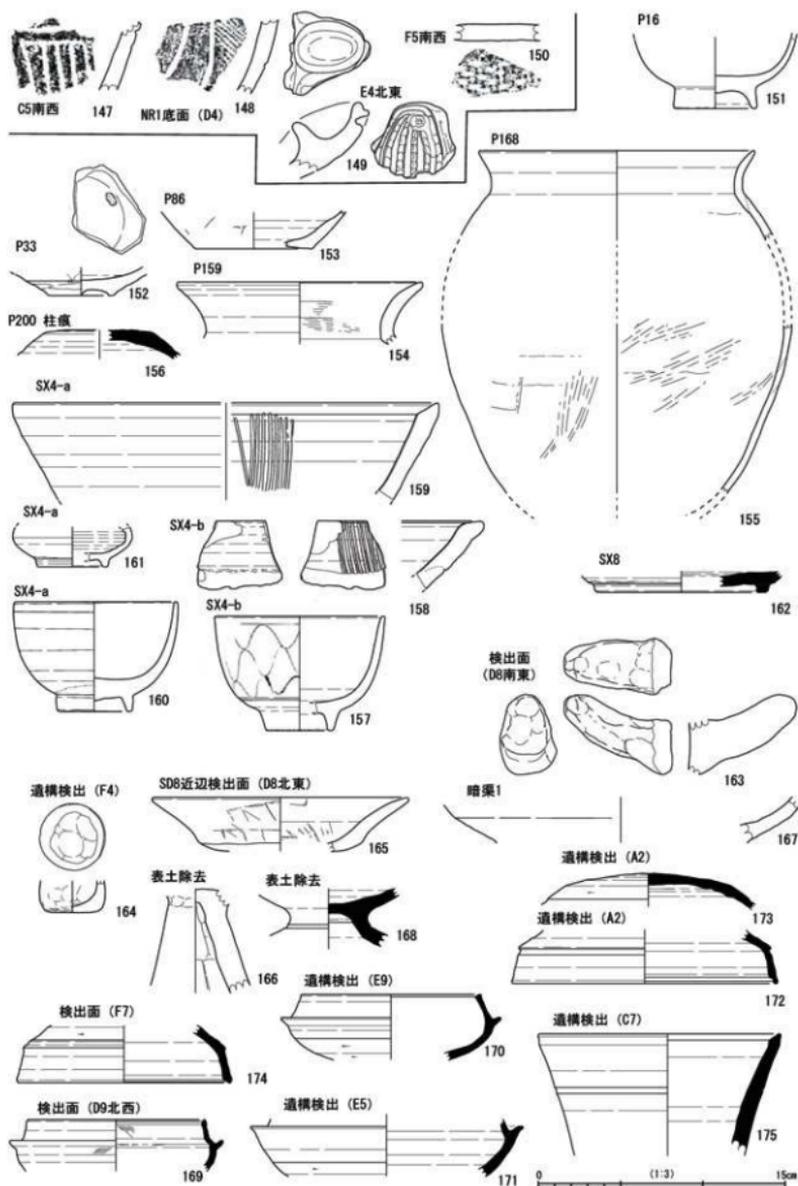
SX8(第48図) 2区中央付近D5グリッドで検出し、検出面は標高5.75～5.81m前後である。平面形は不整形で、長軸約2m、短軸約1.1m前後、深さ5～12cmを測る。少量の土師器細片や奈良・平安時代に位置付けられる須恵器坏身(第54図162)が出土した。

SX15(第43図) 2区南部C7グリッドで検出し、検出面の標高は5.97～6.04m前後である。平面形は不整形な方形を呈し、長軸1.8m前後、短軸約1.3m、深さ約2～25cmを測る。断面形は浅い逆台形状で、覆土は黒褐色である。平面では分からなかったが、土層断面の観察からSX15がSD8を切っている。出土遺物はごく少量の土師器細片のみだが、切り合い関係から古墳時代後期以降に位置付けられる。

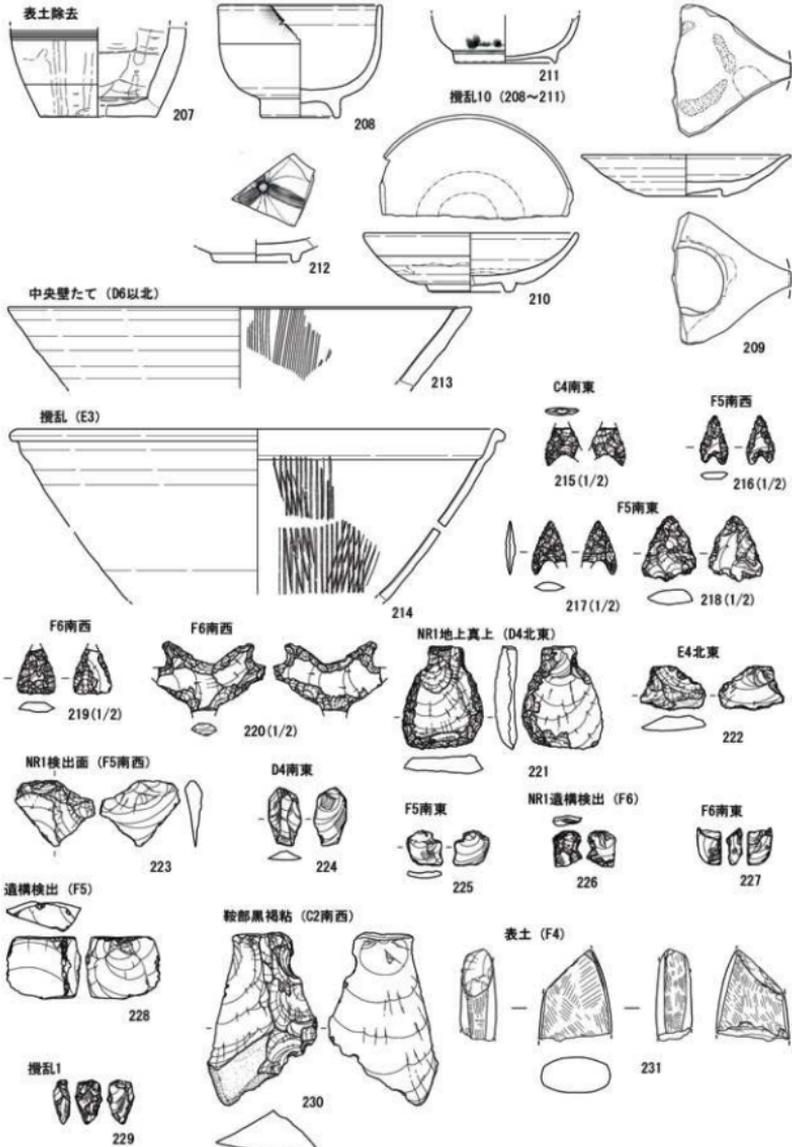
出土遺物 表土・表土除去・遺構検出・検出面・精査・壁立て・掘乱・暗渠・鞍部から出土した遺物の年代は、縄文時代～近代まで幅広い。縄文時代の遺物は、磨製石斧(231)、珪質頁岩剥片(228)、二次加工のある流紋岩剥片(230)、黒曜石製の楔形石器(229)などの石器が出土した。古墳時代の土師器では甌把手(第54図163)、手捏ねの土師器(164)、高坏(165・166・167・168)が、須恵器では坏身(169・170・171)、坏蓋(172・173・174)、瓶(175)、高坏(176・177・178・179・180・181・182・183)・甌(184・185・186)、甕(187・188・189・190・191・192)が出土した。古代に位置付けられるものとしては須恵器の瓶(193)や壺(194)、土師器壙(195)を確認した。奈良・平安時代の遺物はいずれも須恵器で、壺(196・197)、瓶か壺(198)、瓶(199)、蓋つまみ(200)、坏蓋(201)、双耳瓶(202)が出土している。平安時代に位置付けられる遺物としては須恵器坏蓋(203)がある。中世の遺物は、青磁碗(204)、白磁碗(205)、珠洲焼摺鉢(206)を確認した。近世では、火入れ壺(第56図207)、京焼風陶器壙(208、漆継ぎ?)、肥前焼皿(209・210)、肥前焼摺鉢(213・214)、方形火鉢(第57図238・239)のほか、底板(第59図270)といった木製品や、銅銭(寛永通宝第57図271)も出土している。近代の遺物としては、磁器の碗(第56図211)や皿(212)が挙げられる。また、年代不明の砂岩製平刃用砥石(第57図237)も確認した。



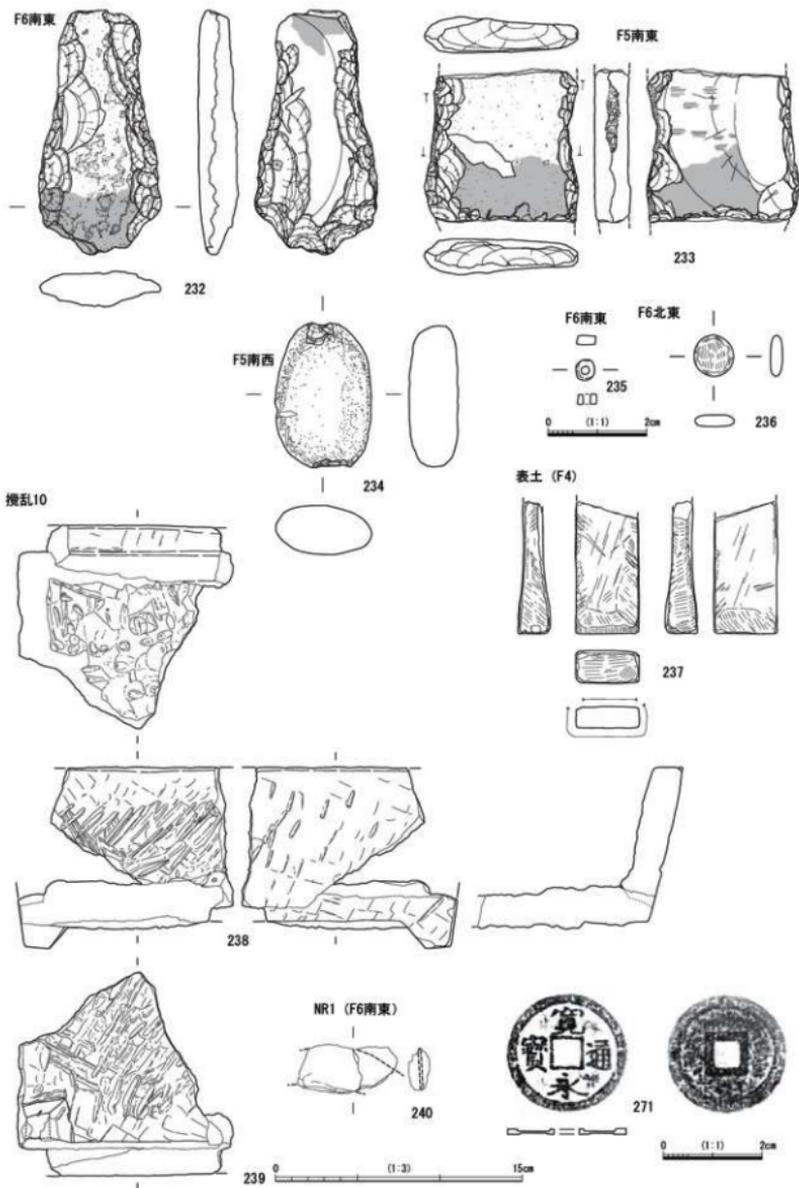
第53図 2区出土遺物2 (S=1/3)



第54図 2区出土遺物3 (S=1/3)

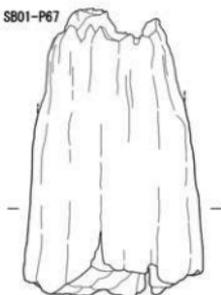


第56図 2区出土遺物5 (S=1/3・1/2)



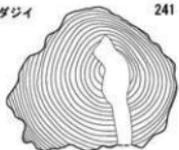
第57図 2区出土遺物 6 (S=1/3 : 1/1)

SB01-P67

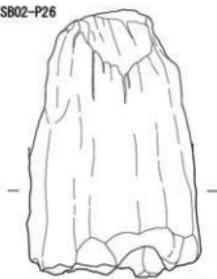


スダジイ

241



SB02-P26



サクラ属

242



SB04-P51



クリ

244



SB02-P27

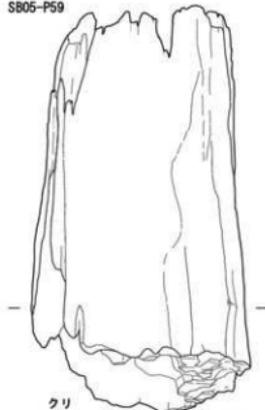


サクラ属

243



SB05-P59

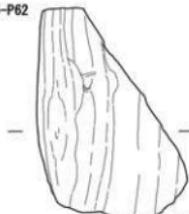


クリ

245



SB05-P62

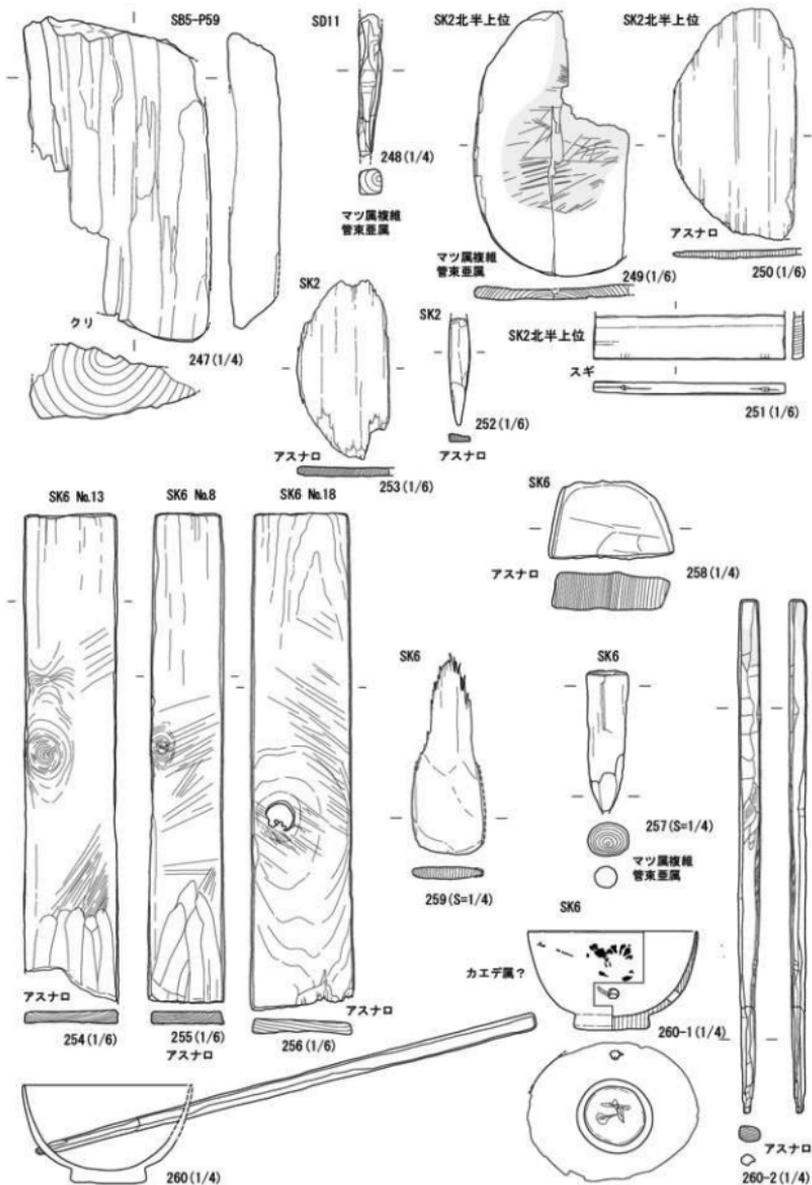


クリ

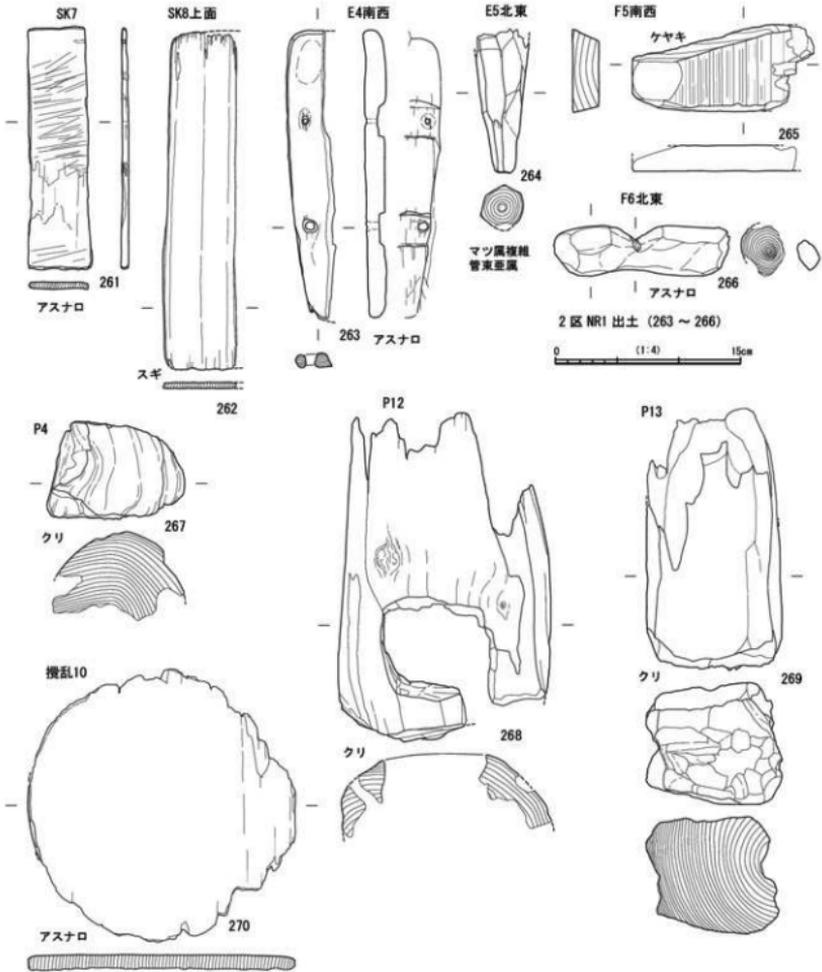
246



第58図 2区出土木製品1 (S=1/4)



第59図 2区出土木製品 2 (S=1/6・1/4)



第60図 2区出土木製品3 (S=1/4)

種別	地区	ブランド	出上運輸者	銘柄	口積	品質	製造	消費	色調(内)	色調(外)	組織	餅土	風味	調製(内)	調製(外)	備考
135	0007	25	円	山土運輸者	餅(25)	-	-	-	107R/233黄褐色	107R/233黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
136	0008	25	円	円	16.0	(8.7)	□1/9.12	5YR7/2.1黄褐色	5YR7/2.1黄褐色	5YR7/2.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
137	0009	25	円	円	12.0	3.3	(6.1)	5YR7/1.1黄褐色	5YR7/1.1黄褐色	5YR7/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
138	0005	25	円	円	12.2	3.3	(6.3)	2.5Y6/1.1黄褐色	2.5Y6/1.1黄褐色	2.5Y6/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
139	0004	25	円	円	12.2	3.0	2.2	2.5Y7/1.1黄褐色	2.5Y7/1.1黄褐色	2.5Y7/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
140	0003	25	円	円	11.0	2.6	2.2	2.5Y6/1.1黄褐色	2.5Y6/1.1黄褐色	2.5Y6/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
141	0057	25	円	円	17.9	6.6	6.9	2.5Y6/1.1黄褐色	2.5Y6/1.1黄褐色	2.5Y6/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
142	0001	25	円	円	11.0	2.6	(1.5)	2.5Y7/1.1黄褐色	2.5Y7/1.1黄褐色	2.5Y7/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
143	0006	25	円	円	11.0	2.6	(0.7)	10YR7/1.1黄褐色	10YR7/1.1黄褐色	10YR7/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
144	0000	25	円	円	12.8	3.3	□2/7.2	10YR7/1.1黄褐色	10YR7/1.1黄褐色	10YR7/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
145	0006	25	円	円	11.2	3.1	6/12	10YR7/1.1黄褐色	10YR7/1.1黄褐色	10YR7/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
146	0002	25	円	円	11.2	3.4	11/12	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
147	0003	25	円	円	11.2	3.4	(4.4)	2.5Y7/2.5黄褐色	2.5Y7/2.5黄褐色	2.5Y7/2.5黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
148	0004	25	円	円	11.2	3.4	(5.3)	2.5Y7/2.5黄褐色	2.5Y7/2.5黄褐色	2.5Y7/2.5黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
149	0005	25	円	円	11.2	3.4	(4.6)	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
150	0007	25	円	円	11.0	2.6	(1.0)	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
151	0004	25	円	円	11.0	2.6	(4.4)	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
152	0015	25	円	円	11.0	2.6	(4.2)	5YR7/2.5黄褐色	5YR7/2.5黄褐色	5YR7/2.5黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
153	0011	25	円	円	11.0	2.6	(2.2)	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
154	0002	25	円	円	11.0	2.6	(3.8)	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
155	0016	25	円	円	11.0	2.6	(2.1)	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
156	0003	25	円	円	11.0	2.6	(1.8)	2.5Y6/1.1黄褐色	2.5Y6/1.1黄褐色	2.5Y6/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
157	0002	25	円	円	10.1	3.9	7.0	□1/12	7.5Y6/1.1黄褐色	7.5Y6/1.1黄褐色	透明	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
158	0001	25	円	円	11.0	2.6	(4.2)	□1/12	7.5Y6/1.1黄褐色	7.5Y6/1.1黄褐色	透明	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
159	0001	25	円	円	11.0	2.6	(5.9)	□1/12	2.5Y6/1.1黄褐色	2.5Y6/1.1黄褐色	透明	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
160	0002	25	円	円	11.0	2.6	(4.7)	□1/12	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	透明	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
161	0003	25	円	円	11.0	2.6	(2.4)	□1/12	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	透明	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
162	0009	25	円	円	11.0	2.6	(10.1)	□1/12	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	透明	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
163	0009	25	円	円	11.0	2.6	(2.0)	□1/12	10YR7/2.5黄褐色	10YR7/2.5黄褐色	透明	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
165	0005	25	円	円	11.4	3.3	□1/12	7.5Y6/1.1黄褐色	7.5Y6/1.1黄褐色	7.5Y6/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
166	0000	25	円	円	11.0	2.6	(6.3)	□1/12	2.5Y6/1.1黄褐色	2.5Y6/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
167	0007	25	円	円	11.0	2.6	(3.7)	5YR7/1.1黄褐色	5YR7/1.1黄褐色	5YR7/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
168	0008	25	円	円	11.0	2.6	(3.7)	5YR7/1.1黄褐色	5YR7/1.1黄褐色	5YR7/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
169	0004	25	円	円	11.0	2.6	(3.15)	10YR7/1.1黄褐色	10YR7/1.1黄褐色	10YR7/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
170	0009	25	円	円	11.0	2.6	(4.0)	□1/12	10YR7/1.1黄褐色	10YR7/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
171	0001	25	円	円	11.0	2.6	(3.5)	□1/12	10YR7/1.1黄褐色	10YR7/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
172	0001	25	円	円	11.0	2.6	(3.2)	□1/12	10YR7/1.1黄褐色	10YR7/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
173	0002	25	円	円	11.0	2.6	(2.2)	□1/12	10YR7/1.1黄褐色	10YR7/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	
174	0003	25	円	円	11.0	2.6	(3.3)	□1/12	10YR7/1.1黄褐色	10YR7/1.1黄褐色	-	やや硬・組織やや多量	臭	ナマ・餅返置	ナマ・餅返置	

報告番号	管理番号	地区	グリッド	出土遺構等	跡層	長 (cm)	幅 (cm)	厚・高 (cm)	重量 (g)	石材	備考
117	0142	25C	D9	SK5西半下位	礎石	(6.0)	5.25	4.8	(29.7)	石材	
215	0123	25C	C4南東	NR1	礎石	(1.3)	(1.2)	0.3	(0.5)	凝灰岩	金属製刀柄用、切断痕。
216	0126	25C	F5南西	NR1	石塊	1.6	1.1	0.4	0.7	凝灰岩	先機部欠損、扉部欠損
217	0124	25C	F5南東	NR1	石塊	1.6	(1.3)	0.3	(0.6)	ガラス質火山岩	
218	0125	25C	F5南東	NR1	石塊	2.6	2.1	0.6	(3.2)	下底石	扉部欠損(裏面から)
219	0127	25C	F6南西	NR1	石塊	(1.8)	1.5	0.4	(1.3)	凝灰岩	全体の縁が摩滅
200	0128	25C	F6南西	NR1	石塊	(2.3)	(4.3)	0.8	(7.3)	凝灰岩	先機部欠損(裏面から)
221	0129	25C	D4北東	NR1(後)上真上	石錠	6.2	4.8	1.2	40.3	凝灰岩	先機部欠損(裏面から)
222	0130	25C	E4北東	NR1	銅片	2.7	3.9	1.0	9.9	凝灰岩	自然産：有
223	0131	25C	F5南東	NR1(後)出露	銅片	4.0	4.7	1.0	13.0	ガラス質火山岩	
224	0133	25C	D4南東	NR1	銅片	3.4	2.0	0.6	3.6	凝灰岩	縁辺に磨削跡あり
225	0134	25C	F5南東	NR1	銅片	2.1	2.1	0.5	2.1	凝灰岩	全体の縁が摩滅
226	0135	25C	F6	NR1(遺構)出土	銅片	2.1	1.7	0.6	2.1	凝灰岩	縁辺に磨削跡あり
227	0136	25C	F6南東	NR1	銅片	2.0	1.4	0.9	2.8	凝灰岩	他の高度石より表面に磨きが多い
228	0132	25C	F5	遺構)出土	銅片	3.8	4.5	1.8	24.5	凝灰岩	全体の縁が摩滅、65に同じ石材
229	0138	25C	E1	礎石	磨形石錠	2.6	1.6	1.0	3.5	凝灰岩	自然産：有(遺構)無
230	0137	25C	C2南西	礎石	銅片	10.2	6.2	2.5	133.8	凝灰岩	
231	0144	25C	F4	礎石	磨削石片	(5.6)	(4.4)	(7.3)	(7.0)	凝灰岩	自然産(有(遺構)無)
232	0121	25C	F6南東	NR1	打錐石片	14.9	7.4	2.4	200.7	凝灰岩	自然産(有(遺構)無)
233	0122	25C	F5南東	NR1	打錐石片	(3.3)	0.3	2.2	(203.1)	凝灰岩	自然産(有(遺構)無)
204	0141	25C	F5南西	NR1	石錠	8.5	5.8	2.9	207	凝灰岩	
205	0145	25C	F6南東	NR1(玉)	白玉	0.4	0.4	0.2	0.4以下	凝灰岩	
206	0146	25C	F4北東	礎石	礎石	2.5	2.4	0.7	7.1	凝灰岩	
207	0143	25C	F4	礎石	礎石	(8.1)	3.58	3.0	(76.0)	凝灰岩	平刃(打錐石)裏面からの磨削
238・239	0139・0140	25C	E3	礎石	方形石片	(26.7)	(25.0)	22.2	(3160)	凝灰岩	内面(上)に磨削痕、内外面に小磨痕と仕上げ磨削痕(平刃)
240	0272	25C	F6南東	NR1	銅	(4.0)	(8.1)	2.7			
271	0273	15C	A2南西	鞍部 東端(北)側	銅						a:24.0mm b:24.5mm c:20.0mm d:20.5mm e:5.0mm f:5.0mm

新石器時代調査報告書

報告番号	管理番号	地区	グリッド	出土遺構等	遺構	最大長(m)	最大幅(m)	深・高(m)	形状	内容	時期	備考
241	0204	25Z	D1g	SBI-P47	溝	02.6	14.6	11.75	スタライ	北坪丸木	古墳	
242	0203	25Z	C2g	SBI-P47	溝	21.8	14.2	19.2	ヤウ丸	古墳	古墳	
243	0205	25Z	C2g	SBI-P27	溝	26.0	14.7	12.3	ヤウ丸	北坪丸木	古墳	
244	0200	25Z	C2g	SBI-P51	溝	41.6	16.1	12.2	クリ	北坪丸木	古墳	
245	0251	25Z	B2g	SBI-P59	溝	33.2	17.9	15.0	クリ	北坪丸木	古墳	
246	0243	25Z	B3g	SBI-P62	溝	12.9	9.2	3.9	クリ	新丸	古墳	
247	0249	25Z	B2g	SBI-P62	溝	26.5	14.7	6.8	クリ	新丸	古墳	
248	0227	25Z	E2g	SO11	溝	11.6	2.0	2.5	ヤウ丸	北坪丸木	中・近世	
249	0202	25Z	E2g	SH2北坪上段	溝	32.4	10.0	1.9	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
250	0257	25Z	E2g	SH2北坪上段	溝	29.3	15.1	1.26	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
251	0253	25Z	E2g	SH2北坪上段	溝	5.4	23.2	1.4	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
252	0254	25Z	E2g	SK2	溝	13.2	2.6	1.0	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
253	0255	25Z	E2g	SK2	溝	21.95	11.25	1.2	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
254	0258	25Z	F4g	SK6 No.13	溝	59.8	12.0	1.7	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
255	0259	25Z	F4g	SK6 No.8	溝	60.0	9.4	1.6	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
256	0260	25Z	F4g	SK6 No.18	溝	60.8	60.8	12.7	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
257	0246	25Z	F4g	SK6	溝	11.5	3.4	2.7	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
258	0261	25Z	F4g	SK6 No.21の下	溝	5.6	5.6	10.1	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
259	0262	25Z	F4g	SK6	溝	16.5	16.5	5.8	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
260	0241-3	25Z	F4g	SK6	溝	41.7	41.7	13.6	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
260-1	0241-1	25Z	F4g	SK6	溝	13.6	6.1	8.1	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
260-2	0241-2	25Z	F4g	SK6	溝	41.95	1.8	1.4	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
261	0247	25Z	F3g	SK7	溝	10.8	5.2	0.6	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
262	0248	25Z	E2g	SK3上段	溝	27.6	27.6	6.0	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
263	0246	25Z	E2g	N41南西	溝	23.6	23.6	4.1	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
264	0238	25Z	E2g	N41北東	溝	11.8	11.8	4.3	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
265	0239	25Z	F2g	N41北東	溝	14.7	14.7	2.1	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
266	0240	25Z	F2g	N41北東	溝	4.2	4.2	14.2	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
267	0242	25Z	E2g	P4	溝	0.0	0.0	11.2	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
268	0244	25Z	F2g	P12	溝	06.8	06.8	17.3	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
269	0245	25Z	F2g	P13	溝	21.4	21.4	10.0	ヤウ丸	北坪丸木	近世	
270	0246	25Z	D2g	カクラン10	溝	22.3	22.3	21.1	ヤウ丸	北坪丸木	近世	

第10節 2区北坪丸木遺構・遺物

第5章 自然科学的分析

第1節 花粉分析

1. はじめに

大波谷コショウズワリ遺跡において、古植生を検討するために花粉分析用の試料が採取された。以下では、試料の花粉分析結果を示し、遺跡周辺の古植生について推定した。

試料No.	遺構	岩 質
1	NRI	黒褐色(10YR3/1)シルト
2		黒褐色(2.5Y3/1)シルト質粘土
3		黒褐色(2.5Y3/1)砂質粘土
4		黒褐色(2.5Y3/1)粘土
5		黒褐色(10YR3/1.5)シルト質粘土

第11表 分析試料一覧表

2. 試料と方法

分析試料は、NRI(自然河道)から採取された5試料である(第11表)。これらの試料から、次の手順で花粉分析を実施した。

試料(湿重量約3~4g)を遠沈管にとり、10%水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%フッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理(無水酢酸9:濃硫酸1の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、残渣にグリセリンを滴下し保存用とする。検鏡は、この残渣より適宜プレパラートを作製して行った。各プレパラートは樹木花粉が200を超えるまで検鏡し、その間に現れる草本花粉・胞子を全て数えた。

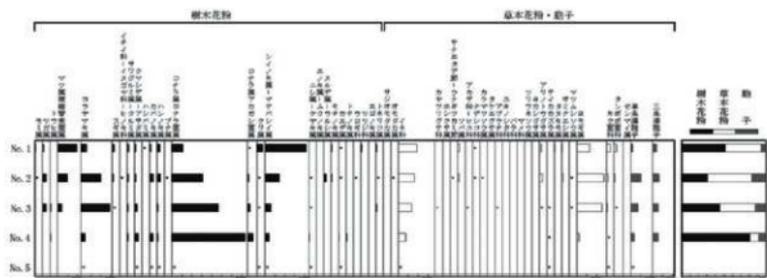
3. 結 果

産出花粉・胞子の一覧を第12表に、花粉分布図を第61図に示した。分布図において樹木花粉の産出率は樹木花粉総数を基数とし、草本花粉と胞子の産出率は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で示してある。No.5については、含まれる花粉化石の含有量が少なかったため、分布図では産出した分類群を*で表示するとどめた。図および表においてハイフン(-)で結んだ分類群

学 名	和 名	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5
藜科						
<i>Ablex</i>	モミ属	2	1	-	-	-
<i>Taxus</i>	ツガ属	1	8	3	-	-
	トウヒ属	-	-	2	1	-
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属(雄雄亜属)	5	5	-	-	-
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属	1	2	2	2	3
<i>Cupressus</i>	スギ属	-	-	1	-	-
<i>Taxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceae</i>	イタドリ-イヌゴヤケ-ヒノキ科	-	1	-	-	-
<i>Platanus-Aquilaria</i>	サザナギ属-ウルシ属	-	3	2	2	-
<i>Casipina-Ostrya</i>	クワシロ属-アマダ属	3	-	5	2	2
<i>Corylus</i>	ハシバミ属	1	-	-	-	-
<i>Betula</i>	カバノ木属	3	-	7	1	-
<i>Alnus</i>	ハシバミ属	-	7	2	2	2
<i>Fagus</i>	ブナ属	1	-	-	-	-
<i>Quercus subgen. Lepidobotrys</i>	コナラ属(コナラ亜属)	1	2	1	1	-
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属(アカガシ亜属)	1	3	5	2	-
<i>Castanea</i>	クワ属	1	1	1	1	-
<i>Castanopsis-Pistacia</i>	シシトマ属-マタバシ属	-	-	1	3	3
<i>Liriodendron</i>	ニレ属-ケヤキ属	-	-	1	2	1
<i>Celastraceae</i>	エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	1	-
<i>Rhus-Toxicodendron</i>	スズナギ属-ウルシ属	-	5	-	-	-
<i>Aster</i>	キクノ木属	2	2	-	-	-
<i>Acer</i>	カエデ属	1	1	-	1	1
<i>Aesculus</i>	トドナギ属	-	-	-	2	-
<i>Albizia</i>	クワヤシ科	-	1	-	-	-
<i>Eriocaulaceae</i>	ツツジ科	-	2	-	-	-
<i>Styracis</i>	エビノ木属	-	-	-	-	1
<i>Fragaria</i>	トネリコ属	2	1	2	-	-
藁本						
<i>Asteraceae</i>	サイシヨモギ科属	-	1	-	-	-
<i>Scutellaria</i>	オモダギ属	-	1	-	-	-
<i>Gramineae</i>	イネ科	1	3	2	-	10
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	-	-	1	-	-
<i>Eriocaulum</i>	シシトマ科	-	-	-	1	-
<i>Moraceae</i>	アザミ科	-	2	-	-	-
<i>Polypodium sect. Persicaria-Echinocaulon</i>	サイシヨモギ属-ウナギツクミ属	-	3	-	-	-
<i>Chenopodiaceae-Amaranthaceae</i>	アカザ科-ヒユ科	-	-	1	-	-
<i>Caryophyllaceae</i>	アザミ科	1	-	-	-	-
<i>Tricardium</i>	カガマツノ属	-	1	-	-	-
<i>Ranunculaceae</i>	キンポウゲ科	-	-	-	1	-
<i>Malvaceae</i>	タネツクシ属	-	-	-	1	-
<i>Borraginaceae</i>	アザミ科	-	-	1	-	-
<i>Saxifragaceae</i>	ユキノシタ科	-	-	-	1	-
<i>Rosaceae</i>	バラ科	-	3	-	-	-
<i>Leguminosae</i>	マメ科	-	1	-	-	-
<i>Impatiens</i>	ツツジ科	-	1	-	-	-
<i>Rubiaceae</i>	キクシヨモギ属	-	-	1	-	-
<i>Nasturtium</i>	アブラムシ科	6	-	1	-	-
<i>Apiaceae</i>	セリ科	-	-	1	-	-
<i>Tracheoparnum</i>	クワカサゴ属	-	-	-	1	1
<i>Urticaria</i>	クワヤシ科	2	-	-	-	-
<i>Perniceae</i>	オオアシシ属	2	-	-	-	-
<i>Scabiosa</i>	マヨミツクノ木属	-	1	-	-	-
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	2	1	-	6	-
<i>Tubiflorae</i>	ケヤキ科	-	1	-	1	1
<i>Ligularia</i>	ラン科(蘭科)	1	-	2	-	-
シダ植物						
<i>Osmunda</i>	ヒメマユ属	-	-	-	-	-
<i>monolete type spore</i>	単葉型孢子	1	2	-	8	4
<i>trilete type spore</i>	三葉型孢子	2	1	-	14	-
Artorial pollen	樹木花粉	26	40	36	26	15
Nonartorial pollen	草本花粉	15	14	17	14	12
Spores	シダ植物孢子	3	3	0	22	4
Total Pollen & Spores	花粉・孢子総数	44	57	53	62	31
Unknown pollen	不明型花粉	10	4	-	2	-

第12表 産出花粉化石一覧表

は、それらの分類群間の区別が困難なものを示す。また、クワ科やユキノシタ科、バラ科、マメ科の花粉には樹木起源と草本起源のものがあるが、各々に分けるのが困難なため、便宜的に草本花粉に一括して入れてある。



第61図 大波コショウズリ遺跡における花粉分布図

樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は産出花粉胞子総数を基数とした百分率で産出した。

*は樹木花粉200個未満の試料について、検出した分類群を示す。

樹木花粉では、マツ属複雑維管束亜属やコウヤマキ属、コナラ属コナラ亜属、シノキ属-マテバシイ属の産出が目立つ。マツ属複雑維管束亜属はNo.4とNo.5では産出が見られないが、No.1, 2, 3の層準で上位層に向かって産出率が増加しており、4%~19%の産出率を示す。コウヤマキ属はNo.4とNo.5では産出が少ないが、No.3で29%の産出率を示し、上位層に向かって減少している。コナラ属コナラ亜属はNo.4で74%と最も高い産出率を示すが、上位層に向かって減少している。シノキ属-マテバシイ属はNo.2~No.4で5%~15%の産出率を示して微増しており、No.1になると42%の産出率を示し、急増する。草本花粉では、イネ科とヨモギ属の産出が目立つ。イネ科は8%~19%の産出率で、上位層に向かって微増している。ヨモギ属はNo.4で2%の産出率にとどまるが、No.3になると26%と急増し、No.1~No.3では13%~27%の産出率を示す。また、栽培植物のソバ属がNo.1とNo.2でわずかに産出している。

4. 考 察

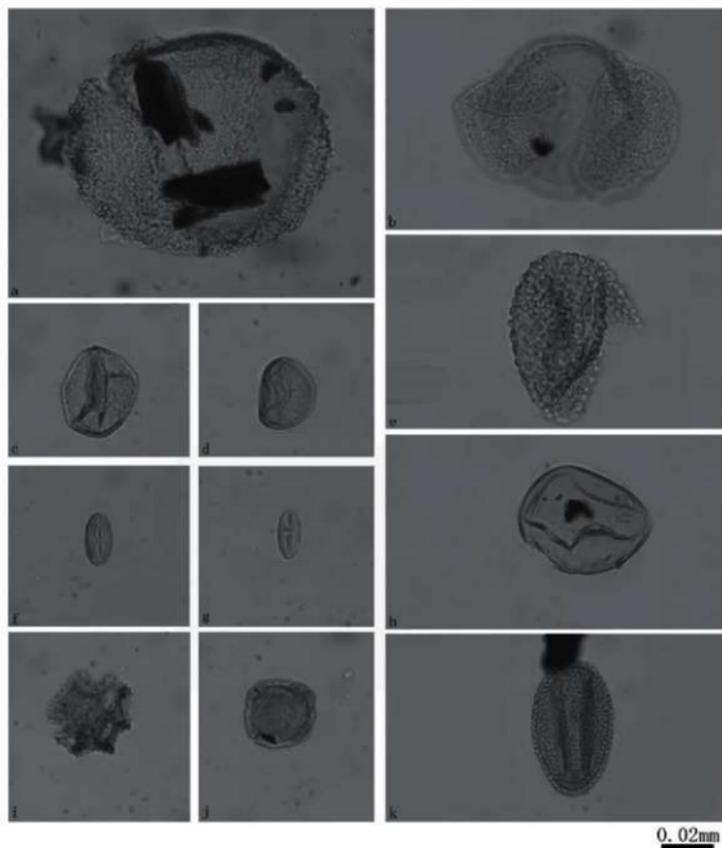
まず、No.4であるが、この層準ではコナラ属コナラ亜属が圧倒的に多く産出している。よって、遺跡周辺にはコナラ属コナラ亜属を主体とした落葉広葉樹林が広がっていたと思われる。

次のNo.3の時期になると、コウヤマキ属が増加している。コナラ属コナラ亜属は減少しているものの、依然として高い産出率であり、この時期の遺跡周辺ではコナラ属コナラ亜属とともにコウヤマキ属も分布を広げていたと思われる。さらにこの時期には、二次林要素のマツ属複雑維管束亜属が微増し、ヨモギ属の急増、イネ科の微増といった特徴が見られる。遺跡周辺のナラ林が切り開かれ、その跡地にヨモギ属やイネ科を主体とした草本植生が広がり、ニエウマツ類の二次林も発達していた可能性などが考えられる。

No.2の時期には、さらにコナラ属コナラ亜属やコウヤマキ属が減少し、マツ属複雑維管束亜属やイネ科、ヨモギ属が増加している。遺跡周辺の二次林化、あるいは草地化が進んでいたと思われる。この時期にはシノキ属-マテバシイ属の増加も目立ってくるようになり、遺跡周辺にはシノキ属-マテバシイ属を含む照葉樹林が分布を拡大していたと思われる。また、No.1, 2ではソバ属が産出しており、

少なくともこの時期以降に遺跡周辺でソバ栽培が行われていたと考えられる。

No.1の時期になっても、遺跡周辺の二次林化と草地化の傾向は続き、主に、この時期にはシノキ属-マテバシ属の照葉樹林が遺跡周辺に広がっていたと思われる。



図版1 大管波コショウズワリ遺跡から産出した花粉化石

- a. ツガ属 b. マツ属複雑管束亜属 c. コナラ属コナラ亜属 d. コナラ属アカガシ亜属 e. コウヤマキ属
f. クリ属 g. シノキ属-マテバシ属 h. イネ科 i. タンポポ亜科 j. アリノトウグサ属 k. ソバ属

第2節 寄生虫卵分析

1. はじめに

大昔波コショウズワリ遺跡において、用途不明の遺構が検出された。トイレ遺構などの可能性を検討する目的で寄生虫卵分析を行った。

2. 試料と分析方法

分析試料は、SK2とSK6から採取された2点である。これらの試料について、以下の手順にしたがって寄生虫卵分析を試みた。

計量した試料に、10%の水酸化カリウム溶液を加え10分間湯煎する。水洗後、46%のフッ化水素酸溶液を加え1時間放置する。水洗後、比重分離(比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離)を行い、浮遊物を回収し水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理(無水酢酸9:1濃硫酸の割合の混酸を加え20分間湯煎)を行う。水洗後、この残渣に適容量のグリセリンを加えて計量した。この残渣からプレバートを作製し、プレバート全面に渡り検鏡した。なお、試料1g中の寄生虫卵含有数は、次式で求める。

$$X = BD/AC$$

X: 試料1g中の寄生虫卵含有数、A: 分析に用いた試料の重量(g)、B: 濃縮試料+グリセリンの重量(g)、C: 濃縮試料+グリセリンのうち、封入に用いた重量(g)、D: プレバート中の寄生虫卵数

3. 分析結果

計量し、検鏡した結果を第13表に示す。両試料とも、回虫卵と鞭虫卵、肝吸虫卵、横川吸虫卵、不明寄生虫卵の産出が確認できた。試料1g当たりの個数はSK2が回虫卵88個、鞭虫卵28個、肝吸虫卵46個、横川吸虫卵56個、不明寄生虫卵14個、SK6が回虫卵88個、鞭虫卵32個、肝吸虫卵49個、横川吸虫卵60個、不明寄生虫卵18個である。試料1cm当たりではSK2が257個、SK6が272個になる。

4. 考察

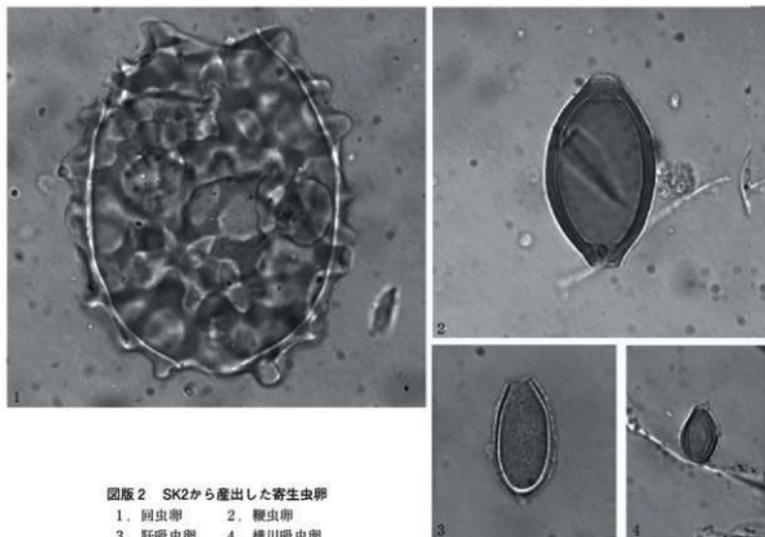
寄生虫卵数については、試料1cm中に1,000個以上あれば糞便の可能性があると考えられている(金原1997)。SK2では試料1cm当たり257個、SK6は試料1cm当たり272個の寄生虫卵が確認できた。寄生虫卵数から考えると、両試料は糞便自体とは言い難い。しかし、寄生虫卵が含まれているため、糞便が混じりこんでいる試料であるといえる。両試料には寄生虫卵が比較的多く含まれるため、SK2とSK6はトイレ遺構の可能性がある。

引用文献

- 金原正明 1997 「自然科学的研究からみたトイレ文化」『トイレの考古学』
大田区立郷土博物館編:197-216, 東京美術。

	SK2	SK6
分析に用いた試料(g)	5.633	5.633
残渣+グリセリン(g)	1.023	1.023
封入に用いた量(g)	0.052	0.052
試料の密度(g/cm)	1.11	1.11
回虫卵 (試料1g当たりの個数)	25	25
鞭虫卵 (試料1g当たりの個数)	8	9
肝吸虫卵 (試料1g当たりの個数)	28	32
横川吸虫卵 (試料1g当たりの個数)	13	14
不明寄生虫卵 (試料1g当たりの個数)	46	49
不明寄生虫卵 (試料1g当たりの個数)	16	17
不明寄生虫卵 (試料1g当たりの個数)	56	60
不明寄生虫卵 (試料1g当たりの個数)	4	5
不明寄生虫卵 (試料1g当たりの個数)	14	18
計 (試料1g当たりの個数)	66	70
計 (試料1cm当たりの個数)	231	245
計 (試料1cm当たりの個数)	257	272

第13表 寄生虫卵分析に用いた試料の計量値と寄生虫卵数



図版2 SK2から産出した寄生虫卵

1. 回虫卵 2. 鞭虫卵
3. 肝吸虫卵 4. 横川吸虫卵

第3節 珪藻化石分析

1. はじめに

珪藻は、10~500 μm ほどの珪酸質殻を持つ単細胞藻類で、殻の形や刻まれた模様などから多くの珪藻種が調べられ、現生の生態から特定環境を指標する珪藻種群が設定されている(小杉1988;安藤1990)。一般的に、珪藻の生育域は海水域から淡水域まで広範囲に及び、中には河川や沼地などの水成環境以外の陸地においても、わずかな水分が供給されるジメジメとした陸域環境(例えばコケの表面や湿った岩石の表面など)に生育する珪藻種が知られている。こうした珪藻群集の性質を利用して、堆積物中の珪藻化石群集の解析から、過去の堆積物の堆積環境について知ることができる。

ここでは、大菅波コショウズワリ遺跡の自然流路から採取された堆積物中の珪藻化石群集を調べ、堆積環境について検討した。

2. 試料と方法

試料は、NR1の断面から採取された土層堆積物4点である(第14表)。

各試料について以下の処理を行い、珪藻分析用プレパラートを作製した。

- (1) 湿潤重量約0.5~1.0gを取り出し、秤量した後、ピーカーに移して30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。(2) 反応終了後、水を加え1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。この作業を10回ほど繰り返した。(3) 懸濁残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで過量取り、カバーガラスに滴下し、乾燥させた。乾燥後は、マウントメディアで封入し、プレパラートを作製した。

分析No.	遺構/位置
1	NR1
3	
4	
5	

第14表 試料一覧表

作製したプレパラートを顕微鏡下400～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数した。珪藻殻は、完形と非完形(原則として半分程度残っている殻)に分けて計数し、完形殻の出現率として示した。さらに、試料の処理重量とプレパラート上の計数面積から堆積物1g当たりの殻数を計算した。また、保存状態の良い珪藻化石を選び、写真を図版1に載せた。なお、珪藻化石の少ない試料については、プレパラートの面積の2/3以上について同定・計数した。

3. 珪藻化石の環境指標種群

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉1988および安藤1990が設定し、千葉・澤井2014により再検討された環境指標種群に基づいた。なお、環境指標種群以外の珪藻種については、海水種は海水不定・不明種(?)として、海～汽水種は海～汽水不定・不明種(?)として、汽水種は汽水不定・不明種(?)として、淡水種は広布種(W)として、その他の種はまとめて不明種(?)として扱った。また、破片のため属レベルの同定にとどめた分類群は、その種群を不明(?)として扱った。以下に、小杉1988が設定した海水～汽水域における環境指標種群と、安藤1990が設定した淡水域における環境指標種群の概要を示す。

[外洋指標種群(A)]：塩分濃度が35パーミル以上の外洋水中を浮遊生活する種群である。

[内湾指標種群(B)]：塩分濃度が26～35パーミルの内湾水中を浮遊生活する種群である。

[海水藻場指標種群(C1)]：塩分濃度が12～35パーミルの水域の海藻や海草(アマモなど)に付着生活する種群である。

[海水砂質干潟指標種群(D1)]：塩分濃度が26～35パーミルの水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に付着生活する種群である。この生育場所には、ウミナナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活する。

[海水泥質干潟指標種群(E1)]：塩分濃度が12～30パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。この生育場所には、イボウミナナ主体の貝類相やカナなどの甲殻類相が見られる。

[汽水藻場指標種群(C2)]：塩分濃度が4～12パーミルの水域の海藻や海草に付着生活する種群である。

[汽水砂質干潟指標種群(D2)]：塩分濃度が5～26パーミルの水域の砂底(砂の表面や砂粒間)に付着生活する種群である。

[汽水泥質干潟指標種群(E2)]：塩分濃度が2～12パーミルの水域の泥底に付着生活する種群である。淡水の影響により、汽水化した塩性湿地に生活するものである。

[上流性河川指標種群(J)]：河川上流部の溪谷部に集中して出現する種群である。これらは、殻面全体で岩にぴったりと張り付いて生育しているため、流れによっては取り除かれてしまうことがない。

[中～下流性河川指標種群(K)]：河川の中～下流部、すなわち河川沿いで河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群である。これらの種には、柄またはさやで基物に付着し、体を水中に伸ばして生活する種が多い。

[最下流性河川指標種群(L)]：最下流部の三角州の部分に集中して出現する種群である。これらの種には、水中を浮遊しながら生育している種が多い。これは、河川が三角州地帯に入ると流速が遅くなり、浮遊生の種でも生育できるようになるためである。

[湖沼浮遊生指標種群(M)]：水深が約1.5m以上で、岸では水生植物が見られるが、水底には植物が生育していない湖沼に出現する種群である。

[湖沼沼沢湿地指標種群(N)]：湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優劣な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群である。

[沼沢湿地付着生指標種群(O)]: 水深1m内外で、一面に植物が繁殖している所および湿地において、付着の状態では優勢な出現が見られる種群である。

[高層湿原指標種群(P)]: 尾瀬ヶ原湿原や霧ヶ峰湿原のように、ミズゴケを主とした植物群落および泥炭層の発達が見られる場所に出現する種群である。

[陸域指標種群(Q)]: 上述の水域に対して、陸域を生息地として生活している種群である(陸生珪藻と呼ばれている)。

[陸生珪藻A群(Qa)]: 耐乾性の強い特定のグループである。

[陸生珪藻B群(Qb)]: A群に随伴し、湿った環境や水中にも生育する種群である。

4. 結 果

堆積物から検出された珪藻化石は、淡水種が3分類群3属1種であった(第15表)。環境指標種群は検出されなかった。珪藻化石の産出数が少ないため、珪藻分布図は作成していない。

以下では、試料における珪藻化石の特徴とその堆積環境について述べる。

分析No.5

殻が半分以上残存している珪藻化石は検出されなかった。珪藻化石が検出されなかったため、化石群集から復元される堆積環境は不明である。

No.	分類群	種群	種群	1	3	4	5
1	<i>Eunotia</i> spp.	25	?	7	1		
2	<i>Pinnularia</i> spp.	25	?	3			
3	<i>Stauroneis acuta</i>	24	W	1			
4	Unknown	26	?			1	
<hr/>							
	広布種	24	W	1			
	淡水不定・不明種	25	?	10	1		
	その他不明種	26	?			1	
<hr/>							
	海水種						
	海～汽水種						
	汽水種						
	淡水種						
	合 計			11	1		
	完形殻の出現率(%)			36.4	50.0	-	-
	堆積物1g中の殻数(個)			4.4E+03	8.5E+02	0.0E+00	0.0E+00

第15表 堆積物中の珪藻化石産出表(種群は、千葉・澤井(2014)による)

分析No.4

殻が半分以上残存している珪藻化石は検出されなかった。珪藻化石が検出されなかったため、化石群集から復元される堆積環境は不明である。

分析No.3

堆積物1g中の珪藻殻数は 8.5×10^2 個、完形殻の出現率は50.0%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群は検出されなかった。

珪藻化石の産出数が少なすぎるため、珪藻化石群集から復元される堆積環境は不明である。

分析No.1

堆積物1g中の珪藻殻数は 4.4×10^3 個、完形殻の出現率は36.4%である。淡水種のみが検出された。堆積物中の珪藻殻数は非常に少ない。環境指標種群は検出されなかった。

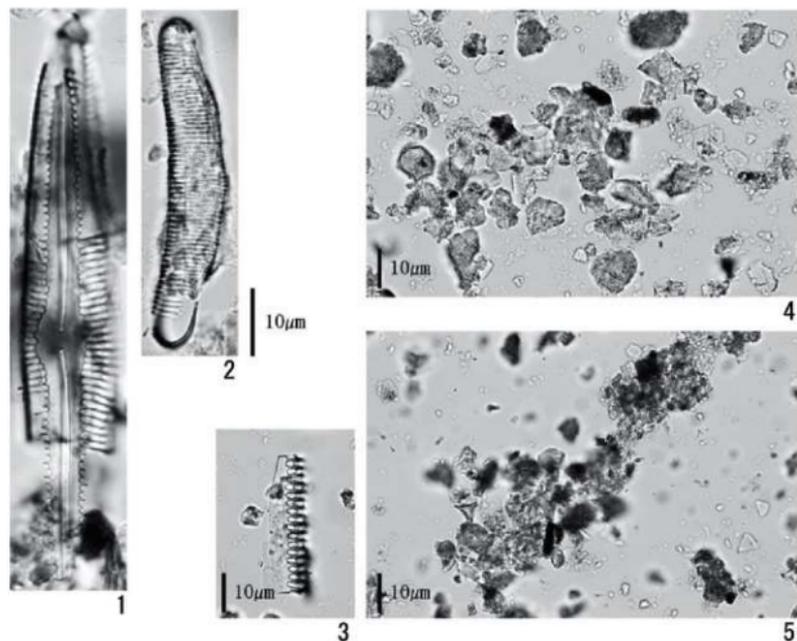
珪藻化石の産出数が少なすぎるため、珪藻化石群集から復元される堆積環境は不明である。

5. 考 察

珪藻化石がほとんど検出されなかったため、堆積環境については不明だが、淡水種のみが検出されたため、海域の影響を受けない堆積環境であったと思われる。

引用文献

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」東北地理, 42, 73-88.
 千葉 崇・澤井裕紀 2014 「環境指標種群の再検討と更新」Diatom, 30, 7-30.
 小杉正人 1988 「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」[第四紀研究, 27] 1-20. 日本第四期学会



図版3 珪藻プレパラートと珪藻化石の顕微鏡写真

1. *Pinnularia* spp.(No.1) 2. *Eunotia* spp.(No.2) 3. 珪藻化石の破片(No.3) 4. 不明粒子(No.4) 5. 不明粒子(No.5)

第4節 樹種同定

1. はじめに

石川県加賀市の大昔波コショウズワリ遺跡から出土した木製品の樹種同定を行った。

2. 試料と方法

試料は、大昔波コショウズワリ遺跡から出土した木製品39点である。各試料の時期については、第16表に示した。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

樹種同定では、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柃目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行った。

3. 結果

同定の結果、針葉樹ではモミ属とマツ属複雑維管束亜属、スギ、アスナロの4分類群、広葉樹ではサクラ属とケヤキ、クリ、スダジイ、コナラ属クスギ節(以下、クスギ節)、カエデ属?、トチノキの7

分類群の、計11分類群がみられた。アスナロとクリが12点で最も多く、マツ属複雑管束亜属が5点、スギとサクラ属が各2点、モミ属とケヤキ、スタジイ、クスギ節、カエデ属?、トチノキが各1点であった。同定結果を第16表に、一覧を第17表に示す。

樹種	古墳末 ～古代		古墳後期 ～中世		中世		中・近世		近世					近世 以降	合計					
	器種	柱	柱 礎	礎 敷	柱	透 透 透	紙	木 鏡	下 駄	結 核	底 敷	納約 透透透 透透透	納約 透透透	檜? 松?		柱	榎 木 製品	紙	不明	榎
モミ属					1															1
マツ属複雑管束亜属							1					1								1
スギ																				5
アスナロ									1	1	4	3		1			1		1	12
サクラ属			2																	2
ケヤキ																				1
クリ	4	2	2		1										3					12
スタジイ			1																	1
コナラ属クスギ節					1															1
カエデ属?												1								1
トチノキ						1														1
合計	4	5	2	3	1	1	1	1	1	4	4	1	1	1	3	3	2	1	1	39

第16表 大管波コショウスワリ遺跡出土木製品の樹種同定結果

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) モミ属 *Abies* マツ科 図版4 1a-1c(No.0269)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ1～8列となる。分野壁孔は小型のスギ型で、1分野に2～4個みられる。また、放射組織の末端壁は数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(2) マツ属複雑管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 図版4 2a-2c(No.0238)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複雑管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

(3) スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don ヒノキ科 図版4 3a-3c(No.0253)

道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ2～15列となる。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、1分野に普通2個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(4) アスナロ *Thujaopsis dolabrata* (L.f.) Siebold et Zucc. ヒノキ科 図版4 4a-4c(No.0261)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行はやや急である。放射組織は単列で、高さ2～13列となる。分野壁孔は小型のヒノキ～スギ型で、1分野に2～4個みられる。

アスナロは温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。針葉樹の中では比較的軽軟で、切削等の加工

は比較的容易である。また、精油が多く、耐朽性に優れている。

(5) サクラ属(広義) *Prunus* s.l.バラ科 図版4 5a-5c(No.0233)

小型の道管が単独ないし数個、放射方向または斜め方向に複合してやや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1～5列幅となる。

広義のサクラ属には、モモ属とスモモ属、アンズ属、サクラ属、ウワミズザクラ属、バクチノキ属がある。樹種同定ではモモ属とバクチノキ属以外は他のサクラ属と識別できないため、広義のサクラ属とはモモ属とバクチノキ属を除くサクラ属を指す。

(6) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版4、5 6a-6c(No.0239)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では急に径を減じた道管が多数複合し、接線～斜線方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1列が方形となる異性で、幅1～5列となる。放射組織の上下端には、結晶が認められる。

ケヤキは温帯から暖帯にかけての肥沃な谷間などに生育する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬いが、切削などの加工はそれほど困難ではない。

(7) クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 図版5 7a-7c(No.0242)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では徐々に径を減じる道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列である。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

(8) スタジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科 図版5 8a-8c(No.0234)

年輪のはじめに大型の道管が断続的に並び、晩材部では径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列となる。

スタジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難ではない。

(9) コナラ属クスギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版5 9a-9c(No.0264)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では急に径を減じた厚壁で丸い道管が、放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クスギ節にはクスギとアバマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(10) カエデ属? *Acer*? ムクロジ科 図版5 10b-10c(No.0241-1)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや疎らに散在する散孔材であるが、横断面の採取が行えなかった。木部繊維の壁の厚さの違いで、木口面に雲紋状の文様がみられる。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1～6列となる。

カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

(11) トチノキ *Aesculus turbinata* Blume ムクロジ科 図版5 11a-11c(No.0271)

小型の道管が単独ないし2～3個複合し、やや密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、単列である。また、放射組織は層階状に配列する。

トチノキの分布の北限は北海道南部で、九州まで広く分布するが、東北に多くみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや軽軟で、切削加工は極めて容易である。

4. 考 察

古墳時代末～古代の柱および柱根はサクラ属とクリ、スダジイ、礎板はクリであった。いずれも堅硬な部類に属する樹種である(伊東ほか2011)。石川県の丘陵付近や山地の遺跡で確認されている古代の柱では、クリがあり(久田2012)、傾向は概ね一致する。

古墳時代後期～中世の柱は、モミ属とクリ、クスギ節であった。モミ属は真つすぐで加工性が良く、耐朽性が高い樹種である。また、クスギ節はクリと同様に、堅硬な樹種である(久田2012)。

中世の漆器碗は、トチノキであった。トチノキは軽軟で加工性の良い樹種であり、漆器の木胎としても多く利用される樹種である(伊東ほか2011)。石川県で確認されている中世の漆器碗にも、トチノキが利用されている(伊東・山田編2012)。

中・近世の杭は、マツ属複雑維管束亜属であった。マツ属複雑維管束亜属は真つすぐで加工性が良く、耐朽性の高い樹種である(伊東ほか2011)。

近世の木鍾と下駄、結桶、柄杓柄、不明木製品はいずれもアスナロで、底板はマツ属複雑維管束亜属とアスナロ、栓?はマツ属複雑維管束亜属であった。アスナロは真つすぐで加工性が良く、耐朽性に優れている樹種である(伊東ほか2011)。これらの木製品には、耐朽性が高いマツ属複雑維管束亜属とアスナロが選択的に利用されていた可能性が考えられる。

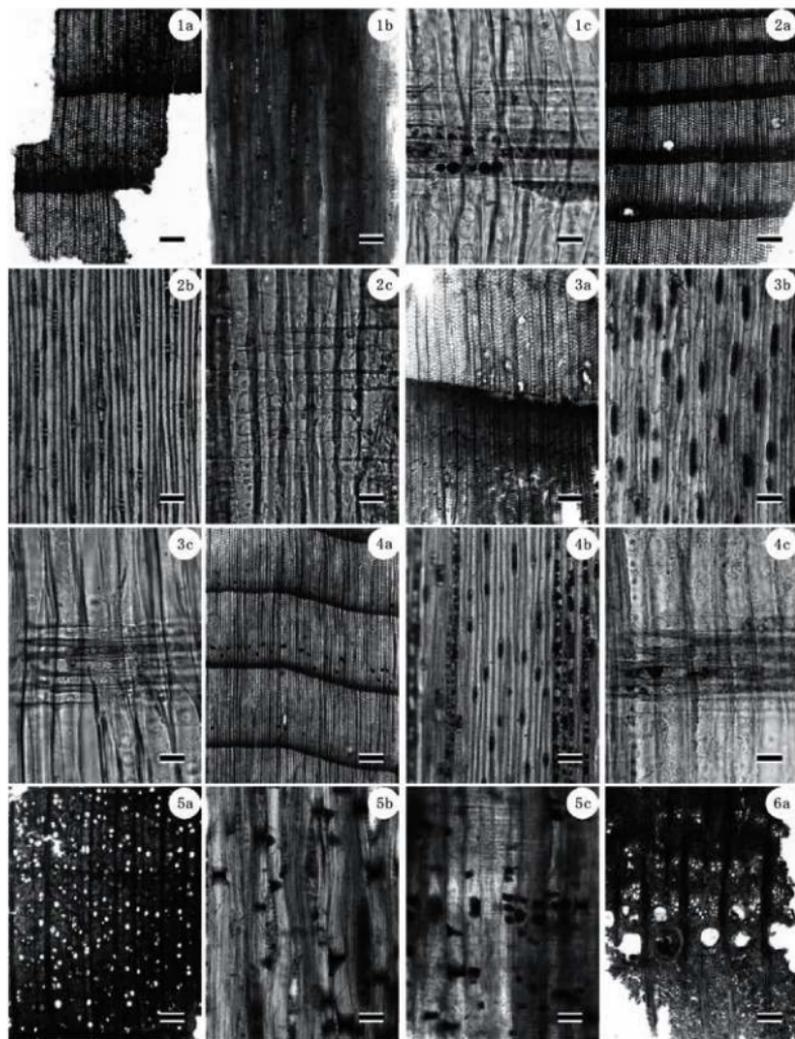
近世の柱根はクリ、杭はマツ属複雑維管束亜属とケヤキであった。ケヤキはクリと同じく堅硬だが、加工性が良い樹種である(伊東ほか2012)。石川県で確認されている古代以降の柱では、クリの利用頻度が高くなると指摘されており(久田2012)、傾向は一致する。

柄杓(漆器碗)は、カエデ属?であった。カエデ属は堅硬な樹種であり、漆器の木胎としても多く利用される樹種である(伊東ほか2011)。石川県で確認されている中世頃の漆器碗では、ケヤキ、ブナ属、トチノキが多くみられるが、カエデ属も確認されている。

近世以降の板は、マツ属複雑維管束亜属であった。

引用文献

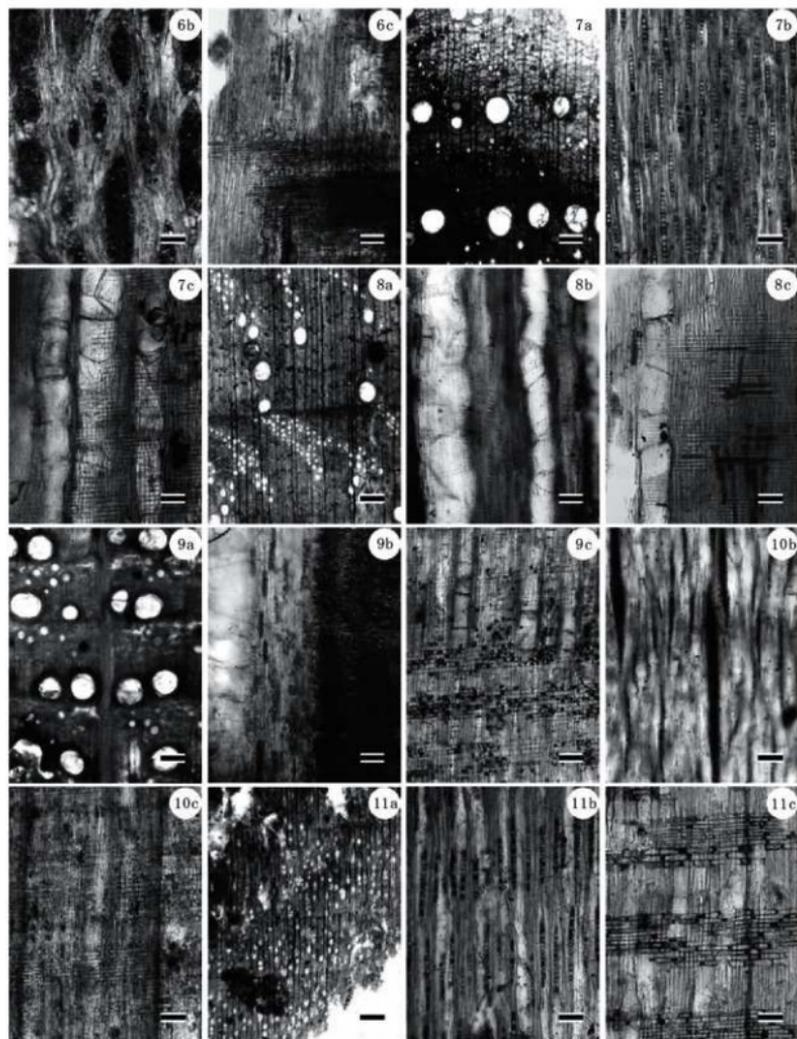
- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 2011 『日本有用樹木誌』海青社
 伊東隆夫・山田昌久編 2012 『木の考古学—出土木製品用材データベース—』海青社
 久田正弘 2012 『中部日本海側—福井県・石川県・富山県・新潟県—』[木の考古学—出土木製品用材データベース—]
 海青社 210-223



図版4 大管波コショウズワリ遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(1)

1a-1c. モミ属(No.0269)、2a-2c. マツ属複雑管束亜属(No.0238)、3a-3c. スギ(No.0253)、4a-4c. アスナロ(No.0261)、
5a-5c. サクラ属(No.0233)、6a. ケヤキ(No.0239)

a: 横断面(スケール=250 μ m)、b: 接線断面(スケール=100 μ m)、c: 放射断面(スケール=1-4: 25 μ m・5: 100 μ m)



図版5 大管波コショウズワリ遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真(2)

6b-6c. ケヤキ(No.0239)、7a-7c. クリ(No.0242)、8a-8c. スタジイ(No.0234)、9a-9c. コナラ属クスギ節(No.0264)、
10b-10c. カエデ属? (No.0241-1)、11a-11c. トチノキ(No.0271)

a: 横断面(スケール=250 μ m)、b: 接線断面(スケール=100 μ m)、c: 放射断面(スケール=100 μ m)

試料No.	調査区	グリッド	遺構	器種	樹種	木取り	時期
0233	2区	C2gr	SB2-P26	柱根	サクラ属	芯持丸木	古墳時代末～古代
0234	2区	D1gr	SB1-P67	柱根	スダジイ	芯持丸木	古墳時代末～古代
0235	2区	C2gr	SB2-P27	柱根	サクラ属	芯持丸木	古墳時代末～古代
0236	2区	E4gr	NR1南西	下駄	アスナロ	板目	近世
0237	2区	E9gr	SD11	杭	マツ属複雑管束系属	芯去削出	中・近世
0238	2区	E5gr	NR1北東	杭	マツ属複雑管束系属	芯持丸木	近世
0239	2区	F5gr	NR1南西	杭	ケヤキ	板目	近世
0240	2区	F6gr	NR1北東	木鐘	アスナロ	芯去削出	近世
0241-1	2区	F4gr	SK6	柄杓(漆器柄)	カエデ属?	横木取り	近世
0241-2	2区	F4gr	SK6	柄杓柄	アスナロ	芯去削出	近世
0242	2区	E2gr	P4	柱根	クリ	割れ	近世
0243	2区	B3gr	SB5-P62	礎板	クリ	割れ	古墳時代末～古代
0244	2区	F2gr	P12	柱根	クリ	割れ	近世
0245	2区	F2gr	P13	柱根	クリ	芯去削出	近世
0246	2区	F4gr	SK6	栓?	マツ属複雑管束系属	芯持丸木	近世
0247	2区	F3gr	SK7	板状木製品	アスナロ	板目	近世
0248	2区	E6gr	SK8上面	板状木製品	スギ	板目	近世
0249	2区	B2gr	SB5-P69礎板下	礎板	クリ	板目	古墳時代末～古代
0250	2区	C2gr	P51	柱根	クリ	芯持丸木	古墳時代末～古代
0251	2区	B2gr	SB5-P59	柱根	クリ	芯持丸木	古墳時代末～古代
0252	2区	E3gr	SK2北半上位	底板	マツ属複雑管束系属	板目	近世
0253	2区	E3gr	SK2北半上位	板状木製品	スギ	板目	近世
0254	2区	E3gr	SK2	不明	アスナロ	みかん割り	近世
0255	2区	E3gr	SK2	底板	アスナロ	板目	近世
0256	2区	D3gr	カクラン10	底板	アスナロ	板目	近世
0257	2区	E3gr	SK2北半上位	底板	アスナロ	板目	近世
0258	2区	F4gr	SK6 No.13	結核	アスナロ	板目	近世
0259	2区	F4gr	SK6 No.8	結核	アスナロ	板目	近世
0260	2区	F4gr	SK6 No.18	結核	アスナロ	板目	近世
0261	2区	F4gr	SK6 No.21の下	結核	アスナロ	芯去削出	近世
0263	1区	C7gr	SB02-P05	柱	クリ	板目	古墳時代末～古代
0264	1区	B8gr	P05	柱	コナラ属クヌギ節	芯持丸木	古墳時代後期～中世
0265	1区	B3gr	P24	柱	クリ	割れ	古墳時代後期～中世
0266	1区	C7gr	SB02-P07	柱	クリ	芯持丸木	古墳時代末～古代
0267	1区	B8gr	SB04-P01	柱	クリ	割れ	古墳時代末～古代
0268	1区	A3gr	SD04	板	マツ属複雑管束系属	板目	近世以降
0269	1区	A2gr	P15	柱	モミ属	芯持丸木	古墳時代後期～中世
0270	1区	B7gr	SB04-P04	柱	クリ	板目	古墳時代末～古代
0271	1区		排土	漆器柄	トチノキ	横木取り	中世

第17表 大管波コショウスワリ遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧

第5節 石質同定

1. はじめに

大昔波コショウズワリ遺跡は、石川県加賀市北部の橋立丘陵の裾から平野部にかけて所在する。調査では、尖頭器や剥片などの石製品が出土した。ここでは、出土した石製品について、肉眼観察による石材同定を行った。

2. 試料と方法

石材同定を行った石製品は、大昔波コショウズワリ遺跡において出土した石製品46点である(第18表)。石材同定は、主に肉眼により行い、マイクロスコープを用いて石材の接写撮影を行った。

3. 結果

第18表に、肉眼による石製品の石材同定を行った結果を示す。なお、各石材の記載は、表面観察による色調や構成鉱物、岩石組織あるいは破断面の特徴等について行った。

以下に、代表的な石材の特徴について記載した。

1. 頁岩(図版6-1) 白色の風化が著しい岩石である。破断面では黒色を呈する。
2. 泥岩(図版6-2) 黒灰色の硬質の泥質の岩石である。
3. 砂岩(図版6-3) 灰色の細砂から構成される岩石である。
4. 凝灰岩(図版6-4) 灰白色の砂質～砂礫混じり～砂混じりシルト質～軽石混じりなどからなる。
5. ガラス質安山岩(図版6-5) 黒灰色の緻密な岩石である。縞状を呈するものもある。
6. 安山岩(図版6-6) 白色～灰色の斑晶質であるが、細粒斑晶質でややガラス質のものもある。
7. 流紋岩(図版6-7) 灰白色の流理構造のある岩石である。
8. 黒曜石(図版6-8) 淡黒色のガラス質で縞模様が見せられる。被熱痕があり濁った非ガラス質のものもある。
9. 透閃石(図版6-9) 淡白色の硬質の不均質な岩石である。
10. メノウ(図版6-10) 黄色の半透明のガラス質鉱物である。

4. 考察

第19表に、各石製品とその石材についてまとめた。坂本はか1967の20万分の1地質図では、周辺では第四紀更新世中部洪積層および未区分洪積層や下部更新層(凡例tdとdl)、新第三紀中新世(東別所階)砂岩および礫岩(凡例YsとYc)、礫岩および礫岩砂岩泥岩互層(凡例Kc)、安山岩溶岩および安山岩凝灰角礫岩(凡例Ia)が分布する。

石材同定を行った石製品では、石材環境として凝灰角礫岩や安山岩が在地石材と言えるが、多くの石製品が流通品であることを考えると他地域の石材である可能性がある。

引用文献

- 鹿野和彦・原山 智・山本博文・竹内 誠・宇都浩三・駒沢正夫・広島俊男・須藤定久 1999 『20万分の1地質図「金沢」地質調査所』
- 坂本 亨・今井 功・角 靖夫・野沢 保・盛谷 智之 1967 『20万分の1地質図「七尾及び富山」地質調査所』
- 高田祐一・日本遺跡学会 2019 『産業発展と石切場』285p. 或光祥出版

図面番号	管理番号	遺物ID (MA番号)	地区	グリッド	出土遺構等	資料種別1 (表材)	器種	色調	岩石名	備考
1	0121	MA0000013909	Z5E	F6南東	NR1	11006	打製石片	灰白色	凝灰岩	砂礫混じりシルト質
2	0122	MA0000013910	Z5E	F5南東	NR1	11006	打製石片	灰色	安山岩	珪晶質
3	0123	MA0000013911	Z5E	C4南東	NR1	11006	石鏃	ややピンク味の灰色	頁岩	
4	0124	MA0000013912	Z5E	F5南東	NR1	11006	石鏃	黒灰色	ガラス質安山岩	結状
5	0125	MA0000013913	Z5E	F5南東	NR1	11006	石鏃	白色	頁岩	風化著しい
6	0126	MA0000013914	Z5E	F5南東	NR1	11006	石鏃	黄色	ガラス質安山岩	
7	0127	MA0000013915	Z5E	F6南西	NR1	11006	石鏃	白色	頁岩	
8	0128	MA0000013916	Z5E	F6南西	NR1	11006	石鏃	淡褐色	凝灰岩	文様シルト質
9	0129	MA0000013917	Z5E	D4北東	NR1 横土層上	11006	石鏃	やや赤み味	凝灰岩	崩片含む
10	0130	MA0000013918	Z5E	E4北東	NR1	11006	二次加工のある割片	白色	頁岩	面状、風化著しい
11	0131	MA0000013919	Z5E	F5南西	NR1 横出面	11006	割片	黒色	ガラス質安山岩	
12	0132	MA0000013920	Z5E	F5	遺構検出	11006	割片	淡青灰色	頁岩	
13	0133	MA0000013921	Z5E	D4南東	NR1	11006	割片	淡黒色	黒曜石	縁あり
14	0134	MA0000013922	Z5E	F5南東	NR1	11006	割片	淡黒色	黒曜石	被蝕痕
15	0135	MA0000013923	Z5E	F6	遺構検出 NR1	11006	二次加工のある割片	淡黒色	黒曜石	
16	0136	MA0000013924	Z5E	F6南東	NR1	11006	割片	淡黒色	黒曜石	
17	0137	MA0000013925	Z5E	C2南西	鞍部遺構検出	11006	二次加工のある割片	灰白色	流紋岩	流理
18	0138	MA0000013926	Z5E	E1	埋戻し	11006	埋戻し石器	淡黒色	黒曜石	
19	0139	MA0000013927	Z5E	E3	埋戻し10	11006	方形火鉢	灰白色	凝灰岩	砂礫質、軽石混じり
20	0140	MA0000013928	Z5E	E3	埋戻し10	11006	方形火鉢	白色	頁岩	風化著しい
21	0141	MA0000013929	Z5E	F5南西	NR1	11006	石鏃	灰色	凝灰岩	砂礫混じり、珪晶粒状
22	0142	MA0000013930	Z5E	D9	SK15南平下位	11006	砥石	黄灰色	凝灰岩	砂礫混じりシルト質
23	0143	MA0000013931	Z5E	F4	表土	11006	砥石	灰色	砂岩	細粒
24	0144	MA0000013939	Z5E	F4	表土	11006	磨製石片	黄灰色	泥岩	硬質
25	0145	MA0000013932	Z5E	F6南東	NR1 Y1	11006	臼玉	黄色	頁岩	
26	0146	MA0000013933	Z5E	F6北東	NR1	11006	礫石	やや橙灰色	頁岩	
27	0211	MA0000013772	1E	A4	SD05	11006	玉石核	緑灰色	頁岩	
28	0212	MA0000013773	1E	A3	下層 惣舎層	11006	尖頭器	白色	頁岩	風化著しい
29	0213	MA0000013774	1E	B6東	SD09	11006	不明	灰白色	凝灰岩	砂質
30	0214	MA0000013775	1E	B5	埋戻し 最下層	11006	割片	白色	安山岩	細粒珪晶質、ややガラス質
31	0215	MA0000013776	1E	B5	埋戻し 最下層	11006	割片	白色	頁岩	風化著しい
32	0216	MA0000013777	1E	B5	埋戻し 最下層	11006	割片	白色	頁岩	風化著しい
33	0217	MA0000013778	1E	A5	埋戻し 最下層	11006	割片	白色	頁岩	風化著しい
34	0218	MA0000013779	1E		表土除去 排土内	11006	打製石片	白色	頁岩	
35	0219	MA0000013780	1E	C11	横出面	11006	打製石片	緑色	安山岩	珪晶質
36	0220	MA0000013781	1E	B5	横出面	11006	石鏃	黄灰色	ガラス質安山岩	結状
37	0221	MA0000013782	1E		排土	11006	割片	黄色	メノウ	半透明、ガラス質鉱物
38	0222	MA0000013783	1E	B9	南壁	11006	割片	淡黒色	黒曜石	
39	0223	MA0000013784	1E		横出面	11006	割片	淡黒色	黒曜石	
40	0224	MA0000013785	1E	A4	下層 壁 排水	11006	割片	灰白色	頁岩	風化著しい
41	0225	MA0000013786	1E	A3	横出面 土器1	11006	磨製石片	緑色	凝灰岩	細粒質
42	0226	MA0000013787	1E	A5	埋戻し 最下層	11006	磨製石片	淡白色	流閃石	不均質
43	0227	MA0000013788	1E	D9	北壁 溝	11006	磨製石片	黄白色	凝灰岩	シルト質
44	0228	MA0000013789	1E		東側通路 2番目の水田	11006	石鏃	緑灰色	凝灰岩	やや粗粒質
45	0229	MA0000013790	1E	D10東	SC08上層	11006	石鏃	黄白色	凝灰岩	軽石質
46	0230	MA0000013791	1E	D10東	SC08上層	11006	石鏃	緑色	凝灰岩	粗粒質、軽石含む

第18表 大波波コショウズワリ遺跡出土石製品の石質同定(肉眼観察)一覧表

大分類	中分類	岩石名	二次加工のある割片													合計			
			臼玉	礫石	玉石核	石鏃	石鏃	石鏃	尖頭器	割片	埋戻し石器	打製石片	磨製石片	砥石	方形火鉢		不明		
埋戻し層	砂質層	頁岩	1	1	1		3	1	5		1	1			1	15			
		泥岩										1				1			
		砂岩												1		1			
火成岩類	火山砕岩質	凝灰岩				1	5					1	2	1	1	12			
		ガラス質安山岩							3	1						4			
	火山岩	安山岩								1			2			3			
		流紋岩										1				1			
		黒曜石								5	1	1				7			
深成岩	流閃石											1		1					
その他	メノウ								1						1				
総計			1	1	1	1	1	5	6	1	13	1	3	4	4	2	2	1	46

第19表 石製品と石材の関係



図版6 石製品石材のマイクロスコープ写真(scale: 1mm)

1. 頁岩(分析 No.3) 2. 泥岩(分析 No.24) 3. 砂岩(分析 No.23) 4. 凝灰岩(分析 No.19)
 5. ガラス質安山岩(分析 No.11) 6. 安山岩(分析 No.2) 7. 流紋岩(分析 No.17)
 8. 黒曜石(分析 No.13) 9. 透閃石(分析 No.42) 10. メノウ(分析 No.37)



第62図 遺跡周辺の地質図

第6節 ガラス質安山岩製石器の産地推定

1. はじめに

加賀市大菅波町地内に所在する大菅波コショウズワリ遺跡より出土したガラス質安山岩製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、遺跡より出土したガラス質安山岩製石器4点である(第20表)。試料はいずれも風化層に覆われている。測定は原則非破壊で行ったが、分析No.3の剥片のみ、サンドブラストを用いて風化層を一部除去し、新鮮面も測定した。

分析No.	図庫番号	管理番号	遺物ID(MA番号)	地区	グリッド	出土遺構等	器種	色調	備考	測定位置
1	4	0124	MA0000013912	2区	F5南東	NR1	石皿	黒灰色	結状	風化面
2	6	0126	MA0000013914	2区	F5南西	NR1	石皿	黒色	被熱痕	風化面
3	11	0131	MA0000013919	2区	F5南西	NR1 検出面	剥片	黒色		風化面および新鮮面
4	36	0220	MA0000013918	1区	B5	検出面	石楯	黒灰色	結状	風化面

第20表 分析対象のガラス質安山岩製石器

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA 1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に

設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

分析方法は、黒曜石産地推定法として用いられている蛍光X線分析によるX線強度を用いた判別図法(望月1999など)を用い、分析対象をガラス質安山岩に置き換えて適用した。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps: count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) $Rb\text{分率} = Rb\text{強度} \times 100 / (Rb\text{強度} + Sr\text{強度} + Y\text{強度} + Zr\text{強度})$
- 2) $Sr\text{分率} = Sr\text{強度} \times 100 / (Rb\text{強度} + Sr\text{強度} + Y\text{強度} + Zr\text{強度})$
- 3) $Mn\text{強度} \times 100 / Fe\text{強度}$
- 4) $\log(Fe\text{強度}/K\text{強度})$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸 $\log(Fe\text{強度}/K\text{強度})$ の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土物のデータを照合して、産地を推定する。原石試料は、採取原石を削って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第21表に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を示す。

3. 分析結果

第22表に石器の測定値および算出された指標値を、第63図にガラス質安山岩原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

風化面を除去した分析No.3の新鮮面(第22表、第63図中では分析No.3と表記)の測定では、合致する判別群がなく、産地不明であった。

風化面を測定した分析No.1、2、4の3点については、分析No.1は湯ヶ峰群(岐阜県、下呂エリア)、分析No.2は春日山群(奈良県、二上山エリア)、分析No.4は讃岐エリア(香川県)に比較的近い位置にプロットされた。3点の石器は、これらの判別群に属する可能性がある。ただし、新鮮面を測定した結果、合致する判別群がなかった分析No.3も、風化面の測定では八風山群(長野県、佐久エリア)の比較的近い位置にプロットされており、風化面の測定での産地推定は困難といえる。

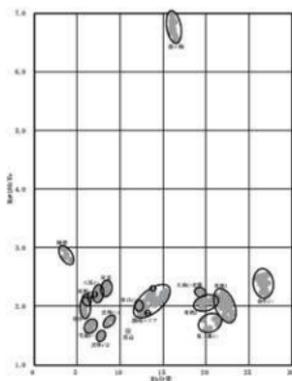
分析No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn×100 Fe	Sr分率	$\log \frac{Fe}{K}$	判別群	エリア	分析No.
1	225.3	116.1	1533.3	584.8	1620.4	238.1	1048.6	16.75	7.57	46.40	0.63	?	不明	1
2	185.8	125.4	6647.1	370.3	1285.4	201.2	953.4	13.18	1.89	45.74	1.55	?	不明	2
3	223.8	215.5	9905.7	351.7	2610.4	292.5	1761.6	7.01	2.20	52.04	1.64	—	—	3
3'	190.0	218.2	9981.4	327.7	2594.4	290.5	1786.5	6.55	2.19	51.92	1.72	?	不明	3'
4	213.5	149.5	6474.7	505.4	1304.4	267.0	1577.5	13.83	2.31	35.70	1.48	?	不明	4

※1～4は風化面を測定、3は新鮮面を測定

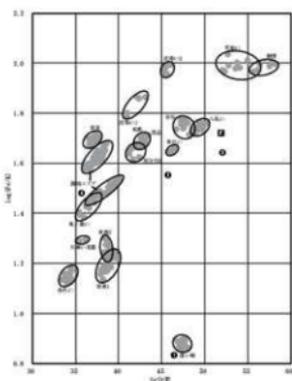
第22表 測定値および産地推定結果

郡道府県	エリア	判別群	原石採取地(試料点数)
福島	会津	柳津	只見川支流(8)
群馬	みなかみ	武尊山	武尊山(1)
	下仁田	安楽山	安楽山(5)
長野	佐久	八風山	香波(9)、八風山下(10)、八風山(9)
岐阜	下呂	湯ヶ峰	大林(10)、山の西口(3)、火口そば北寄り尾根へ(3)、山の東口(3)、大橋寺印地中央部(4)、大橋寺印地(15)、西大橋寺(2)、香波(15)
	能登	富来	春日山
奈良	二上山	春日山	春日山みかんの門(10)、鶴山(8)
香川	讃岐	国分台1	自衛隊演習場付近(2)、神谷神社付近(2)、高倉神社(1)、薬分台下みかん畑(4)、瀧光寺山南東麓(1)
		国分台2	神谷神社付近(3)、高倉神社(4)
		国分台3	自衛隊演習場付近(1)、神谷神社付近(2)、高倉神社(17)、薬分台下みかん畑(1)、瀧光寺山南東麓(25)、出雲神社(5)
		赤子谷	赤子谷跡1地点(5)、赤子谷跡2地点(5)
		法印谷	法印谷(10)
		金山1	北峰道路脇(10)、金山南麓(31)、金山北東部(27)
		金山2	北峰道路脇(10)、金山南麓(31)、金山北東部(27)
		城山	城山(5)、龍山(5)、神谷神社付近(4)、出雲神社(23)、奥池付近(11)
		東東1	神谷神社付近(3)、出雲神社(2)、奥池付近(5)
		双子山	双子山南麓(10)
		香色山	佐伯神社付近(30)、宮ヶ尾古墳(1)
		大森山北麓	宮ヶ尾古墳(2)
		香色	香色(12)
		安楽	安楽(12)
佐賀	多久	鬼ノ島山	天ヶ瀬ダム下みかん畑(8)
宮崎	高千穂	黒色	黒色(1)

第21表 ガラス質安山岩産地の判別群



第63図 ガラス質安山岩産地推定判別図(1)



第63図 ガラス質安山岩産地推定判別図(2)

4. おわりに

大菅波コショウズワリ遺跡より出土したガラス質安山岩製石器4点について、蛍光X線分析を用いた判別図法による産地推定を行ったが、いずれも産地不明だった。

引用文献

望月明彦 1999 「上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡編—』172-179 大和市教育局

第7節 黒曜石製石器の産地推定

1. はじめに

加賀市大菅波町地内に所在する大菅波コショウズワリ遺跡より出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、遺跡より出土した黒曜石製石器8点である(第23表)。試料は、測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の洗浄を行った。

分析No.	図説番号	管理番号	遺物ID (MA番号)	地区	グリッド	出土遺構等	器種	色調	備考
1	13	0130	MA0000013921	25K	D4南東	NR1	剥片	淡黒色	縁あり
2	14	0134	MA0000013922	25K	F5南東	NR1	剥片	淡黒色	被熱痕
3	15	0135	MA0000013923	25K	F6	遺構検出 NR1	二次加工のある剥片	淡黒色	
4	16	0136	MA0000013924	25K	F6南東	NR1	剥片	淡黒色	
5	16	0136	MA0000013924	25K	F6南東	NR1	剥片	淡黒色	
6	18	0138	MA0000013926	25K	E1	覆土1	梗形石器	淡黒色	
7	36	0222	MA0000013783	15K	B9	甕壁	剥片	淡黒色	
8	39	0223	MA0000013784	15K		検出層	剥片	淡黒色	

第23表 分析対象の黒曜石製石器

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000 μ A、試料室内雰囲気は真空中に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月1999など)。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps: count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

1) $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$

2) $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$

3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$

4) $\log(Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度 \times 100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸 $\log(Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、 $\log(Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$ の値が減少する(望月1999)。試料の測定面には、なるべく平滑面を選んだ。

原石試料は、採取原石を削って新鮮面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第24表に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を示す。

3. 分析結果

第25表に石器の測定値および算出した指標値を、第64図に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

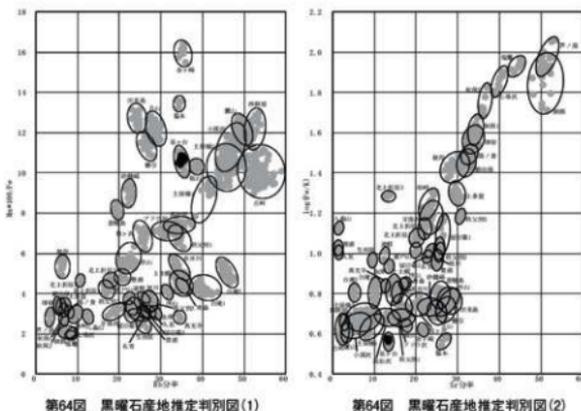
分析の結果、7点が星ヶ台群(長野県、諏訪エリア)の範囲にプロットされた。また、分析No.2は、

製造地域	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43)、八号沢(15)
		白滝2	7の沢(15)、22(2)、秋田(10)、10号沢(11)、アジサイの湯(10)
	赤井川	赤井川	赤石山山頂、八号沢、黒曜の沢、横加林道(36)
	上士幌	上士幌	十勝三股(4)、タウシュベツ川右岸(42)、タウシュベツ川左岸(10)、十三ノ沢(32)
		上士幌	上士幌(5)
	蘆川	蘆川	所山(5)
		蘆川	所山(5)
	豊浦	豊浦	豊浦(10)
	旭川	旭川	近文台(8)、南台(2)
	名寄	名寄	忠烈寺川(19)
	株別	株別1	中山(86)
		株別2	中山(86)
	湯川	湯川	社名川河床(2)
		湯川	仁田川河床(10)
	留辺蘆	留辺蘆1	ケシマツ川河床(9)
留辺蘆2		留辺蘆(9)	
網走	網走	網走市富スキー場(9)、阿寒川右岸(2)、阿寒川左岸(6)	
	網走	網走市富スキー場(9)、阿寒川右岸(2)、阿寒川左岸(6)	
青森	青森	出来島海岸(15)、観ヶ丘(10)	
	青森	八森山(7)、八森山公園(8)	
秋田	青森	天田内川(6)	
	男鹿	金ヶ崎 金ヶ崎海岸(10)	
岩手	男鹿	釜本 釜本海岸(4)	
	北上川	北上折原2 北上川(9)、真城(33)	
宮城	北上川	北上折原3	
	宮城	涌ノ倉 涌ノ倉(40)	
仙台	色麻	横岸 横岸(40)	
	仙台	秋保1 秋保2 土蔵(18)	
山形	塩竈	塩竈(10)	
	山形	月山 月山丘前(24)、大蔵沢(10)	
新潟	湯沢	湯沢 湯沢(10)	
	湯沢	湯沢 湯沢(10)	
栃木	湯沢	湯沢(10)	
	湯沢	湯沢(10)	
長野	高橋山	七尋沢(3)、宮川(3)、結持沢(3)	
	高橋山	西新屋 美奈パーライト土砂集積場(30)	
和歌山	高橋山	廣山(14)、東原(54)	
	高橋山	小深沢 小深沢(42)	
和歌山	高橋山	土屋橋1 土屋橋西(10)	
	和歌山	土屋橋2 新和トンネル北(20)、土屋橋西(58)、土屋橋西(1)	
和歌山	和歌山	吉神 和和トンネル上(28)、吉神(38)、和和トンネル(28)	
	和歌山	ブドウ沢(20)	
和歌山	和歌山	熊ヶ沢下(20)	
	和歌山	高松沢 高松沢(19)	
和歌山	和歌山	屋ヶ台 屋ヶ台(35)、屋ヶ台(20)	
	和歌山	冷山 冷山(20)、夏草峠(20)、夏草峠(20)	
神奈川	和歌山	芦ノ浦 芦ノ浦(20)	
	神奈川	相模 相模(51)	
静岡	神奈川	御油 御油(20)	
	神奈川	上野原 上野原(20)	
東京	神奈川	柏崎 柏崎(20)	
	神奈川	相模川 相模川(27)	
鳥取	神奈川	砂巻橋 砂巻橋(20)	
	鳥取	久見 久見パーライト中(8)、久見採掘現場(5)	
鳥取	鳥取	真流 真流海岸(3)、加茂(4)、厚浜(3)	
	鳥取	真流 真流海岸(3)、加茂(4)、厚浜(3)	

第24表 東日本黒曜石産地の判別群

分析No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn/100 Fe	Sr分率	kg	Fe/K	判別群	エリア	分析No.
1	316.3	126.3	1192.9	809.4	305.0	399.9	779.4	35.29	10.59	13.30	0.58	星ヶ台	諏訪	1	
2	422.2	165.5	987.0	708.7	257.8	345.5	667.9	35.79	10.69	13.03	0.37	星ヶ台?	諏訪?	2	
3	304.2	121.6	1126.4	789.8	296.4	388.8	762.0	35.31	10.79	13.29	0.57	星ヶ台	諏訪	3	
4	220.4	87.0	826.8	590.2	225.1	305.3	597.1	34.36	10.52	13.11	0.57	星ヶ台	諏訪	4	
5	260.4	102.2	979.6	691.0	261.5	347.7	696.7	34.78	10.44	13.16	0.58	星ヶ台	諏訪	5	
6	292.6	116.2	1072.6	735.5	280.0	365.6	729.4	34.85	10.84	13.27	0.56	星ヶ台	諏訪	6	
7	325.9	130.4	1227.1	837.0	315.0	414.4	795.1	35.44	10.63	13.34	0.58	星ヶ台	諏訪	7	
8	256.9	103.6	967.9	671.1	254.4	341.0	662.6	34.79	10.70	13.19	0.58	星ヶ台	諏訪	8	

第25表 測定値および産地推定結果



第64図(1)では星ヶ台群の範囲にプロットされたが、第64図(2)では星ヶ台群の下方にあたる位置にプロットされた。これは、先述したように遺物の風化による影響と考えられ(望月1999)、星ヶ台群に属する可能性が高い。

第25表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

4. おわりに

大波流コショウズワリ遺跡より出土した黒曜石製石器8点について、蛍光X線分析を用いた判別図法による産地推定を行った結果、いずれも諏訪エリア産と推定された。

引用文献

望月明彦 1999 「上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定」『埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡編—』172-179 大和市教育委員会

第6章 総括

第1節 旧石器時代～弥生時代

大菅波コショウズワリ遺跡の調査面積は5,170㎡であるが、ほ場整備などに伴う擾乱・削平が多いため、遺構と遺物が少ないので3つの時代を概観する(第65図)。

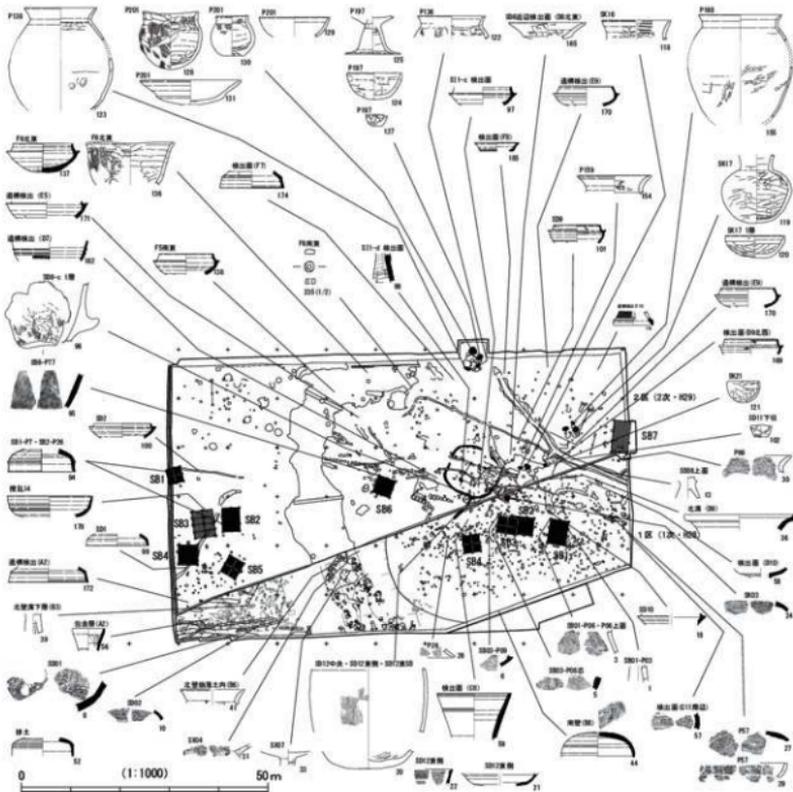
旧石器時代は、1区西側下面包含層から柳葉形尖頭器(71)が出土したことから認識されるが、剥片(72～74・77・224・230)だけでは当時期の人々の活動を説明できない。

縄文時代は1区下層で、SI02?(第18図)は簡易な住居が存在した可能性が指摘できる。しかし、少量の縄文土器・石器などが新しい遺構やNR1や包含層から出土した程度である。2区147は浅い半截竹管文であり、中期前半～中期中葉前半と思われる。2区148は沈線文にRL縄文を施す深鉢で後期前半と思われる。2区149は厚手の波頂部に巻貝刺突を持ち、押し沈線文で文様を施す波頂部で内面を大きく凹ます。押し沈線文から後期前半の気屋式併行の可能性が指摘されたが、当期の福井市波寄三宅田遺跡第19群(工藤ほか2021)の厚手の口縁波頂部には内面の窪みがないことや、厚手の波頂部の押し沈線文は波頂部中央にしかなく、それを沈線で囲むものとはやや異なる。よって、南加賀地方の変容形なのであろうか。粗製深鉢(25・61)があり、中期であろうか。石器などは、地元の石材(凝灰岩:66・68・73～75・78・84・215・218・221・222・232・234、流紋岩:79・220・230、玉髓:76)や(地元系?)の産地不明の石材(ガラス質安山岩:72・216・223、珪質頁岩:65・219・228)や遠隔地石材(下呂石:81・218、諏訪産黒曜石:70・77・224～227・229、蛇紋岩・透閃石岩カ:83)が確認された。NR1を水源や水場として利用していたと思われるが、明確な遺構や遺物は少ない。それは、丘陵部などに存在する遺跡や200m東に位置する小菅波国道遺跡(第3・4図中期中葉～後葉の集落)が当遺跡の遺物の母体であったからなのであろう。小菅波国道遺跡でも蛇紋岩磨製石斧や黒曜石の石鏃・剥片などの遠隔地の石材が出土している。

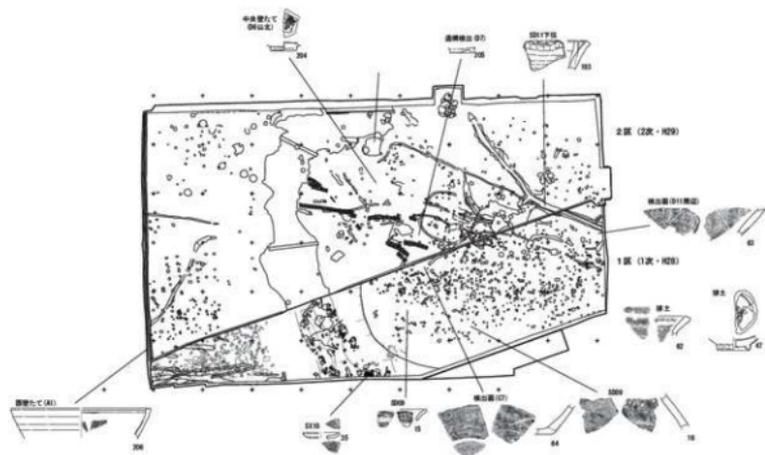
弥生時代は、1区鞍部上面のSX06から中期中葉の土器(32)が出土し、1区西側上層検出面では凝灰岩製の大型蛤刃石斧(82)が確認される程度で、少ない。小菅波国道遺跡は、中期後半の小型方形竪穴(SD437)、区画溝(SD632)か土坑(SD632下層)が遺構として確認され、SD632から大型蛤刃石斧が出土している。包含層などから中期後半～後期末の土器が出土している。

第2節 古墳時代

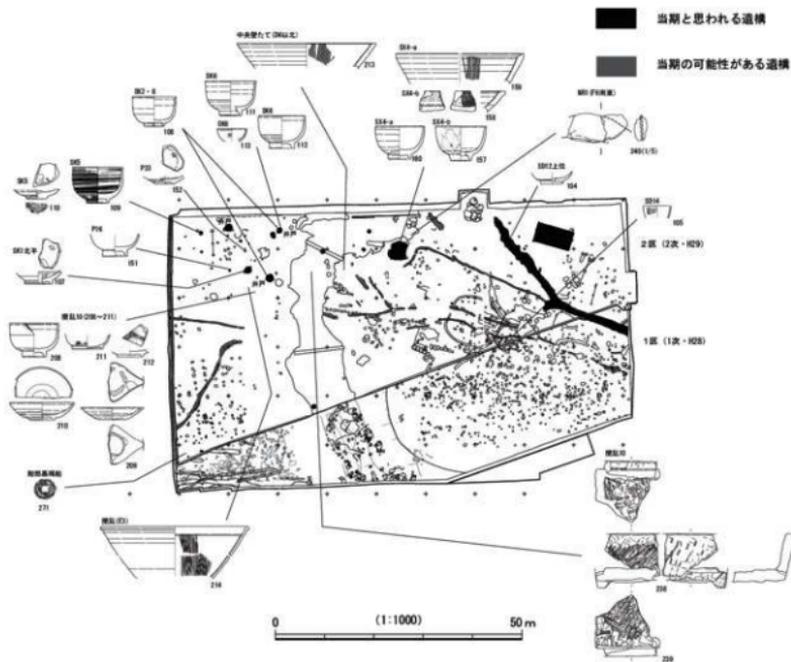
古墳時代後期～末期をまとめてみたい(第67図)。NR1を挟んで両側に遺構がみられるので自然河道にも水流があったか、鞍部の状態であったのであろう。掘立柱建物は9棟、古代までの可能性がある掘立柱建物2棟を確認した。1区での事例から側柱建物と総柱建物の2棟セットが確認され、1区SB01とSB03、1区SB02とSB04、2区SB2とSB1、2区SB4とSB5が想定されよう。1区SB01とSB03は7世紀初頭ぐらいと思われるが、他は5世紀後半～6世紀後半と思われるが、時期の特定は出来ない。2区SB6は側柱の単独棟なので、付近に2×2間の総柱建物が存在した可能性もあろう。2区SB3は桁行4間の総柱建物なので、他の建物とは異なり、2区SB07は他より桁行の間が長いことから、古代の可能性もあろうが、共に時期は確定できない。SB7の西側には柱列が確認され、SIIの周辺にも柱痕跡を持つピットが多いので掘立柱建物が存在した可能性があろう。2区SIIは隅丸方形の周溝を



第67図 古墳時代の遺構・遺物出土位置図(S=1/1000、S=1/10・1/2)



第68図 中世の遺構・遺物出土位置図(S=1/1000、S=1/10)



第69図 近世の遺構・遺物出土位置図(S=1/1000、S=1/10)

持つ竪穴系建物であり、4本の支柱穴と周溝の間に多角形の柱を持つようである。周溝は1区の鞍部方向に排水用の溝(1区SD12の西側)が延びている。土坑はSI1の東側からSB07の西側に多く確認され、北部の土坑群(第43図)も確認された。SI1や土坑群は中期とすべきであろうか。

小菅波国道遺跡では、古墳中・後期の甕・高坏が出土している。

第3節 古代～近世

古代は明確な遺構は、あまり確認されていない(第66図)。2区SK15が古代後半以降の井戸と思われ、SB3・7が古代の可能性もあろう。SB7の西側には柱列が確認され、SI1の周辺にも柱痕跡を持つピットが多いので掘立柱建物が存在した可能性があろう。NR1から墨書土器(139～143)がややまとまって出土しており、水辺の祭祀が想定されよう。

小菅波国道遺跡では、8～12世紀代の須恵器・土師器が報告されている。

中世も明確な遺構は、1区SX10(35)くらいであろう(第68図)。SF1から9世紀代の須恵器が出土していることから、それ以降なので古代末～中世であろうか。図化された遺物も、土師器皿(15・35)、珠洲焼(206)、加賀焼(16・63・64・103)、白磁(205)、青磁(47・204)と少ない。

近世の遺構は、北側に多く確認される(第69図)。17世紀代の遺物を中心に18世紀代もあるものと思われる。井戸と思われるSK2・5・6では、SK2・6には寄生虫卵が確認されている。北側の円形土坑の多くは近世の肥溜めと思われる、SK2・6には廃棄時に便糞が混じり込んだのであろう。SX2は底に筵状の敷物を2枚重ね、その上に径80～95cm程の底を外した結桶を据えたものと推定されおり、その用途が気になる。自然科学分析の結果、NR1の花粉分析では周辺でソバの栽培痕跡が確認され、寄生虫卵分析では淡水魚(鮎の生食など)やカワニナに付く寄生虫卵が確認され、周辺の生業・食生活・残飯処理・衛生状況などが垣間見れた。

大菅波コショウズワリ遺跡の小字は、コショウズワリ=小清水割と漢字をあてることが可能であり、ほ場整備前の状況が伺える。ほ場整備工事により攪乱を受けており、特に2区に多い。また、小菅波国道遺跡(第4図)でも盛土・削平が著しく、開発対象区域内の埋蔵文化財が存在した範囲は限定されていた。それは周辺では一辺70～80m×30mの大規模水田造成(第4図)により、特に水田の北東側の削平が著しいからである。1区東側の水田では須恵器・土師器・石錘(80)などを表採しており、大菅波コショウズワリ遺跡から小菅波国道遺跡は、縄文時代～古代にかけて密ではないが繋がっていた可能性もあろう。

調査区は攪乱が多く、出土遺物は細片が多くて出土量も少なく、遺構の時期などを押さえられなかった。また、柱痕跡がある柱穴を確認するも建物を復元することが難しかった。本書をまとめるにあたり、調査・整理・原稿作成担当者以外の協力を得たので指名を記して感謝したい。

敬称省略、赤澤徳明、浅野豊治、石川日出志、川畑 誠、高田秀樹、刀根比呂子、藤田邦雄、藤根 久、安中哲徳、吉田 淳、米澤義光、和田龍介。

参考文献

- 戸根比呂子 2019 『小菅波国道遺跡発掘調査報告書』加賀市教育委員会
 工藤俊樹ほか 2021 『波寄三宅田遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター

報告書抄録

ふりがな	かがし おおすがなみこしょうざわりいせき								
書名	加賀市 大菅波コショウズワリ遺跡								
副書名	北陸新幹線建設事業(金沢・敦賀間)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書								
シリーズ名									
シリーズ番号	6								
編著者名	久田正弘、西山美那、森 将史、野口真利江、小林克也、藤根 久								
編集機関	公益財団法人石川県埋蔵文化財センター								
所在地	〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1 TEL(076)229-4477								
発行機関	石川県教育委員会・公益財団法人石川県埋蔵文化財センター								
発行年月日	2022年3月22日								
所収遺跡	所在地	コ	ー	ド	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号						
大菅波コショウズワリ遺跡	石川県 加賀市 大菅波地内	17206	643000	36度 19分 3秒	136度 20分 23秒	20160926 20161214 20170414 20170731	1,800㎡ 3,370㎡	記録保存 調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
大菅波コショウズワリ遺跡	集落跡	旧石器時代		尖頭器、剥片	柳葉形				
		縄文時代	竪穴建物、小穴	縄文土器、磨製石斧、打製石斧、石鏃、石匙	黒曜石(諏訪産)、下呂石				
		弥生時代		弥生土器、大型蛤刃石斧					
		古墳時代	掘立柱建物、周溝を持つ建物、土坑	土師器、須恵器	2棟セットを確認				
		奈良・平安時代	小穴、井戸	土師器、須恵器	河道に墨書土器				
		鎌倉・室町時代	小穴、道路状遺構	土師器、越前焼、加賀焼、白磁、青磁					
		江戸時代	掘立柱建物、井戸、土坑、溝	陶磁器、銅銭、石製品					
要約	橋立丘陵の裾に立地する遺跡で、南側に向かって低くなる。低い部分には鞍部・自然河道があり、下層から柳葉形尖頭器や剥片類、磨製石斧が出土した。自然河道は江戸時代まで存在していたようである。古墳時代後期以後には掘立柱・総柱建物の2棟セットが確認され、古代では墨書土器を使った水辺の祭祀が行われたようである。江戸時代になると、調査区北側に遺構が多く確認され、掘立柱建物や井戸の他に、肥溜めと思われる土坑があるので、耕作地も存在したようである。寄生虫卵分析により、鮎やカワナなどを利用していたことが判明した。								



1区遠景（北東から）



1区遠景（南東から）



1区遠景（南東から）



1区SB01～04全景（上が北）



1区西側上層（北西から）



1区西側上層全景（西から）



1区西側下層全景（西から）



1区下層河跡全景（北西から）



1区SB01～04検出状況（東から）



1区SB01～04完掘状況（南東から）



1区SB01完掘状況(東から)



1区SB01検出状況(北から)



1区SB01-P02断面(東から)



1区SB01-P03断面(東から)



1区SB01-P10断面(南から)



1区SB02宝掘状況（北から）



1区SB02検出状況（北から）



1区SB02-P05柱根出土状況（南から）



1区SB02-P07断面（南から）



1区SB02-P09断面（南から）



1区SB03完掘状況（北から）



1区SB03検出状況（北から）



1区SB03-P02断面（東から）



1区SB03-P08断面（西から）



1区SB03-P09断面（西から）



1区SB04定掘状況（東から）



1区SB04検出状況（北から）



1区SB04-P03断面（東から）



1区SB04-P04断面（南から）



1区SB04-P06断面（北東から）



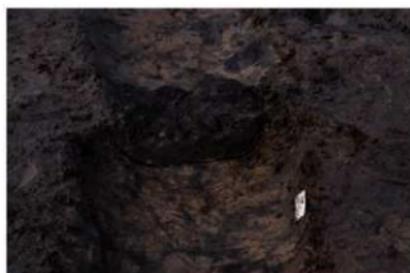
1区SD02断面 (西から)



1区SD03断面 (西から)



1区SD06断面 (北から)



1区SD10断面 (南東から)



1区SD12西部断面 (西から)



1区SD12東部断面 (西から)



1区SD12遺物出土状況 (南から)



1区SD13東部断面 (南東から)



1区SD08全景（北西から）



1区SD08断面（北西から）



1区検出面大型始刃石斧出土状況（北から）



1区P07縄文土器出土状況（西から）



1区尖頭器出土状況（北から）



1区出土遺物1



1区出土遺物 2





2-1・2-2区透景（南から）



2-1・2-2区透景（北から）



2-1・2-2区透景（南から）



2-3区透景（北から）



2区2面全景 (右が北)



調査区全景 (上が北)



2区SB1完掘状況（北東から）



2区SB1-P7断面（北東から）



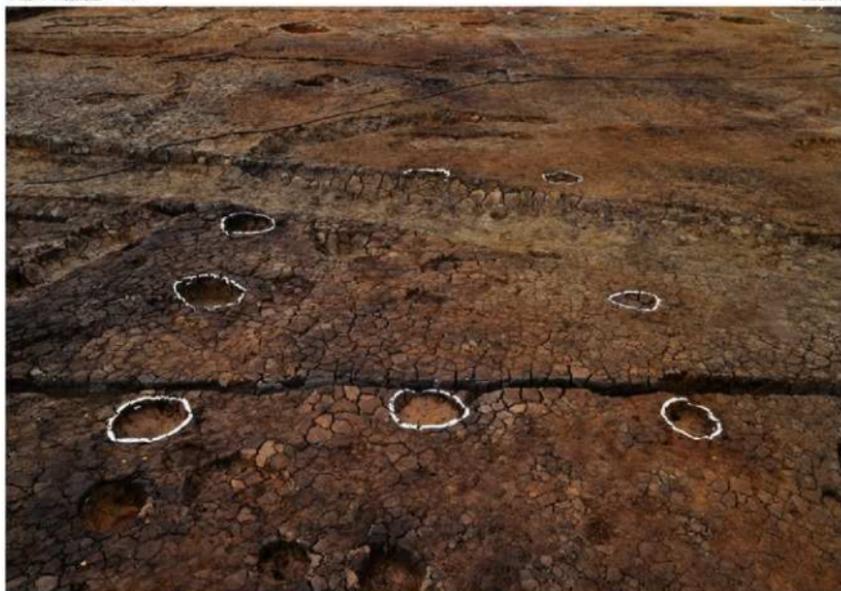
2区SB1-P10断面（北西から）



2区SB1-P32柱根出土状況（北東から）



2区SB1-P67柱根出土状況（東から）



2区SB2実掘状況(南から)



2区SB2・3棟出状況(東から)



2区SB2-P25断面(西から)



2区SB2-P26断面(西から)



2区SB2-P27断面(西から)



2区SB3完掘状況(南から)



2区SB3-P29断面(西から)



2区SB3-P40断面(西から)



2区SB3-P41断面(西から)



2区SB3-P44断面(西から)



2区SB4完掘状況(南から)



2区SB4-P46断面(西から)



2区SB4-P50完掘状況(西から)



2区SB4-P51柱根出土状況(北から)



2区SB4-P64断面(北西から)



2区SB5完掘状況(南西から)



2区SB5-P55柱根出土状況(南東から)



2区SB5-P59柱根・礎板出土状況(北東から)



2区SB5-P62礎板出土状況(北東から)



2区SB5-P63木片出土状況(北東から)



2区SB6完掘状況(南西から)



2区SB6検出状況(南東から)



2区SB6-P76断面(北西から)



2区SB6-P77断面(北西から)



2区SB6-P78断面(北東から)



2区SB7完掘状況(南から)



2区SB7掘削作業(南から)



1区SB7-P54断面(西から)



2区SB7-P132断面(西から)



2区SB7-P133断面(西から)



2区SI1 他検出状況 (南西から)



2区SI1・SD8 作業状況 (南西から)



2区SD1断面1 (北東から)



2区SD2断面 (東から)



2区SD4断面 (南から)



2区SD8断面2 (東から)



2区SD9断面 (東から)



2区SD10断面 (南東から)



2区SD11・12断面 (北東から)



2区SD15断面 (西から)



2区SK1断面(南東から)



2区SK2遺物出土状況(北から)



2区SK2断面(北から)



2区SK3断面(南から)



2区SK4断面(南から)



2区SK5断面(西から)



2区SK5壘・陶磁器出土状況(西から)



2区SK5完掘状況(東から)



2区SK 6断面 (北から)



2区SK 6遺物出土状況 (東から)



2区SK 6桶枠 (南から)



2区SK 7断面 (東から)



2区SK 8横出状況 (南西から)



2区SK 8断面 (南から)



2区SK10断面 (西から)



2区SK11断面 (南から)



2区SK12断面 (南から)



2区SK12完掘状況 (北から)



2区SK13断面 (南から)



2区SK14断面 (南から)



2区SK15断面 (南東から)



2区SK15下部断面 (南東から)



2区SK15完掘状況 (南東から)



2区SK16断面 (南から)



2区SK17遺物出土状況（南東から）



2区SK17断面（南から）



2区SK17土器器出土状況1（北西から）



2区SK17土器器出土状況2（北西から）



2区SK17他完掘状況（南から）



2区SK18断面（南東から）



2区SK19・21断面（南から）



2区SK19・21完掘状況（南から）



2区SX2 竈物全景（東から）



2区SX2 上位断面・竈物出土状況（東から）



2区SX2 竈物出土状況（南から）



2区SX2 竈物の重なり（北から）



2区SX2 完掘状況（南から）



2区SX4-b遺物出土状況(北東から)



2区SX4・SK8完掘状況(南から)



2区SX7断面(南西から)



2区SX8・P97~P102(南東から)



2区土坑群(南から)



2区SD10(南東から)



2区SD9・11・12遺(南東から)



2区2面全景(南から)



2区SF全景（東から）



2区SF1 検出状況（東から）



2区SF1-P111~113断面（南西から）



2区SF1・6・7（南から）



2区SF2・3（北東から）



2区NR1 墨書土器出土状況1 (南西から)



2区NR1 墨書土器出土状況2 (南西から)



2区NR1 断面1 (南東から)



2区NR1 断面2 (南西から)



2区NR1 遺物出土状況 (北東から)



2区NR1 発掘状況 (南から)



2区NR1 北壁断面 (南西から)



2区NR1 北壁断面2 (南西から)



2区NR1 白玉出土状況 (北東から)



2区NR1 黒曜石出土状況 (西から)



2区出土物1

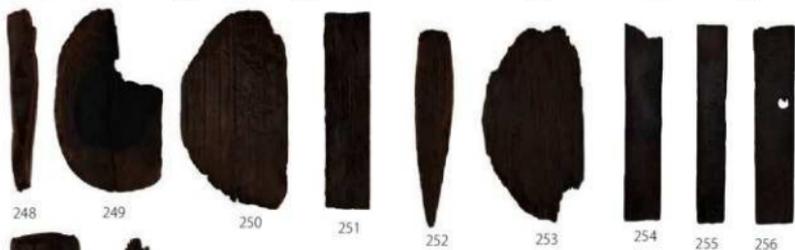


2区出土遺物 2





2区出土遺物4



加賀市 大菅波コシヨウズワリ遺跡

発行日 令和4(2022)年3月22日

発行者 石川県教育委員会
〒920-8575 石川県金沢市藤月1丁目1番地
電話 076-225-1842(文化財課)

公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター
〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
電話 076-229-4477
E-mail daihyou@shikawa-mabun.or.jp

印刷 田中昭文章印刷株式会社
〒920-0377 石川県金沢市打木町東1448番地
電話 076-269-7788